

下味野古墳群Ⅱ 下味野童子山遺跡

中国横断自動車道姫路鳥取線整備促進事業に係る
下味野46～55号墳、下味野童子山遺跡の発掘調査

2004.3

財団法人 鳥取市文化財団

下味野古墳群Ⅱ 下味野童子山遺跡

中国横断自動車道姫路鳥取線整備促進事業に係る
下味野46～55号墳、下味野童子山遺跡の発掘調査

2004. 3

財団法人 鳥取市文化財団

序 文

鳥取市内には数多くの原始・古代遺跡が存在しており、近年の各種開発事業の増加とともに発掘調査が必要となり、消えていく遺跡も増えております。しかしながら、埋蔵文化財は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、財団法人

鳥取市文化財団では、開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関の協力を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めています。

さて、今回実施した下味野古墳群・下味野童子山遺跡の調査は、中国横断自動車道姫路鳥取線整備促進事業に係る発掘調査として、平成14年度に調査を行いました。この古墳群および遺跡は千代川左岸の丘陵部に展開し、同古墳群中には全長73mを測る23号墳を含め前方後円墳5基が分布しています。平成12年度に当調査地の北側丘陵で古墳5基の本格的な発掘調査が行われ、南側丘陵の篠田、横枕、倭文地区でも丘陵部の調査が続いています。今回の調査によって、古墳10基をはじめ、弥生時代の竪穴住居3棟、段状遺構、土坑、溝状遺構などが見つかり、弥生時代から古墳時代にかけての土器、鉄製品、玉類などが出土しました。これらの資料は、周辺遺跡の調査成果をも合わせ、当地域のみならず古代因幡地方の歴史を探る上で大きく役立っていくものと確信いたします。ささやかな冊子ではありますが、研究者のみならず広範な市民各位による郷土の歴史究明など、関係各位の埋蔵文化財の理解に供していただければ幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ関係各位の方々に、心から感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 鳥取市文化財団
理事長 石谷雅文

例 言

1. 本書は、中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進事業の事前調査として実施した^{しもあじの}下味野古墳群・^{しも}下味野童子山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、財団法人 鳥取開発公社の委託を受けて、財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センターが、平成14、15年度に実施した。
3. 発掘調査を実施した遺跡の所在地は、鳥取市下味野字童子山である。
4. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
5. 現地実測・写真撮影、遺構図面の浄書は、調査員、補助員を中心に発掘調査参加者の協力のもとに行い、出土遺物の整理および遺物実測・浄書は、下多みゆき、濱橋博子を中心として行った。出土遺物観察表は下多みゆきが作成し、杉谷美恵子氏の協力をいただいた。本書の執筆、編集は谷口恭子が担当し、木原美和がこれを補佐した。
6. 現地調査から報告書作成にいたるまで多くの方々からの指導、助言ならびに協力をいただいた。特に出土石製品の石材同定を鳥取市文化財審議会委員 山名 巖 先生にお願いし、お手を煩わせた。厚く感謝いたします。

凡 例

1. 本書における方位は、磁北を示す。また、レベルは海拔標高である。
2. 本書で使用した遺構の略号は、墳丘外の埋葬施設；SX、竪穴住居；SI、土坑(土壙)；SK、溝状遺構；SD、ピット；Pである。
3. 今回の調査によって出土した遺物は、調査年度、調査区、古墳名、主体部番号、遺物台帳登録番号、取り上げ年月日を基本的に注記し、写真や図面などの記録類も同様である。
(例；2002姫鳥 下味野46号墳 主体部 No021 2002.07.21)

本文目次

序文	
例言	
凡例	
第1章 発掘調査の経緯	
第1節 発掘調査にいたる経緯	1
第2節 発掘調査の経過	1
第3節 調査の組織・体制	2
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	3
第3章 調査の結果	
第1節 下味野古墳群の立地と構成	9
第2節 下味野古墳群の調査	
1. 下味野46～55号墳の調査	19
2. 弥生時代の埋葬施設の調査	43
第3節 下味野童子山遺跡の調査	
1. A区の調査	
(1) 竪穴住居	46
(2) 土坑	50
(3) その他の遺構と遺物	52
2. B区の調査	
(1) 竪穴住居	54
(2) 段状遺構	56
(3) 土坑	59
(4) その他の遺構と遺物	61
(出土遺物観察表)	
第4節 まとめ	72
写真図版	
報告書抄録	

插图目次

第1图	下味野古墳群・下味野童子山遺跡 周辺遺跡分布図……………4	第40图	下味野童子山遺跡A区SI-01 出土遺物実測図(3)……………50
第2图	下味野古墳群・下味野童子山遺跡 調査地位置図……………6	第41图	下味野童子山遺跡A区SK-01実測図 ……51
第3图	下味野古墳群・下味野童子山遺跡 調査前地形図……………7・8	第42图	下味野童子山遺跡A区SK-02実測図 ……51
第4图	下味野童子山遺跡B区全体図……………10	第43图	下味野童子山遺跡A区SK-03実測図 ……51
第5图	下味野古墳群・下味野童子山遺跡 A区全体図……………11・12	第44图	下味野童子山遺跡A区SK-04実測図 ……51
第6图	下味野46~51号墳墳丘断面図……………13・14	第45图	下味野童子山遺跡A区SK-05実測図 ……51
第7图	下味野52~55号墳墳丘断面図……………15・16	第46图	下味野童子山遺跡A区SK-06実測図 ……51
第8图	下味野童子山遺跡B区断面図……………17・18	第47图	下味野童子山遺跡A区SK-07実測図 ……51
第9图	下味野46号墳主体部実測図……………19	第48图	下味野童子山遺跡A区SK-08実測図 ……51
第10图	下味野48号墳第1主体部実測図……………21	第49图	下味野童子山遺跡A区SD-02実測図 ……53
第11图	下味野48号墳第2主体部実測図……………22	第50图	下味野童子山遺跡A区SD-02 出土遺物実測図……………53
第12图	下味野49号墳主体部実測図……………23・24	第51图	下味野童子山遺跡A区溝状石列遺構 実測図……………53
第13图	下味野49号墳主体部出土遺物実測図……………25	第52图	下味野童子山遺跡A区遺構外 出土遺物実測図(1)……………54
第14图	下味野50号墳主体部出土遺物実測図……………26	第53图	下味野童子山遺跡A区遺構外 出土遺物実測図(2)……………54
第15图	下味野50号墳主体部実測図……………27・28	第54图	下味野童子山遺跡B区SI-02実測図 ……55
第16图	下味野51号墳主体部実測図……………29	第55图	下味野童子山遺跡B区SI-02 出土遺物実測図……………55
第17图	下味野51号墳出土遺物実測図……………29	第56图	下味野童子山遺跡B区SI-03実測図 ……56
第18图	下味野52号墳主体部実測図……………30	第57图	下味野童子山遺跡B区段状遺構1・2 実測図……………57
第19图	下味野52号墳主体部出土遺物実測図……………31	第58图	下味野童子山遺跡B区段状遺構1 出土遺物実測図……………58
第20图	下味野52号墳周溝内出土遺物実測図……………31	第59图	下味野童子山遺跡B区段状遺構2 出土遺物実測図(1)……………58
第21图	下味野53号墳主体部実測図……………32	第60图	下味野童子山遺跡B区段状遺構2 出土遺物実測図(2)……………58
第22图	下味野53号墳主体部出土遺物実測図……………32	第61图	下味野童子山遺跡B区段状遺構1・2 北側出土遺物実測図……………58
第23图	下味野54号墳主体部出土遺物実測図……………33	第62图	下味野童子山遺跡B区段状遺構3 実測図……………59
第24图	下味野54号墳外護列石実測図……………34	第63图	下味野童子山遺跡B区段状遺構3 出土遺物実測図……………59
第25图	下味野54号墳主体部実測図……………35・36	第64图	下味野童子山遺跡B区SK-09実測図 ……60
第26图	下味野54号墳外護列石周辺 出土遺物実測図……………37	第65图	下味野童子山遺跡B区SK-10実測図 ……60
第27图	下味野54号墳出土遺物実測図(1)……………38	第66图	下味野童子山遺跡B区SK-10 出土遺物実測図……………60
第28图	下味野54号墳出土遺物実測図(2)……………38	第67图	下味野童子山遺跡B区土器溜実測図……………61
第29图	下味野55号墳横穴式石室実測図……………39・40	第68图	下味野童子山遺跡B区土器溜 出土遺物実測図……………61
第30图	下味野55号墳石室内出土遺物実測図……………41	第69图	下味野童子山遺跡B区遺構外 出土遺物実測図……………61
第31图	下味野55号墳出土遺物実測図……………42	第70图	土器・鉄製品細部名称図……………62
第32图	下味野古墳群SX-01実測図 ……44		
第33图	下味野古墳群SX-01出土遺物実測図 ……45		
第34图	下味野古墳群SX-02実測図 ……45		
第35图	下味野古墳群SX-02出土遺物実測図 ……45		
第36图	下味野童子山遺跡A区SI-01実測図 ……46		
第37图	下味野童子山遺跡A区SI-01遺物 出土状況実測図……………47		
第38图	下味野童子山遺跡A区SI-01 出土遺物実測図(1)……………48		
第39图	下味野童子山遺跡A区SI-01 出土遺物実測図(2)……………49		

図版目次

- 図版 1 下味野古墳群・下味野童子山遺跡調査地遠景(北東上空から)
下味野古墳群・下味野童子山遺跡調査地及平成12年度調査地遠景(南東上空から)
- 図版 2 下味野古墳群・下味野童子山遺跡調査前(北東上空から)
下味野古墳群・下味野童子山遺跡調査地全景(北東上空から)
下味野古墳群・下味野童子山遺跡A区全景(南東上空から)
- 図版 3 下味野古墳群・下味野童子山遺跡A区調査前(南西から)
下味野古墳群・下味野童子山遺跡A区土層ベルト設定状況(南西から)
下味野古墳群・下味野童子山遺跡A区全景(南西から)
- 図版 4 下味野46号墳土層ベルト設定状況(南西から)
下味野46号墳完掘状況(南西から)
下味野46号墳主体部検出状況(南西から)
下味野46号墳主体部完掘状況(北西から)
下味野47号墳土層ベルト設定状況(北西から)
下味野47号墳墳丘遺存状況(北西から)
下味野48号墳土層ベルト設定状況(北東から)
下味野48号墳完掘状況(南西から)
- 図版 5 下味野48号墳第1主体部検出状況(南東から)
下味野48号墳第1主体部完掘状況(南東から)
下味野48号墳第2主体部検出状況(北から)
下味野48号墳第2主体部完掘状況(北から)
下味野49号墳土層ベルト設定状況(北東から)
下味野49号墳全景(南西から)
下味野49号墳主体部断面上層(南東から)
下味野49号墳石棺蓋石検出状況(北西から)
- 図版 6 下味野49号墳石棺検出状況(北西から)
下味野49号墳石棺検出状況(北東から)
下味野49号墳石棺内遺物出土状況(北西から)
下味野49号墳主体部完掘状況(北東から)
下味野50号墳土層ベルト設定状況(南西から)
下味野50号墳完掘状況(南西から)
下味野50号墳南西周溝土層断面(南東から)
- 下味野50号墳墳丘断面南側(南東から)
- 図版 7 下味野50号墳主体部断面上層(西から)
下味野50号墳石棺蓋石状況(北から)
下味野50号墳石棺検出状況(北から)
下味野50号墳石棺検出状況(西から)
下味野50号墳石棺内遺物出土状況(南から)
下味野50号墳主体部完掘状況(東から)
下味野51号墳全景(南西から)
下味野51号墳西周溝土層断面(南西から)
- 図版 8 下味野51号墳主体部検出状況(北西から)
下味野51号墳主体部完掘状況(南東から)
下味野52号墳土層ベルト設定状況(北東から)
下味野52号墳全景(北西から)
下味野52号墳主体部検出状況(北東から)
下味野52号墳主体部遺物出土状況(北東から)
下味野53号墳土層ベルト設定状況(北東から)
下味野53号墳全景(北西から)
- 図版 9 下味野53号墳主体部検出状況(南西から)
下味野53号墳主体部遺物出土状況(北東から)
下味野54号墳土層ベルト設定状況(北東から)
下味野54号墳全景(北西から)
下味野54号墳全景(北東から)
下味野54号墳列石検出状況(北東から)
下味野54号墳墳丘断面列石部分(北東から)
下味野54号墳主体部断面(南西から)
- 図版10 下味野54号墳主体部検出状況(北東から)
下味野54号墳主体部遺物出土状況(南西から)
下味野55号墳調査前(南西から)
下味野55号墳土層ベルト設定状況(北西から)
下味野55号墳全景(北西から)
下味野55号墳石室検出状況(北東から)
下味野55号墳石室内遺物出土状況(北東から)
下味野55号墳石室内遺物出土状況(南東から)
- 図版11 下味野49号墳裾SX-01・02検出状況(北西から)
下味野古墳群SX-01土層断面(北西から)
下味野古墳群SX-01検出状況(北西から)
下味野古墳群SX-02検出状況(北西から)

- 下味野童子山遺跡A区SI-01焼土検出状況
(南東から)
- 下味野童子山遺跡A区SI-01完掘状況
(北西から)
- 下味野童子山遺跡A区SI-01遺物出土状況
(北東から)
- 下味野童子山遺跡A区SI-01遺物出土状況
(北東から)
- 図版12 下味野童子山遺跡A区SK-01検出状況
(南東から)
- 下味野童子山遺跡A区SK-02検出状況
(北西から)
- 下味野童子山遺跡A区SK-03検出状況
(南東から)
- 下味野童子山遺跡A区SK-04検出状況
(南東から)
- 下味野童子山遺跡A区SK-05検出状況
(南東から)
- 下味野童子山遺跡A区SK-06検出状況
(南西から)
- 下味野童子山遺跡A区SK-07検出状況
(北西から)
- 下味野童子山遺跡A区SK-08検出状況
(南から)
- 図版13 下味野童子山遺跡A区SD-02検出状況
(南から)
- 下味野童子山遺跡A区溝状石列検出状況
(南西から)
- 下味野童子山遺跡B区SI-02検出状況
(南東から)
- 下味野童子山遺跡B区SI-02検出状況
(南西から)
- 下味野童子山遺跡B区SI-03土層断面
(南東から)
- 下味野童子山遺跡B区SI-03検出状況
(南西から)
- 下味野童子山遺跡B区段状遺構1・2土層
断面(南東から)
- 下味野童子山遺跡B区段状遺構1・2検出
状況(南東から)
- 図版14 下味野童子山遺跡B区段状遺構1・2遺物
出土状況(南東から)
- 下味野童子山遺跡B区段状遺構1遺物出土
状況(北西から)
- 下味野童子山遺跡B区段状遺構3検出状況
(南東から)
- 下味野童子山遺跡B区土器溜検出状況
(北西から)
- 下味野童子山遺跡B区SK-09土層断面
(北東から)
- 下味野童子山遺跡B区SK-09検出状況
(南から)
- 下味野童子山遺跡B区SK-10検出状況
(西から)
- 下味野童子山遺跡B区SK-10遺物出土状況
(北から)
- 図版15 下味野49号墳主体部出土遺物
下味野50号墳主体部出土遺物
下味野51号墳出土遺物
下味野52号墳主体部出土遺物
下味野54号墳主体部出土遺物
- 図版16 下味野54号墳出土遺物
下味野55号墳石室内出土遺物
- 図版17 下味野55号墳石室内出土遺物
下味野55号墳出土遺物
下味野童子山遺跡A区SI-01出土遺物
- 図版18 下味野童子山遺跡A区SI-01出土遺物
下味野童子山遺跡A区遺構外出土遺物
下味野童子山遺跡B区SI-02出土遺物
- 図版19 下味野童子山遺跡B区SI-02出土遺物
下味野童子山遺跡B区段状遺構1出土遺物
下味野童子山遺跡B区段状遺構2出土遺物
下味野童子山遺跡B区段状遺構3出土遺物
下味野童子山遺跡B区段状遺構1・2北側
出土遺物
下味野童子山遺跡B区SK-10出土遺物

第1章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査にいたる経緯

下味野古墳群は、鳥取市下味野の標高40～160m程度の丘陵上およびその裾部に展開する古墳群である。県教育委員会の分布調査などによって、丘陵線上に前方後円墳5基を含め19基、そこから東へ派生する稜線上にも近年古墳の分布が明らかとなり、現在までに計55基の古墳が確認されている。平野部では、1969年(昭和44)、圃場整備に伴い服部集落との間の水田で服部遺跡の調査が行われ、弥生時代中～後期の土器とともに田下駄、大足が出土している。しかしながら丘陵部ではそれ以前に本格的な発掘調査が行われたことはなく、平成11、12年に服部墳墓群の調査を皮切りに、同12年、南東へ延びる標高68～77m下味野丘陵で古墳5基(40～44号墳)、横枕地区でも古墳群の調査が行われている。下味野23号墳(全長73m)をはじめ前方後円墳が集中する下味野地域であるが、鳥取市内でも原始・古代の様相がいまひとつ不明瞭な地域のひとつでもあった。

今回の発掘調査の契機となった中国横断自動車道姫路鳥取線整備促進事業は、下味野丘陵の裾部に姫鳥線建設予定路線が計画されているものである。工事範囲内には複数の古墳の分布が認められることから、鳥取市教育委員会が平成12年度に試掘調査を実施した。調査の結果、古墳周溝状の遺構、土器器などの遺物が確認された。鳥取市教育委員会はこれらの試掘結果をもとに関係機関との協議を行ったが、路線内の遺跡は現状での保護・保存が難しく、記録保存で対応することとなった。

第2節 発掘調査の経過

下味野古墳群の調査は、財団法人鳥取開発公社の委託を受け、平成14年度に財団法人鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財調査センターが行った。

調査は、平成14年5月から開始した。資材の整備や資材搬入などの調査準備の後、立ち木の伐開整理の後、尾根上の古墳頂部を結ぶラインに基準ライン(A～J杭)を設け、そのラインに直交あるいは角度を振って、各古墳について測量杭を設定した。その後、現況の地形を業者委託により航空測量し、細かな地形補足・修正については手取りで対応した。表土除去作業は北側尾根先端の46号墳から47号墳、48号墳から50号墳、更に南東斜面へと順次進め、合わせて墳丘の検出を行った。谷にあたる調査区裾付近はトレンチを掘削して遺構有無の確認を行い、また西の丘陵部の調査も並行して行った。土層観察ベルトの断面実測・写真撮影による記録、土層ベルト除去後の墳丘遺存状況の写真撮影、測量を行い、続いて埋葬施設の検出、掘り下げに取りかかった。

その結果、尾根線上に中期の方墳3基が並び、その南東緩斜面側に隣接してやや小ぶりの中期の方墳2基が配置し、更にその斜面下位に後期の円墳が築造されるといった展開が明らかになった。また、稜線上の古墳の埋葬施設は箱式石棺を用い、中期の小規模古墳は木棺あるいは直葬、更に下位に位置する円墳は横穴式石室を採用していた。主体部上部は流失および攪乱などで46号墳のように内容が不明瞭な古墳もみられたが、49号墳では刀子2点、50号墳では高杯土器枕と刀子がみられ、54号墳では馬具や須恵器杯蓋、勾玉、55号墳では石室内からまとまった須恵器蓋杯や壺、鉄釘、鉄刀、鉄鏃などが出土した。また、54号墳は外部施設として南東斜面に3列の外護列石を有する。

これら古墳10基以外に、弥生中期の埋葬施設、竪穴住居、土坑、溝状遺構などを検出し、古墳以外に弥生時代中期の生活面が存在することが明らかとなった(A区)。とくに径4mを測る竪穴住居SI-01は焼失住居で、多量の焼土、炭、炭化材とともにつぶれた状態の弥生土器数個体が床面で検出され、当地方で弥生中期の遺跡が少ない中、貴重な資料となった。東側の丘陵(B区)でも竪穴住居、段状遺構、土坑を検出し、弥生中期を中心とした遺物が出土した。

こうして、埋葬施設および遺構・遺物の記録・取り上げを適宜行った。最終的に古墳は墳丘を断ち

割って断面調査を行い、現地調査を平成14年8月末に終了した。

出土した遺物、写真や図面などの記録類の整理は、現地調査と並行して進め、土器については、水洗い、バインダー処理の後、注記・復元作業を行った。また、鉄器については一部業者委託による応急保存処理を行った。報告書作成作業は、平成15年度に行った。

第3節 調査の組織・体制

発掘調査の組織、体制は以下のとおりである。

平成14年度	調査主体	財団法人	鳥取市文化財団	
	理事長	竹内	功	(鳥取市長)
	副理事長	福田	泰昌	
		中川	俊隆	(鳥取市教育長)
	常務理事	小谷	莊太郎	(事務局長兼務)
	調査指導	鳥取市教育委員会	文化課	
	事務局	財団法人	鳥取市文化財団	鳥取市埋蔵文化財調査センター
	所長	前田	均	
	主幹	山田	真宏	
	調査事務	秋田	澄世	
		白岩	千足	
		水戸口	直美	
	調査担当	財団法人	鳥取市文化財団	鳥取市埋蔵文化財調査センター
	調査員	谷口	恭子	
	調査補助員	杉谷	美恵子	
		神谷	伊鈴	
		杉本	利子	
		小杉	雄貴	
平成15年度	調査主体	財団法人	鳥取市文化財団	
	理事長	石谷	雅文	(鳥取市副市長)
	副理事長	中川	俊隆	(鳥取市教育長)
		三田	三香子	
	常務理事	小谷	莊太郎	
	調査指導	鳥取市教育委員会事務局庶務課	文化財室	
	事務局	財団法人	鳥取市文化財団	鳥取市埋蔵文化財調査センター
	所長	前田	均	
	主幹	山田	真宏	
	調査事務	秋田	澄世	
		白岩	千足	
	調査担当	財団法人	鳥取市文化財団	鳥取市埋蔵文化財調査センター
	調査員	谷口	恭子	
	調査補助員	木原	美和	
		下多	みゆき	
		濱橋	博子	

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

鳥取市は県東部に位置し、面積237.25km²、人口15万人余りを擁する県庁所在地である。市域の三方は山に囲まれ、北は日本海を臨む鳥取砂丘が広がる。地域の中央には中国山地を源とする千代川が流れ、この下流域に広がる鳥取平野は、縄文海進時には入り組んだ内湾状を呈していたと見られ、海退に伴う湖沼化と海岸部の砂洲の発達、千代川が運ぶ膨大な土砂の堆積によって形成された沖積平野である。

今回調査を行った下味野古墳群・下味野童子山遺跡は、JR鳥取駅の南西約4.5km、鳥取市下味野地内に所在する。中国山地から派生する南から北へ延びる千代川左岸丘陵のうち、標高294mの八町山を頂としてさらに北東へ延びる丘陵筋から南東へ派生する尾根上、標高38～50mに立地する。現在は鳥取刑務所が所在するものの東に小平野が広がり、大井手川を介して味野平野、千代川、更に鳥取平野が眺望できる。現在では圃場整備されなだらかな水田面が広がるものの古くは河川の氾濫を受けるなどして現在とはやや異なった微地形が展開していたものと想像される。遺跡の周辺は元々はのどかな田園地帯であるが、1985年(昭和60年)の鳥取国体を一つの契機として、有富川から北側の地域では開発の著しい地帯となっており、下味野地域でも今後姫路鳥取線の開通に伴いその様相は一変するものと思われる。

【縄文時代】 鳥取平野周辺で最初に人の足跡がたどれるのは、浜坂地内の砂丘で採集された黒曜石製の有舌尖頭器で、旧石器時代まで遡る可能性をもつ。続く縄文時代早期の遺跡として中国山地山間部に位置する智頭町智頭枕田遺跡が挙げられ、平成14年、早期および中期末～後期初頭の竪穴住居多数が発見されるなど西日本最大級の縄文集落として注目されている。鳥取平野周辺では、市域の西端、白兎海岸から1km内陸の内海中所在遺跡で前期中頃の磯ノ森式土器が後期の土器とともに採集されている他、前期末の大歳山式土器が千代川東岸の丘陵に立地する美和古墳群下層遺跡、湖山池南東岸の低湿地に立地する桂見遺跡から出土している。中期の遺跡としては断片的ながら砂丘地に立地する栃木山、追後、天神山遺跡が挙げられる。この他、砂丘後背地の低湿地に立地しそれぞれ前、中期から始まる福部村栗谷遺跡、同村直遺跡、湖山池周辺で展開する桂見遺跡、布勢第1遺跡、青島遺跡が後期を中心とする縄文遺跡として有名である。桂見遺跡では平成6、7年度に相次いで丸木舟が出土し話題となり、布勢第1遺跡では木組みをもった水路、漆塗りの木製広口壺・腕輪が出土し、高度な漆技術が示された。この他千代川左岸では、山ヶ鼻遺跡で二次堆積ながら後期中葉～晩期前葉の土器群が、千代川自然堤防上に立地する古海遺跡では突帯文土器の良好な資料が、有富川南岸山裾に展開する本高円ノ前遺跡でも少量ながら突帯文土器が、横枕地区の低丘陵から落とし穴群とわずかに後期の土器が、岩本第2、帆城、湖山第2、岩吉、大桝、里仁(仮称)遺跡などでも少量の土器片が出土している。なお、古海遺跡、布勢第1遺跡では後期から晩期へかけて遺跡の立地が推移しており、弥生時代を迎えるにあたり遺跡は自然堤防上、平野中心部の微高地へと進出する傾向が窺える。

【弥生時代】 弥生集落の状況は、縄文時代晩期からの遺跡が前期の遺物を断片的に出土し中期へは継続しない傾向がみられる。そんな中、鳥取平野の拠点集落と考えられている岩吉遺跡は千代水平野の砂洲を中心とした微高地に立地し、現在のところ鳥取平野で最初に稲作を導入した遺跡とみられている。中期中頃、自然堤防上に出現する古海、山ヶ鼻、菖蒲、服部、秋里遺跡は、一部岩吉遺跡の分村的な遺跡と考えられている。特に弥生中期の遺跡として知られる山ヶ鼻遺跡では前期から中期前葉までの遺物や遺構は確認されておらず、中期中葉になり突如土坑や溝状遺構が検出され盛期を迎える。隣接する菖蒲遺跡でも中期後葉が初源である。中期後葉になると帆城、湖山第2、布勢第2、大桝、北村恵儀谷遺跡、本高円ノ前遺跡など段丘および山裾の微高地に進出する遺跡が目立ち始め、丘陵部でも横枕丘陵の標高100m付近で中期後半の土器を検出したのを始め、下味野、釣山、山ヶ鼻など中期の竪穴住居などの調査例が増えている。こうして後期に入ると松原谷田、桂見遺跡をはじめ遺跡数は飛躍的に増加し遺跡内の住居数も増え、それぞれ古墳時代へと営まれていく。弥生時代の墳墓については、後期中葉に



第1図 下味野古墳群・下味野童子山遺跡 周辺遺跡分布図(S = 1 : 50,000)

なって湖山池南東岸地域では目覚しい地域勢力の台頭がみられ、布勢鶴指奥1号墳丘墓、西桂見墳丘墓、桂見墳丘墓など大形の墳丘墓が累々と築造される。千代川左岸では後期前葉に滝山猿懸平2号墳、中葉に紙子谷門上谷1・2号墓が造営される。この周辺では中期の土壙墓が今回下味野丘陵で、後期初めの土器棺が釣山で、後期後半の墳墓3基が服部墳墓群で検出されているがこの時期については以前不透明な部分が多い。弥生時代の墳墓について今後調査事例は徐々に増加していくものとみられる。

【古墳時代】 古墳時代の集落の調査例は比較的少ないものの、丘陵裾の現集落と重なり営まれたと推察されている。弥生時代から続く布勢第2、桂見、帆城、湖山第1・第2、天神山、岩吉、菖蒲、大柵遺跡など、いずれも大集落といかず微高地に住居が点在するといった状況であり、弥生時代丘陵上にみられた住居も古墳築造期になると丘陵裾へ下る。下味野周辺では古墳時代の住居は確認されていない。この時期の祭祀遺跡として秋里、塞ノ谷遺跡があり、特に秋里遺跡では多量の土師器、各種模造石・土製品を出土する土器溜状土坑が特徴的である。

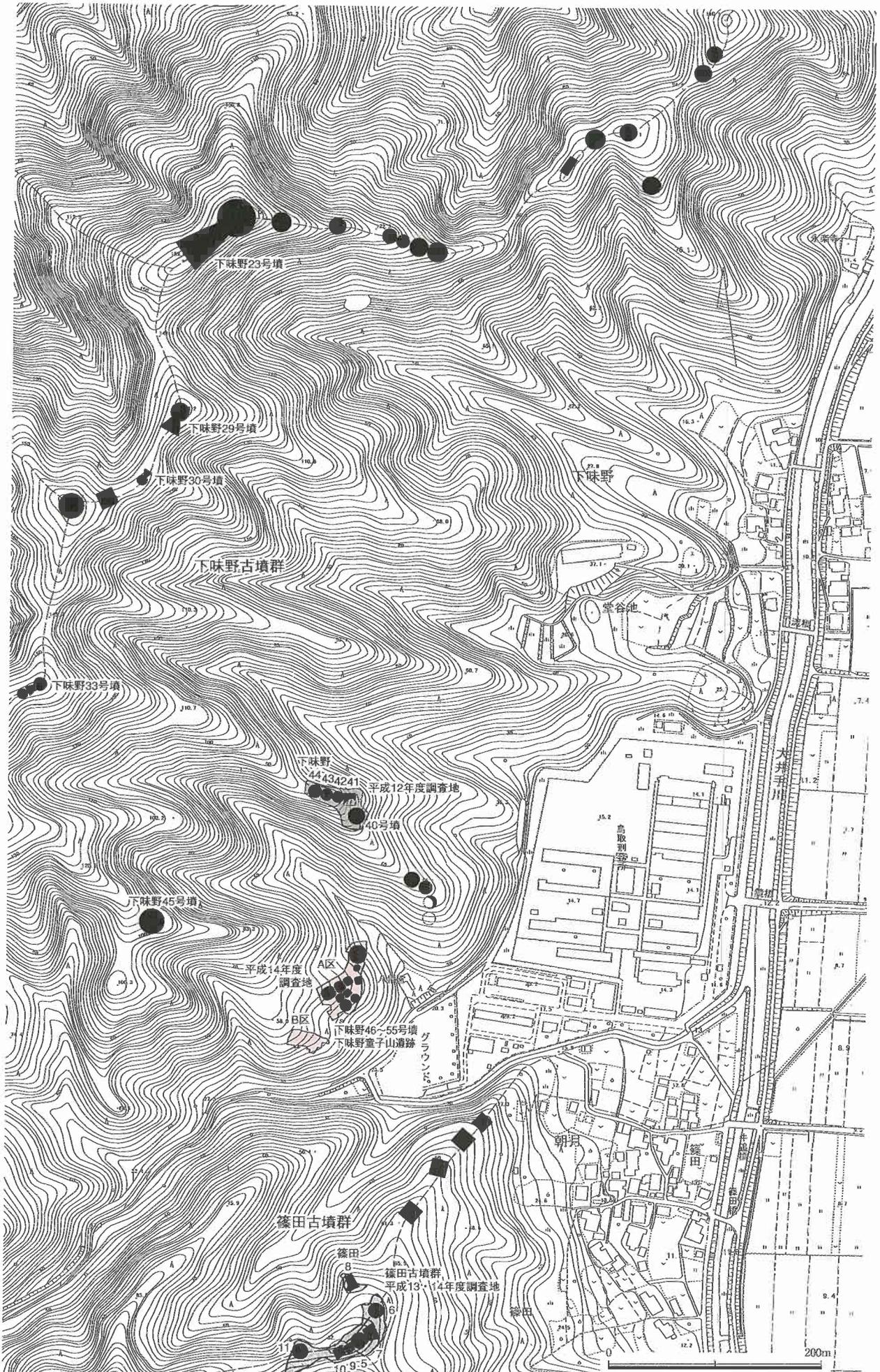
古墳時代当初、弥生時代の系譜を引く方(形)墳が平野縁辺の丘陵上に営まれ小地域単位で展開していった様相が窺える。現在のところ、湖山池南東岸の桂見2号墳、鳥取平野南部の美和32号墳が当期の首長墓とみられる。前期後半、畿内影響下の前方後円墳・六部山3号墳(全長63m)が築造され、古郡家1号墳(全長90m)がその系譜を引く。下味野地区の周辺では、飛禽鏡を出土した篠田古墳群をはじめ、横枕、服部、釣山、古海、徳尾古墳群などで前期古墳が調査されている。中期の前方後円墳として里仁29号墳(全長59m)、柵間1号墳(全長92m)が千代川左岸地域で展開するが、近年調査された横枕、倭文古墳群周辺では横枕13号墳(全長70m)の存在を絡め、湖山池南東岸地域や鳥取平野南部地域に匹敵するような地域勢力の存在が指摘されている。未調査の下味野23号墳(全長73m)、服部23号墳(全長23m)、因幡地域唯一の前方後方墳である古海36号墳(全長67m)、後期前半の釣山2号墳(全長26m)も分布する。また、7世紀中頃の築造とされ巨石を削り抜いた石棺式石室をもつ山ヶ鼻古墳(古海13号墳)は7世紀後半の創建とされる菖蒲廃寺とも繋がり貴重な存在である。

【歴史時代】 律令期に入り菖蒲村周辺は菖蒲廃寺に象徴されるように西岸の中心的地域であったとみられ、古代山陰道の通過地点とともに駅衝、郡家の推定地でもある。また、天平勝宝7年(755)、南北10条にわたり条里制が施行されていたことが明らかとなっており、東大寺高庭庄として開発が進められた。その後経営はうまくいかず10世紀後半には完全に没落し、長保6年(1004)を最後に史料に見られなくなる。この間、山ヶ鼻、菖蒲遺跡で墨書土器や各種遺構が検出されており、岩吉遺跡では8～10世紀にかけて567点もの墨書土器、人形、木簡などが出土している。また、山ヶ鼻遺跡で輸入陶磁器が、菖蒲遺跡で中世京都、近江産の緑釉陶器片とともに白磁、青磁片が多数出土しており、高庭庄没落後も中世にかけて何らかの統治機関的なものがあつたと考えられている。

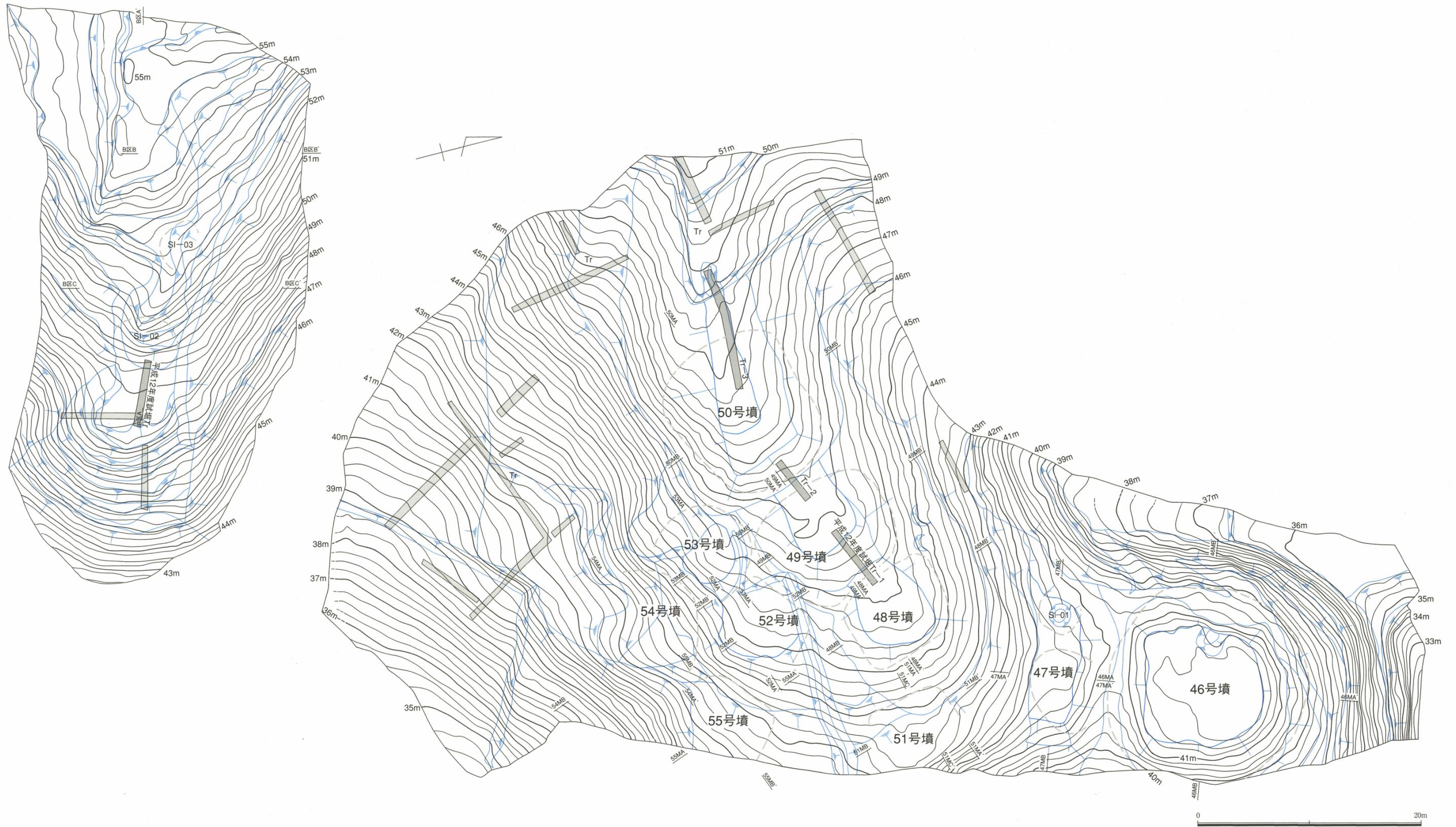
—第1図 遺跡名称—

- | | | | |
|-------------|------------|------------|--------------|
| 1. 大熊段古墳群 | 19. 八坂古墳群 | A. 秋里遺跡 | S. 古市遺跡 |
| 2. 三浦古墳群 | 20. 橋本古墳群 | B. 岩吉遺跡 | T. 宮長竹ヶ鼻遺跡 |
| 3. 桂見墳墓群 | 21. 美和古墳群 | C. 湖山第2遺跡 | U. 橋本遺跡 |
| 4. 布勢鶴指奥墳墓群 | 22. 古郡家古墳群 | D. 天神山遺跡 | V. 越路銅鐸出土地 |
| 5. 里仁古墳群 | 23. 園原古墳群 | E. 西桂見遺跡 | W. 七谷須恵器窯跡群 |
| 6. 柵間古墳群 | 24. 越路古墳群 | F. 桂見遺跡 | X. 古郡家・大路川遺跡 |
| 7. 徳尾古墳群 | 25. 空山古墳群 | G. 東桂見遺跡 | Y. 西大路土居遺跡 |
| 8. 古海古墳群 | 26. 六部山古墳群 | H. 布勢第1遺跡 | Z. 追後遺跡 |
| 9. 本高古墳群 | 27. 船木古墳群 | I. 布勢第2遺跡 | a. 西桂見墳丘墓 |
| 10. 宮谷古墳群 | 28. 大路山古墳群 | J. 里仁遺跡 | b. 柵間1号墳 |
| 11. 小森山古墳群 | 29. 面影山古墳群 | K. 大柵遺跡 | c. 古海35号墳 |
| 12. 釣山古墳群 | 30. 雁金山古墳群 | L. 小森山遺跡 | d. 服部23号墳 |
| 13. 服部墳墓群 | 31. 円護寺古墳群 | M. 北村恵儀谷遺跡 | e. 下味野23号墳 |
| 14. 下味野古墳群 | 32. 開地谷古墳群 | N. 古海遺跡 | f. 横枕55号墳 |
| 15. 篠田古墳群 | 33. 湯山古墳群 | O. 山ヶ鼻遺跡 | g. 横枕13号墳 |
| 16. 横枕古墳群 | | P. 菖蒲遺跡 | h. 古郡家1号墳 |
| 17. 玉津古墳群 | | Q. 本高門ノ前遺跡 | i. 六部山3号墳 |
| 18. 長谷古墳群 | | R. 服部遺跡 | |

- 凡例—
-  集落遺跡・遺物散布地
 -  墳墓群・古墳群
 -  主要古墳
 -  横穴
 -  城跡



第2図 下味野古墳群・下味野童子山遺跡 調査地位置図(S = 1 : 5,000)



第3図 下味野古墳群・下味野童子山遺跡 調査前地形図(S = 1 : 300)

第3章 調査の結果

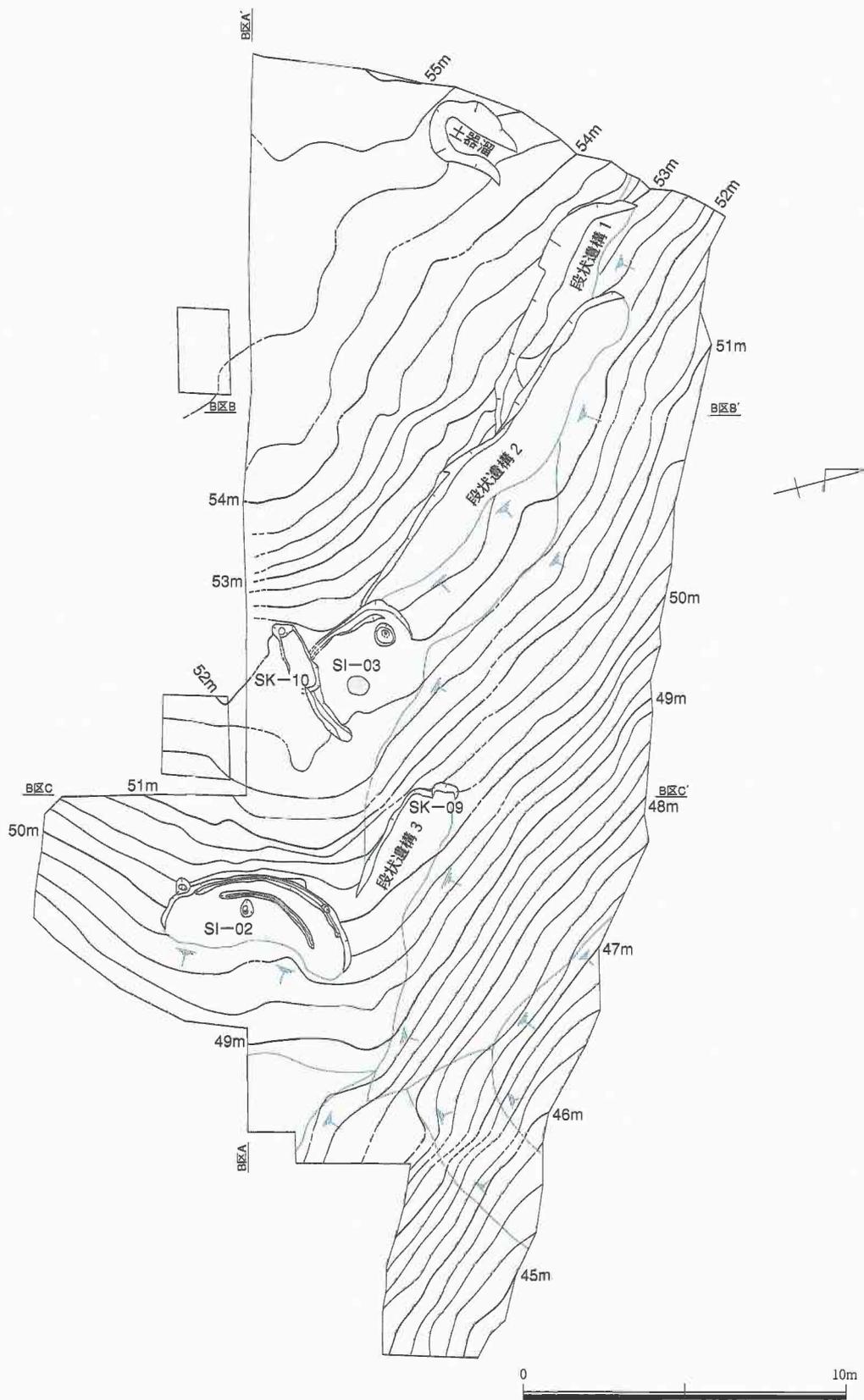
第1節 下味野古墳群の立地と構成(第2図)

下味野古墳群は、鳥取市下味野に所在する。中国山地から派生する丘陵のうち、八町山(標高294m)から北東へ下る丘陵に展開する古墳群である。今回調査の新規発見分を含め現在までに古墳計55基が確認されているが、十分に分布調査がなされたとは言えず、周辺の篠田、横枕古墳群同様に今後詳細な踏査が必要である。またこれらの地域では、平成11～13年度に水道施設建設に伴う横枕集落北東の丘陵および裾部での古墳の調査、平成11、12年度に服部墳墓群の調査が実施されるまで、丘陵部での本格的な発掘調査は行われなかった地域である。ただ近隣の横枕地区では大正期の県道建設で多数の土器・鉄器が出土し、昭和初期に住民らによって古墳の発掘が行われたという。また、山麓の果樹栽培等に伴い土器などが出土したとも聞く。現在でも丘陵裾部には開口している横穴式石室が分布し、裾部微高地の畑地で土器片が採集されるなど、古くから遺跡の存在が地元知られた地域であった。

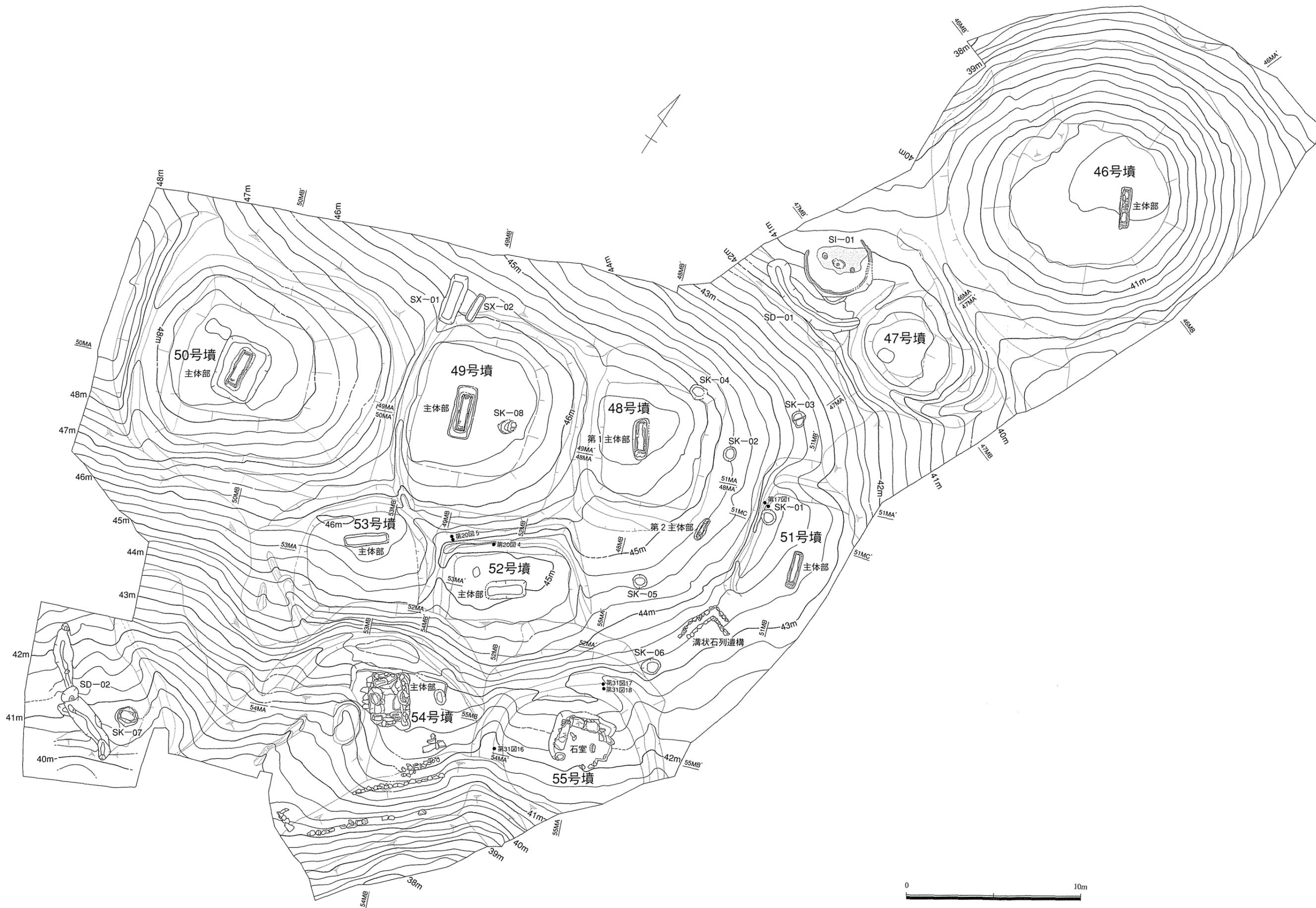
下味野古墳群が主として展開する八町山(標高294m)から北東へ下る標高160～100mの主稜線は、各所に鞍部や頂部を繰り返す微地形が展開しており、1975、1976年(昭和50、51)に下味野23号墳(全長73.5m)を含め前方後円墳5基が確認されている。平野部との150mもの比高差を考慮すると古墳築造にはやや高所すぎるような印象をもつが、起伏に富む自然地形を古墳築造に生かせる利点や鳥取平野を一望できる環境を考慮すると下味野地域で視覚的にこれ以上崇高な場所を確保することは難しく、下味野丘陵線上に点々と前方後円墳および古墳が分布する理由も納得できよう。今回調査した46～55号墳は、前方後円墳5基のうち南端の36号墳(全長22.5m)が立地する標高156mの主稜線頂部から南東へ下る支稜線上、標高40～48mのやや裾広がりとなって複雑に張り出す尾根の北東へ延びる小尾根およびその南東緩斜面とに立地する。東に開けた小平野(現在は鳥取刑務所)との比高差はおよそ33mである。この調査地から小谷をはさんで北東に隣接する尾根、標高68～77mで平成12年度、古墳5基(40～44号墳)の調査が行われた。南東に下る尾根筋に9～12m級の方墳1基と隅丸形状の円墳3基、その南東下位に玉類や鉄剣・鉄鏃と副葬品豊富な埋葬施設をもつ一回り規模の大きい径15m級の円墳が調査された。築造時期はいずれも中期の範囲内で中期中葉および後葉が中心と考えられる。

このように、下味野地区の丘陵上には、時期不明の前方後円墳が主稜線上に並び、これまでに計55基の古墳が確認されている。そのうち平成12年度調査の40～44号墳と今回調査の46～55号墳と計15基の古墳の内容が明らかとなった。古墳群の構成については今の時点では不明瞭な点が多いながらも、これまでの調査と古墳の分布状況から、23号墳(全長73.5m)を中心として主稜線上に連綿と配置される前方後円墳、円墳の一群と、今回調査した古墳のような丘陵裾に近い尾根およびその緩斜面のある一定範囲内に重複して築造されるような小規模古墳とは一線を介する必要があるだろう。45号墳のような丘陵中間位に単独(?)で立地する古墳の存在もあり、どれほどの古墳が存在するのか不透明な現在の状態では小単位の把握および古墳群全体を捉えることは難しい。むしろ、調査地の南側地区で調査された篠田、横枕、倭文古墳群らとの共通する部分や相違点を明らかにしていくことで、より古墳群の実像に迫れるものと思われる。

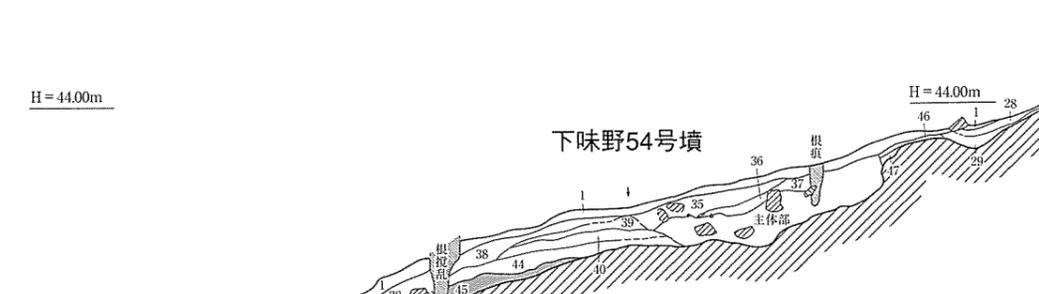
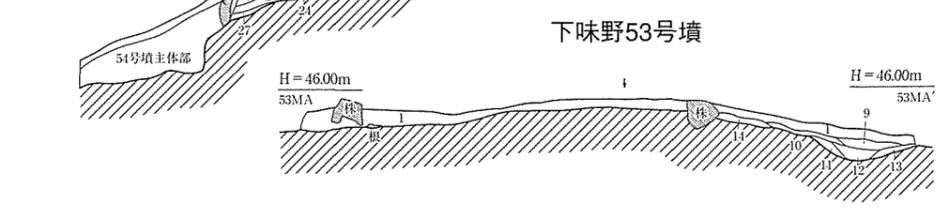
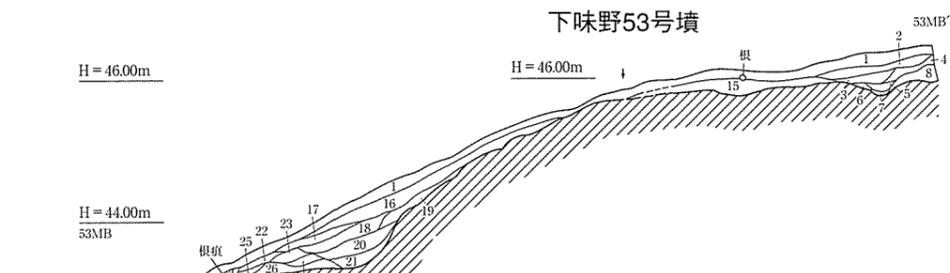
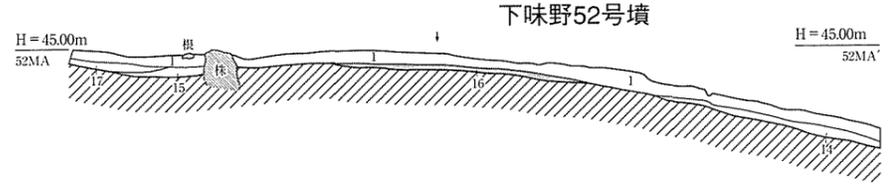
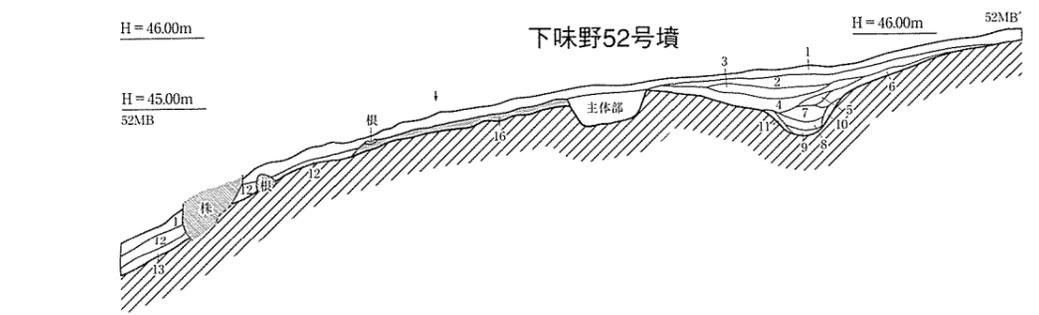
なお、古墳に先行する弥生時代の墳墓は現在のところこの周辺では平成11、12年度調査の服部墳墓群で弥生時代後期後葉の墳墓3基が調査されているほか、有富川を北へ渡った釣山で弥生時代後期初めの土器棺が調査されているほかは今だ不明である。今回、古墳の調査に伴い弥生中期の土墳墓が検出されたことは大きな成果であった。ただ、平成12年度の横枕42～55号墳の墳丘下を中心とした標高100～103mで弥生時代中期の土器が出土しており、丘陵裾部の標高20数mの微高地で遺物の散布地が認められるなど、古墳築造の素地となる集落遺跡の存在も喚起される場所である。



第4図 下味野童子山遺跡B区 全体図(S = 1 : 200)



第5图 下味野古墳群・下味野童子山遺跡A区 全体图(S=1:200)

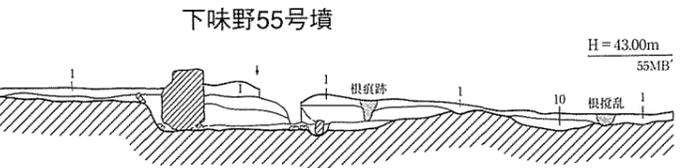
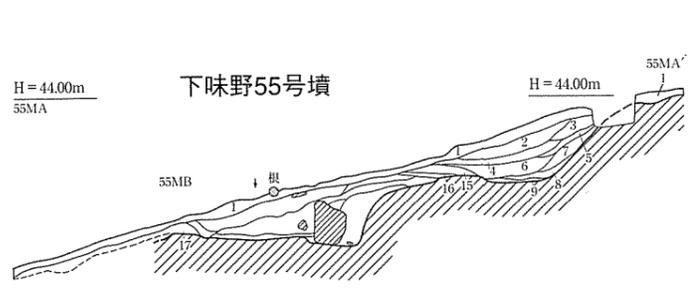


- 下味野52号墳
1. 褐色粘質土
 2. にぶい黄褐色粘質土 (炭片を若干含む。)
 3. 黒褐色粘質土 (4よりやや暗。炭片を含む。黄褐色土を若干含む。)
 4. 黒褐色粘質土 (3より黄褐色土の含み多い。0.5cm大の明黄褐色土ブロック・炭片を含む。)
 5. 明黄褐色粘質土 (ややしめる。シルト質。)
 6. 黄褐色粘質土 (シルト質。)
 7. 明黄褐色粘質土 (やや橙色かかる。シルト質。しめる。)
 8. 黄褐色粘質土 (シルト質。)
 9. 黄褐色粘質土
 10. 明黄褐色粘質土 (7より明。)
 11. 黄褐色粘質土 (炭片を含む。)
 12. にぶい黄褐色粘質土
 13. にぶい黄褐色粘質土
 14. 明黄褐色粘質土
 15. にぶい黄褐色粘質土 (17より暗。)
 16. 黄褐色粘質土 (灰土を若干含む。田表土。)
 17. にぶい黄褐色粘質土

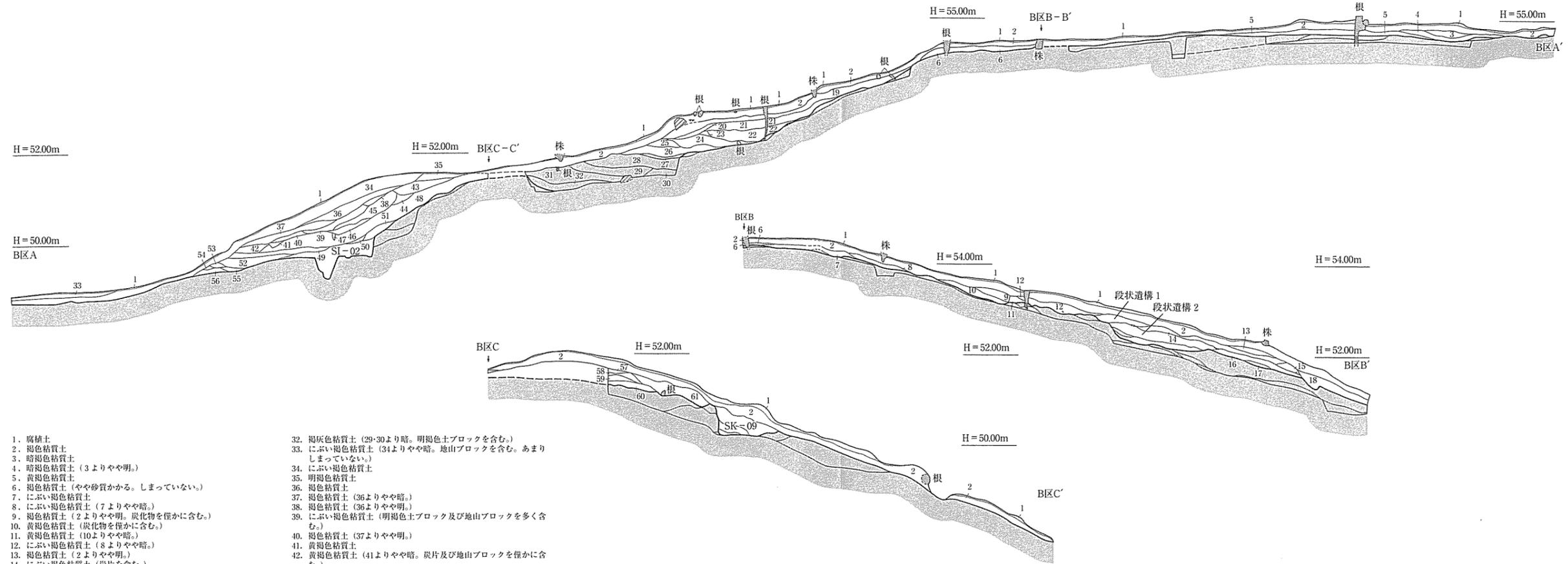
- 下味野53・54号墳
1. 褐色粘質土 (腐植土・表土。)
 2. 褐色粘質土 (1よりやや暗。しまり弱い。)
 3. 暗褐色粘質土 (黒褐色かかる。1cm大の地山礫有。)
 4. 暗褐色粘質土 (3より明。黄褐色土を含む。)
 5. 黄褐色粘質土 (炭片を若干含む。)
 6. 黄褐色粘質土 (5より明。)
 7. 明黄褐色粘質土 (よくしめる。)
 8. 明黄褐色粘質土 (炭片を含む。1cm大の灰色地山ブロックを若干含む。)
 9. 暗褐色粘質土
 10. 明黄褐色粘質土
 11. にぶい黄褐色粘質土
 12. 褐色粘質土 (9より明。炭片を含む。)
 13. 黄褐色粘質土
 14. にぶい黄褐色粘質土
 15. 黄褐色粘質土 (褐色土を含む。しまり弱い。)
 16. 黄褐色粘質土
 17. にぶい黄褐色粘質土
 18. にぶい黄褐色粘質土 (17より暗。ややシルト質。)
 19. 黄褐色粘質土 (16より明。シルト質。)
 20. にぶい黄褐色粘質土 (0.5cm大の灰色土ブロックを含む。しまり弱い。)
 21. 黄褐色粘質土 (黄褐色かかる。灰土を若干含む。しまり弱い。)
 22. 明黄褐色粘質土
 23. にぶい黄褐色粘質土 (18より若干明。明黄褐色土を含む。)
 24. 明黄褐色粘質土 (褐色土を含む。20よりしめる。)
 25. にぶい黄褐色粘質土
 26. 明黄褐色粘質土 (褐色土を若干含む。)
 27. にぶい黄褐色粘質土 (灰褐色かかる。明黄褐色土を含む。)
 28. 明黄褐色粘質土 (シルト質。)
 29. 黄褐色粘質土 (灰土を含む。しまり弱い。)
 30. にぶい黄褐色粘質土

31. 灰褐色粘質土 (黒褐色かかる。)
32. 黄褐色粘質土 (51より暗。4cm大の地山礫を含む。)
33. 黄褐色粘質土 (炭片を含む。暗褐色土を若干含む。)
34. にぶい褐色粘質土 (地山ブロックの含み無。)
35. 黄褐色粘質土 (しまり弱い。シルト質。)
36. にぶい黄褐色粘質土 (1cm大の明黄褐色土ブロックを含む。炭片を若干含む。しまり弱い。)
37. 明黄褐色粘質土 (黄褐色土を含む。)
38. 褐色粘質土 (1よりやや暗。)
39. 褐色粘質土 (38よりやや明。)
40. 明褐色粘質土 (地山ブロックを含む。)
41. 黄褐色粘質土 (44より3~4cm大の地山ブロックを密に含む。)
42. にぶい黄褐色粘質土
43. 灰褐色粘質土
44. 黄褐色粘質土 (41より明。40より暗で褐色かかる。3~4cm大の地山ブロック・明黄褐色土を含む。)
45. 黒褐色粘質土 (田表土。)
46. 明黄褐色粘質土 (灰土を含む。ややしめる。)
47. 灰黄褐色粘質土 (崩れた地山礫を多く含む。)
48. にぶい黄褐色粘質土 (0.8cm大の灰色土ブロックを含む。しまり弱い。)
49. 明黄褐色粘質土 (灰土を若干含む。48よりしめる。)
50. 明黄褐色粘質土 (49より明で橙色かかる。)
51. 灰黄褐色粘質土 (ややしめる。)
52. 暗褐色粘質土 (黒褐色かかる。3cm大の灰色地山礫を含む。20cm大の角礫有。)
53. にぶい黄褐色粘質土 (54より若干明。炭片を含む。粘質やや強。)
54. にぶい黄褐色粘質土 (明黄褐色土を含む。)
55. にぶい黄褐色粘質土
56. 褐色粘質土 (にぶい黄褐色かかる。1cm大の地山礫を含む。)

- 下味野55号墳
1. 褐色粘質土
 2. にぶい黄褐色粘質土
 3. 黄褐色粘質土
 4. 黒褐色粘質土 (0.5cm大の灰色土ブロックを含む。)
 5. 褐色粘質土
 6. にぶい黄褐色粘質土 (0.5cm大の灰色土ブロックを若干含む。)
 7. 黄褐色粘質土 (5より明。0.5cm大の灰色地山ブロックを含む。ややシルト質。)
 8. 黄褐色粘質土 (7よりややしめる。)
 9. 褐色粘質土 (1cm大の灰色地山ブロックを含む。しめる。)
 10. 暗褐色粘質土 (黒褐色かかる。)
 11. にぶい黄褐色粘質土
 12. 黒褐色粘質土 (0.5cm大の灰色土ブロックを若干含む。)
 13. にぶい黄褐色粘質土 (褐色土・炭片を含む。)
 14. にぶい褐色粘質土 (1~3cm大の地山礫を含む。)
 15. 明褐色粘質土 (1~3cm大の地山礫・黄褐色土を含む。しめる。)
 16. 灰黄褐色粘質土
 17. にぶい黄褐色粘質土 (やや粘質。)



第7図 下味野52~55号墳 墳丘断面図 (S=1:100)



1. 腐植土
2. 褐色粘質土
3. 暗褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土 (3よりやや明)
5. 黄褐色粘質土
6. 褐色粘質土 (やや砂質かか。しまっていない)
7. にぶい褐色粘質土
8. にぶい褐色粘質土 (7よりやや暗)
9. 褐色粘質土 (2よりやや明。炭化物を僅かに含む)
10. 黄褐色粘質土 (炭化物を僅かに含む)
11. 黄褐色粘質土 (10よりやや暗)
12. にぶい褐色粘質土 (8よりやや暗)
13. 褐色粘質土 (2よりやや明)
14. にぶい褐色粘質土 (炭片を含む)
15. 褐色粘質土 (2-13よりやや明。土器片を含む)
16. にぶい黄褐色粘質土 (炭片を含む)
17. 明褐色粘質土 (やや黄褐色かか)
18. 褐色粘質土 (15より暗く、2よりやや明)
19. 褐色粘質土 (2よりやや明)
20. 褐色粘質土 (2よりやや明るく、19よりやや暗。炭片を僅かに含む)
21. 暗褐色粘質土
22. 褐色粘質土 (20よりやや明。炭片を含む)
23. にぶい褐色粘質土
24. にぶい黄褐色粘質土 (明褐色土ブロック及び炭片を含む)
25. にぶい黄褐色粘質土 (ブロック無)
26. 明褐色粘質土 (にぶい黄褐色粘質土ブロックを密に含む。炭片を含む)
27. にぶい黄褐色粘質土 (明褐色粘質土ブロックを含む)
28. にぶい黄褐色粘質土と明褐色粘質土の混合 (あまりしまっていない)
29. 褐灰色粘質土 (明褐色土ブロックを多く含む。あまりしまっていない)
30. 褐灰色粘質土 (明褐色土ブロックを29より密に含む。あまりしまっていない)
31. 明褐色粘質土 (褐灰色粘質土ブロックを多く含む。あまりしまっていない)
32. 褐灰色粘質土 (29-30より暗。明褐色土ブロックを含む)
33. にぶい褐色粘質土 (34よりやや暗。地山ブロックを含む。あまりしまっていない)
34. にぶい褐色粘質土
35. 明褐色粘質土
36. 褐色粘質土
37. 褐色粘質土 (36よりやや暗)
38. 褐色粘質土 (36よりやや明)
39. にぶい褐色粘質土 (明褐色土ブロック及び地山ブロックを多く含む)
40. 褐色粘質土 (37よりやや明)
41. 黄褐色粘質土
42. 黄褐色粘質土 (41よりやや暗。炭片及び地山ブロックを僅かに含む)
43. 黄褐色粘質土 (35よりやや暗)
44. 黄褐色粘質土 (43よりやや暗)
45. 黄褐色粘質土 (43よりやや明。地山ブロックを含む)
46. 暗褐色粘質土 (炭片を僅かに含む)
47. 暗褐色粘質土 (46よりやや明)
48. 褐色粘質土 (40よりやや明。炭化物を僅かに含む)
49. にぶい黄褐色粘質土
50. 褐色粘質土 (48よりやや明)
51. 黄褐色粘質土
52. にぶい黄褐色粘質土 (49より明。炭片を含む)
53. 黄褐色粘質土 (41-42より明)
54. 褐色粘質土
55. 褐色粘質土 (54より暗)
56. にぶい黄褐色粘質土 (34よりやや暗)
57. 褐色粘質土 (2より暗)
58. にぶい褐色粘質土 (炭片を僅かに含む)
59. 褐色粘質土 (57よりやや暗。やや黄褐色かか)
60. 黄褐色粘質土
61. 褐色粘質土 (57-59よりやや暗。炭片を僅かに含む)

第8図 下味野童子山遺跡B区断面図(S=1:100)

第2節 下味野古墳群の調査

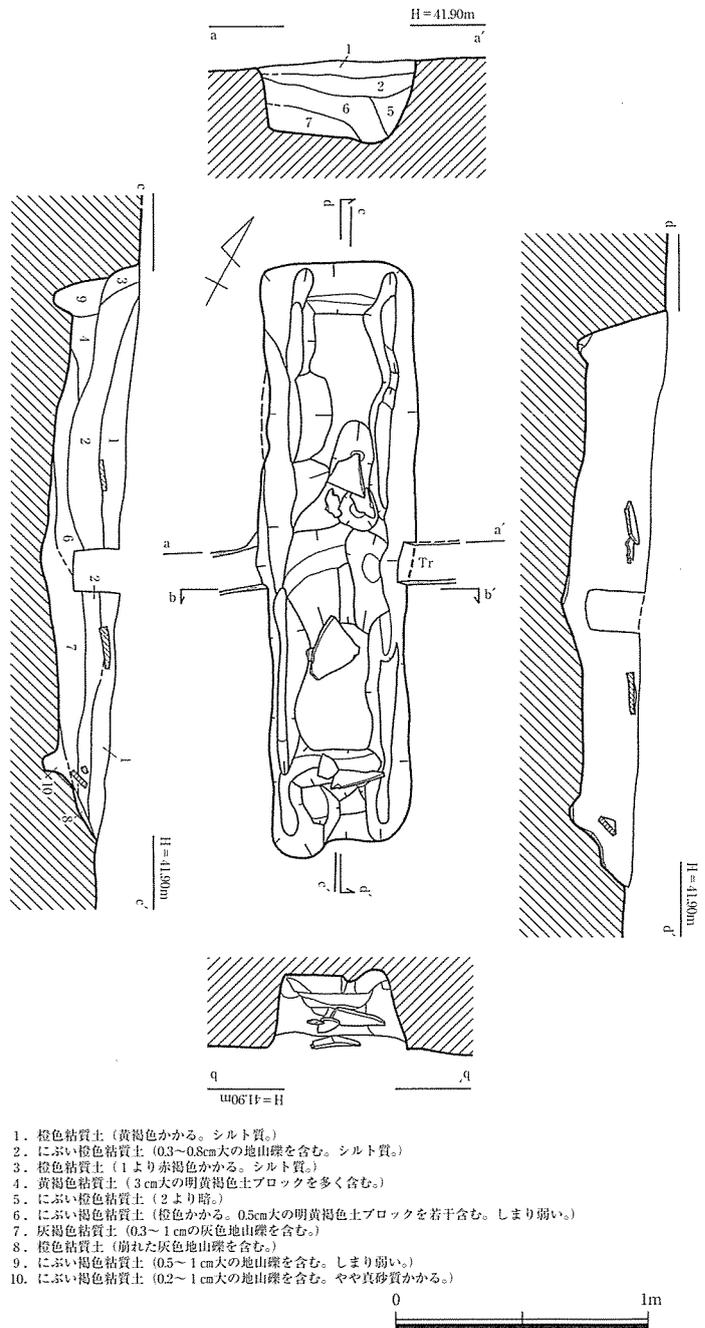
1. 下味野46～55号墳の調査

下味野46号墳(第3・5・6・9図、図版2～4)

〔位置と現状〕 下味野46号墳は、調査区北端に位置し、48～50号墳が立地する東北東へ延びる尾根筋から北東へ下る尾根の先端、標高39.50～41.81mに立地する。南の斜面高位側に47号墳が配置する。調査前の観察では、古墳北側は幅10数mの澤状の小谷へ下る急斜面で、元々その小谷に舌状に張り出した地形とみられ、そのひととき大きく整った円形状の高まりから容易に古墳と認識できた。東側に広がる水田面からの比高差は約27mを測るが平野に面する立地でなく見通しもやや不良である。ただ、46号墳は単独で立地し、48～50号墳が立地する尾根上から見下ろすと見通しの利かない面周囲の景観も合わさって独自の空間が開け、その意味で優位な占地と思われる。

〔墳丘〕 表土下2～20cmで墳丘面を検出した。古墳の東裾がわずかに調査区外となる。径8mほどの墳丘平坦面では表土下は岩盤状の地山面であり、一部地山が露出している部分も見られた。主稜線方向に長軸をもつ円墳であるが、墳丘規模は南北方向で18.4m、墳丘の高さは北裾から2.3mを測る。墳丘は、北へ延びる尾根を腰部付近で幅3.5m余りと大きく掘削・切断して墓域として区画し、地山成形と掘削した大量の土砂を北東を中心とした低位側へ厚く盛土することで築造されている。墳頂部周辺で深さ1m近く断ち割ったが、旧地表は確認されなかった。盛土は、東側墳丘斜面で32cmが遺存しているが、掘削された土量を勘案するとかなりの盛土が本来なされたと考えられる。また、北裾から谷へ下る急斜面は古墳の高さをさらに増幅させ、東からの視覚的効果をねらったものと推察される。

〔埋葬施設〕 遺存する墳頂部中央の東寄り、地山面で埋葬施設1基を検出した。埋葬形態は、上層での板石の出土や床面中央での攪乱痕、小口および側板溝の掘り込みなどから箱式石棺と考えられる。墓壙の平面形は隅丸長方形である。主軸は尾根の稜線による制約は受けず、どちらかと言えば小谷筋に並行するような主軸N-27°-Wをとる。墓壙規模は現況で長さ2.3m、幅62cm、深さ31cmが確認されるが、古墳上部の流失・削平を考慮すると、さらに深さが加算されるばかりか二段掘りであった可能性も否定できない。棺の規模は内法で幅30cm、長さ1.73mが想定される。出土遺物は



第9図 下味野46号墳 主体部実測図(S=1:30)

みられなかった。また、検出した埋葬施設が墳丘平坦面の中央を大きく外れるため、本来中心となる埋葬施設が西側にあり、尾根の切断状況を考慮するとかなりの盛土が本来なされたと考えられることから、主となる埋葬施設は流失した可能性が大きい。

下味野47号墳(第3・5・6図、図版2・4)

〔位置と現状〕 下味野47号墳は、調査区北側に位置し、48～50号墳が立地する東北東へ延びる尾根筋から北東へ下る腰部手前の稜線上、標高40.32～41.81mに立地する。北側に46号墳が、西側に弥生時代中期の竪穴住居SI-01が配置する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は27mである。調査前の観察では、48号墳から下る鞍部手前に幅4m程の平坦面があり、その北側腰部は稜線に直交する幅広の窪みが観察され46号墳とを介していた。平坦面の存在と46号墳のすぐ南側という立地から、古墳の可能性が考えられた。なお尾根高位側には周溝状の窪みは認められなかった。

〔墳丘〕 表土下10～15cmで墳丘面を検出した。46号墳のような岩盤状の地山層は認められず、墳頂部に弥生土器細片が散布することから、当初墳頂部に広がる暗褐色土の広がりが旧地表面とも思われたが、トレンチにより盛土と旧地表面を確認し、同時に埋葬施設の流失が明らかとなった。盛土は墳頂部やや北寄りで最大27cmが遺存するものの、北東側で大きく流失した痕跡が認められる。墳丘は尾根高位側に弧状の周溝を掘削し、斜面低位側へより多く盛土することで築造されている。現状ではやや歪な円墳で、墳丘規模は東西周溝底間で7.1m、南北周溝底間で6.4m、墳丘の高さは東裾から1.5mを測る。なお、北側の46号墳との前後関係は、南北土層ベルトの断面から46号墳が47号墳に先行するものと考えられる。

下味野48号墳(第3・5・6・10・11図、図版2～5)

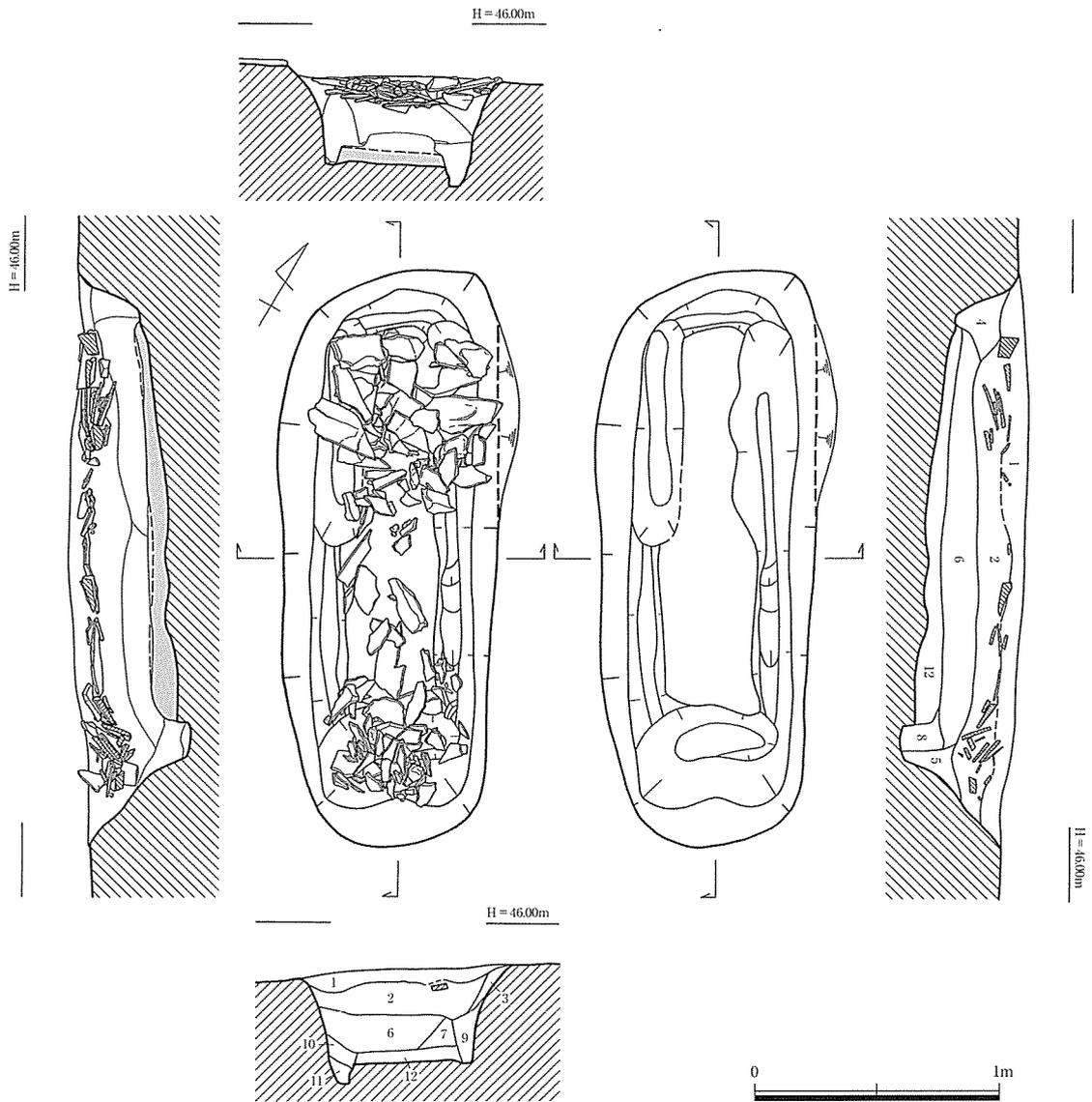
〔位置と現状〕 下味野48号墳は、調査区中央やや北寄りに位置し、東北東へ延びる尾根先端頂部、標高44.90～45.84mに立地する。尾根高位南西隣に49号墳、南西緩斜面に53号墳、東へやや張り出した尾根先端側に51号墳が配置する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は31m弱である。調査前の観察では、東北東へ延びる尾根筋に幾つかの古墳状の高まりが認められたがそれほどの高さでなく、稜線に直交する窪みもぼんやりとして墳丘の範囲がはっきりしないまでも、北側斜面を中心に板石の散乱が認められ、尾根先端頂部に位置することから古墳であることが想定された。平成12年度の試掘Tr-1トレンチで古墳と確認された。

〔墳丘〕 表土下3～15cmで墳丘面を検出した。北西墳丘斜面では表土下は旧地表面が、墳頂部では地山面が露出しており全体的に盛土の流失がすすむ。わずかに墳頂部北側で厚さ10cmの盛土が遺存していた。尾根稜線に対し直交する軸方向がやや長い方墳で、墳丘規模は南北方向で9.5m、東西方向で7.5m、墳丘の高さは北裾から94cmを測る。墳丘は、北東裾部の削り出しと南東尾根高位側と南緩斜面側にL字形の溝を掘削し北側斜面低位に盛土することで造られている。なお49号墳との前後関係は、古墳南側の土層断面から48号墳が後出の可能性が大きい。

〔埋葬施設〕 墳頂部中央やや南西側の斜面高位寄りで1基、東墳裾で墳角に直交するような主軸をもつ埋葬施設1基を検出した。墳裾の埋葬施設は東下位2mに51号墳が配置するものの、帰属は48号墳と考えるのが妥当と思われる。

第1主体部(第5・6・10図、図版4・5)

墳頂部に位置する第1主体部の主軸は尾根稜線に直交するN-30°-Wをとり、盛土上から地山を掘り込んでいる。平面形は丸味の強い隅丸長方形である。墓壙は大きく攪乱を受けており、棺材は抜き取られ板石が墓壙埋土上層に細かく割れた状態で出土した。埋葬形態は上層での板石の出土や小口および側板溝の掘り込みなどから箱式石棺と考えられる。墓壙規模は現況で長さ2.35m、幅87cm、深さ42cmを測



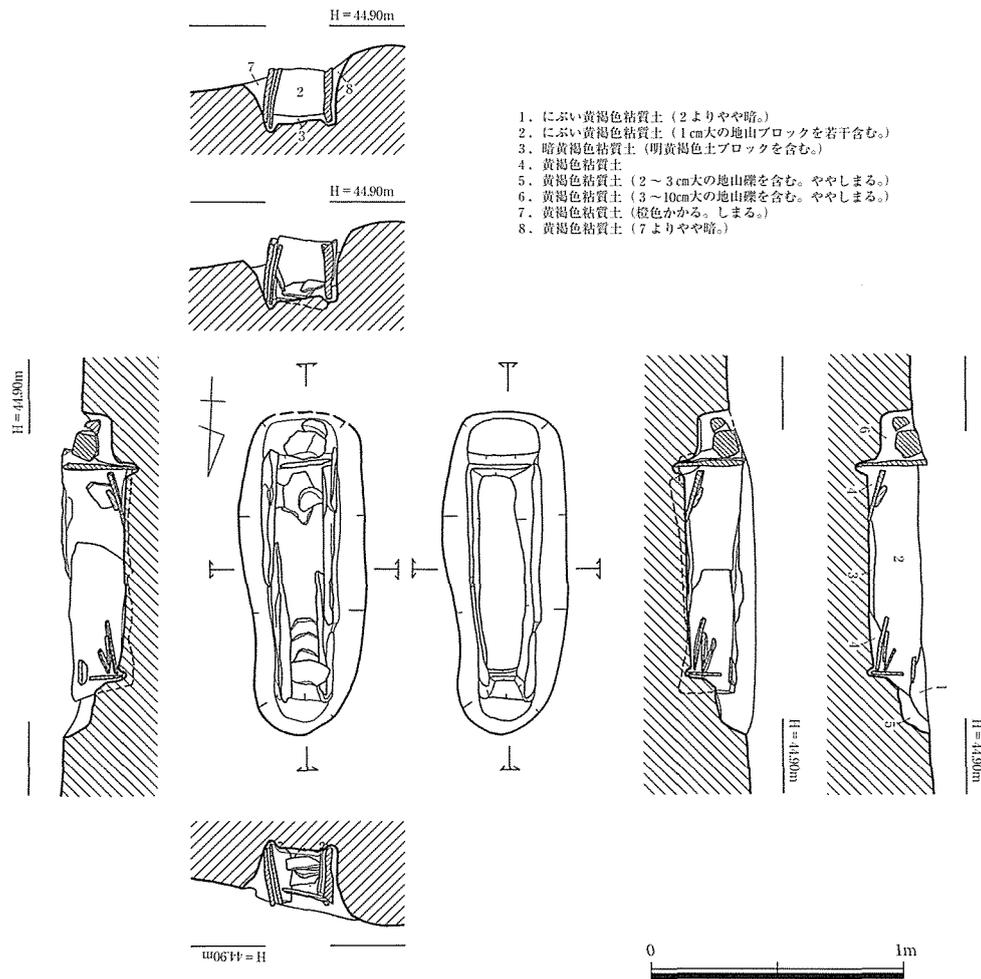
1. にぶい黄棕色粘質土（やや黄褐色かかる。1～2 cm大の円礫・地山礫を含む。）
2. にぶい黄棕色粘質土（1より暗。やや黄褐色かかる。1～2 cm大の明黄褐色土ブロック・1～3 cm大の円礫及び板石を含む。しまる。）
3. にぶい黄棕色粘質土（2より明で橙色かかる。明黄褐色土ブロック含む。）
4. 褐色粘質土（しまり弱い。）
5. 暗褐色粘質土。
6. 暗褐色粘質土（5より暗。）
7. 暗黄褐色粘質土。
8. 暗黄褐色粘質土（地山ブロックを含む。しまる。）
9. 黄褐色粘質土。
10. 褐色粘質土。
11. 明黄褐色粘質土。
12. 褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む。）

第10図 下味野48号墳 第1主体部実測図(S = 1 : 30)

る。棺の規模は内法で幅41cm、長さ1.62mが想定される。墓壇底面はやや南側へ傾斜するが石棺内に厚さ10cm程度の褐色粘質土を敷いて棺床を整えている。また、南側の小口溝が大きく深いことや棺幅から南側が頭位である可能性が大きい。出土遺物は土器細片が墓壇埋土から出土しているが弥生土器の可能性はある。

第2主体部（第5・6・11図、図版4・5）

48号墳の東角裾に位置する第2主体部は、墳丘に対し主軸をやや西方向のN-3°-Wへ振る。表土を除去した段階で側板石上部が露出し、蓋石は既に見られなかった。埋葬形態は小形の箱式石棺である。墓壇平面形は丸味の強い隅丸長方形で、規模は現況で長さ1.28m、幅49cm、深さ27cmを測る。棺の内法は長さ81cm、幅22cm、深さ22cmである。墓壇は小口側が二段掘りとなり、底部にはやや浅めの側板溝、小口溝の掘り込みが見られる。石棺は2石を中央部で重ねた側板で小口板を挟む構造をとる。棺床はわ



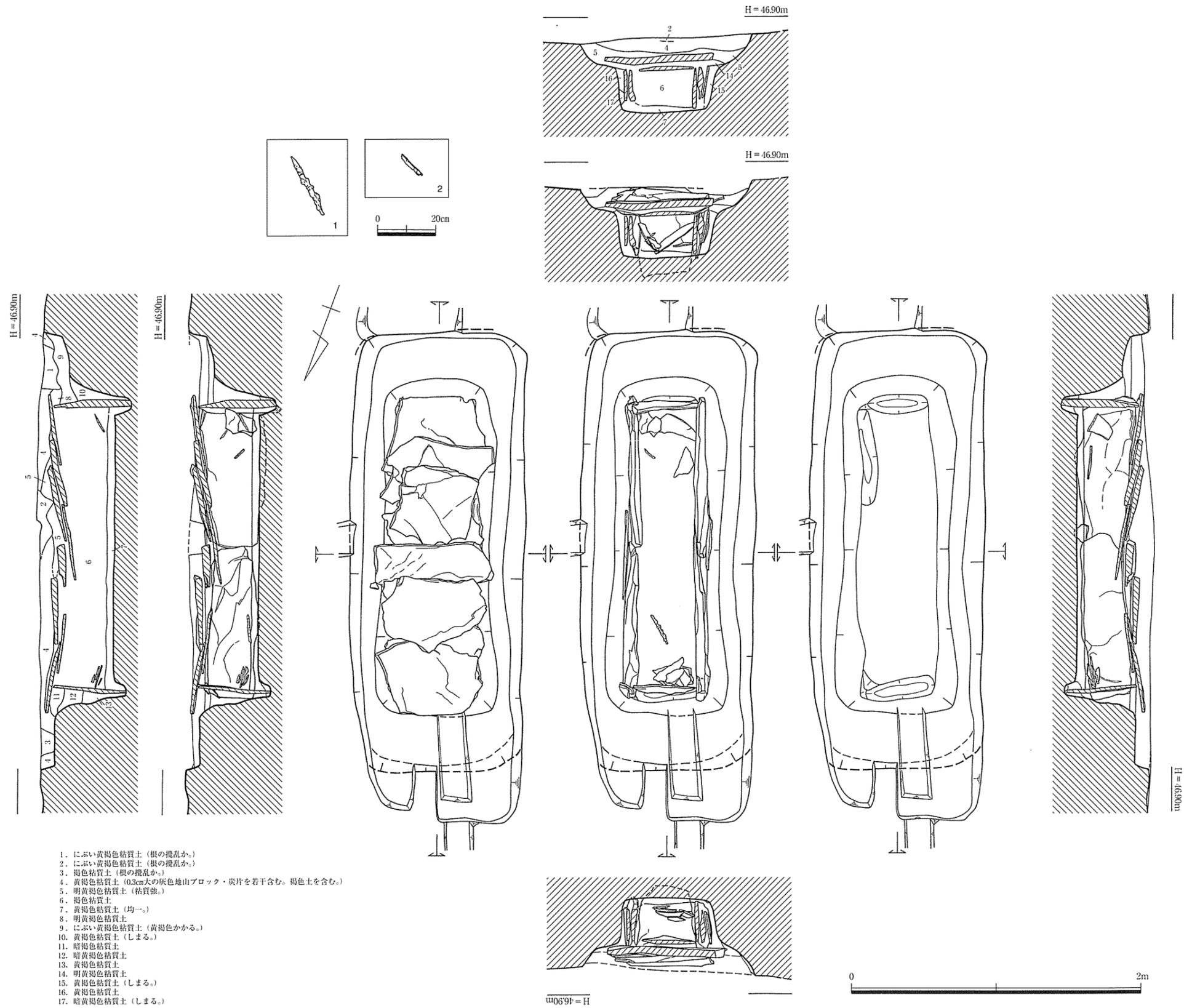
第11図 下味野48号墳 第2主体部実測図 (S = 1 : 30)

ずかに2、3cmの厚さに暗黄褐色粘質土を敷き整えている。棺内小口南側に3石を用いた石枕がみられ、中央の板石は北側へ向けて傾斜し西側の板石は側板に立て掛けられる。もう一方も元は側板に立て掛けられていた可能性がある。北側小口側にみられる枕石状の板石3石は小口側へ傾斜しており、小口板が剥離、転落した可能性が考えられる。石棺は全体的に南側で幅広となり小口板も大きめの板石が使用されていること、石枕の存在から南側が頭位と考えられる。遺物は出土していない。

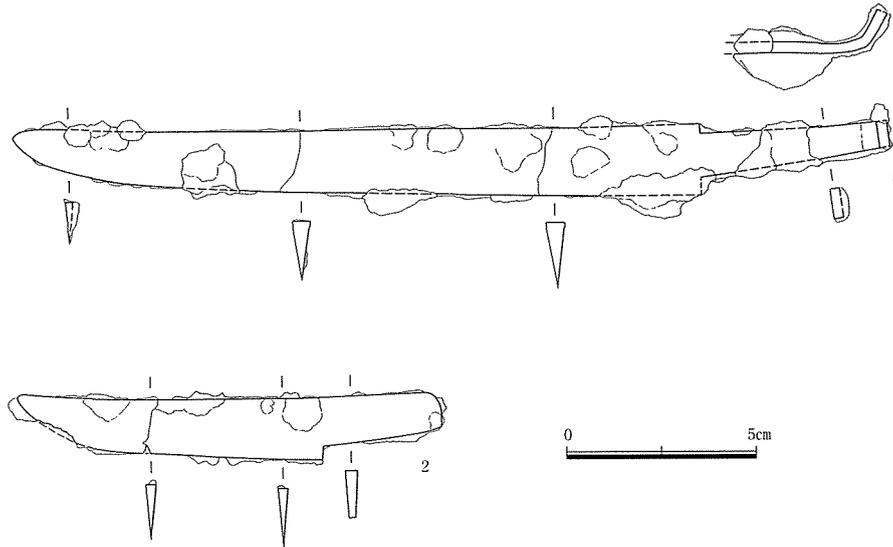
下味野49号墳(第3・5・6・12・13図、図版2・3・5・6・15)

〔位置と現状〕 下味野49号墳は、調査区中央やや北寄りに位置し、東北東へ延びる尾根先端頂部に立地する48号墳の南西尾根高位側に隣接する。尾根高位南西隣に50号墳、南東緩斜面に52号墳、南緩斜面に53号墳が近接する。標高45.6~46.83mに立地し、丘陵東側に広がる水田面からの比高差は32m弱である。調査前の観察では、東北東へ延びる尾根筋に幾つかの古墳状の高まりが認められたがそれほどの高さでなく、稜線に直交する窪みもほんやりとして墳丘の範囲がはっきりしないまでも、尾根稜線上に位置することから古墳の存在が想定された。平成12年度の試掘Tr-1、2トレンチで古墳と確認された。

〔墳丘〕 表土下10~20cm弱で墳丘面を検出した。墳頂部はほぼ地山面が露出しており全体的に盛土が流失する。旧地表も検出されなかった。墳頂部東側に後世の耕作溝とみられる攪乱や南に径1m近くある桐の切株があり、わずかに墳頂部南西側で厚さ8cmの盛土を確認した。尾根稜線に対し直交する軸方向にやや長い方墳で、墳丘規模は南北方向で11.9m、東西方向で9.8m、墳丘の高さは南裾から1.2mを測る。墳丘は、東側の裾部の削り出しと尾根高位側にやや彎曲気味で幅に対しやや深めの溝を掘り斜面



第12図 下味野49号墳 主体部実測図 (S = 1 : 30)



第13図 下味野49号墳 主体部出土遺物実測図

低位に盛土することで造られているとみられる。なお48、50号墳との前後関係は、古墳の東西土層断面から49号墳が50号墳より後出で48号墳より先行する可能性が大きい。

〔埋葬施設〕 墳頂部中央やや南西側の斜面高位寄りで埋葬施設1基を検出した。埋葬形態は箱式石棺である。墓壙の平面形は隅丸長方形で、盛土上から地山を深く掘り込む。主軸は尾根稜線に直交する。墓壙規模は現況で長さ3.02m、幅1.21m、深さは墳丘断面から65cmを測る。墓壙は二段掘りで、底面はほぼ平坦となり両小口溝が掘り込まれ高さ調整のためか側板溝が一部南東側に認められる。

箱式石棺は、二段に掘り込まれた墓壙中央に設置され、棺の主軸はN-20°-Wをとる。棺幅はわずかに北側が広いがそれほど差は認められず、棺の内法は長さ1.94m、幅45cm、深さ38cmを測る。棺の底には黄褐色粘質土が5cmの厚さに均一に敷かれる。蓋石は計8石を用いて重なり合わせ、上部および側板の周囲を粘質の強い明黄褐色粘質土で目張りする。石棺は側板2石をそれぞれ繋ぎ合わせ両小口板を挟み込む構造で、側板の繋ぎ目部分は外側から別石で覆う。

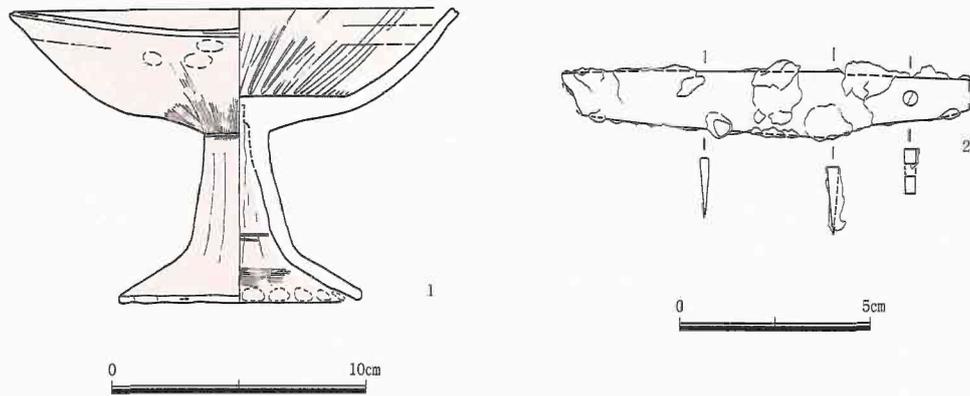
棺内には両小口側に石枕をもち、それぞれの胸元に近い部分に、北側で刀子(1)、南側で刀子(2)が出土している。南側の石枕はV字間に頭の置台を設けた逆A字状の形態で、北側は石枕を片付けた状態と推察される。鉄製品はそれぞれ間の長軸に対し西側へ軸を振った斜め方向で刃部はそれぞれ南側を向いていた。(1)は全長23.0cm、刀部18.0cmを測り、切先は丸く両端で茎尻が彎曲する。(2)は全長11.1cm、刀部8.0cmで茎尻は丸味をもつ。

なお、墳丘上および埋葬施設墓壙内、特に蓋石周辺で土器細片が出土しており、細片のため詳細不明なものもみられるが凹線文のある弥生中期土器片など多くは弥生土器であった。

下味野50号墳(第3・5・6・14・15図、図版2・3・6・7・15)

〔位置と現状〕 下味野50号墳は、調査区北西寄りに位置し、東北東へ延びる尾根稜線上、標高46.59～48.58mに立地する。尾根先端側に49号墳、48号墳が続き、西側緩斜面に53号墳が近接する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は33.8m弱である。調査前の観察では、東北東へ延びる尾根筋に幾つかの古墳状の高まりが認められ、その南西端の一番大きな高まりにあたり、尾根高位側に溝状の窪みは全くと言って認められなかったが低位側ではわずかに落ち込みが確認できた。平成12年度の試掘Tr-2、3トレンチで古墳と確認された。

〔墳丘〕 表土下7～18cm程度で墳丘面を検出した。墳丘全体に比較的厚く盛土がなされ、墳頂部東側で35cm、北西側で10cm程度が観察された。旧地表面もほぼ良好な状態で検出された。尾根稜線の軸方向



第14図 下味野50号墳 主体部出土遺物実測図

に長い方墳で、墳丘規模は東西方向で14.4m、南北方向で12.0m、墳丘の高さは東裾から2.0mを測る。墳丘は、三辺裾部の削り出しと尾根高位側に幅約4m、深さ1m弱の大規模な溝を掘削して尾根を切り離し墓域を区画するとともに斜面低位側により多く盛土することで造られている。なお49号墳との前後関係は、古墳の東側層断面から50号墳が49号墳より先行すると考えられる。

〔埋葬施設〕 墳頂部中央、墳丘全体ではやや南西側の斜面高位寄りで埋葬施設1基を検出した。埋葬形態は箱式石棺である。墓壇の平面形は比較的幅の広い隅丸長方形で、盛土上から地山を深く掘り込む。主軸は尾根稜線に対しやや軸を東へ振る。墓壇規模は現況で長さ3.48m、幅2.75m、深さは墳丘断面から1.05mを測る。墓壇はほぼ中央部をもう一段掘り下げる二段掘りで、底面はわずかに北側へ傾斜する傾向がみられるものの平坦で両小口溝と側板溝がほぼ周縁に掘り込まれる。側板溝は棺の固定というより高さ調節の役割がやや強いように見受けられる。

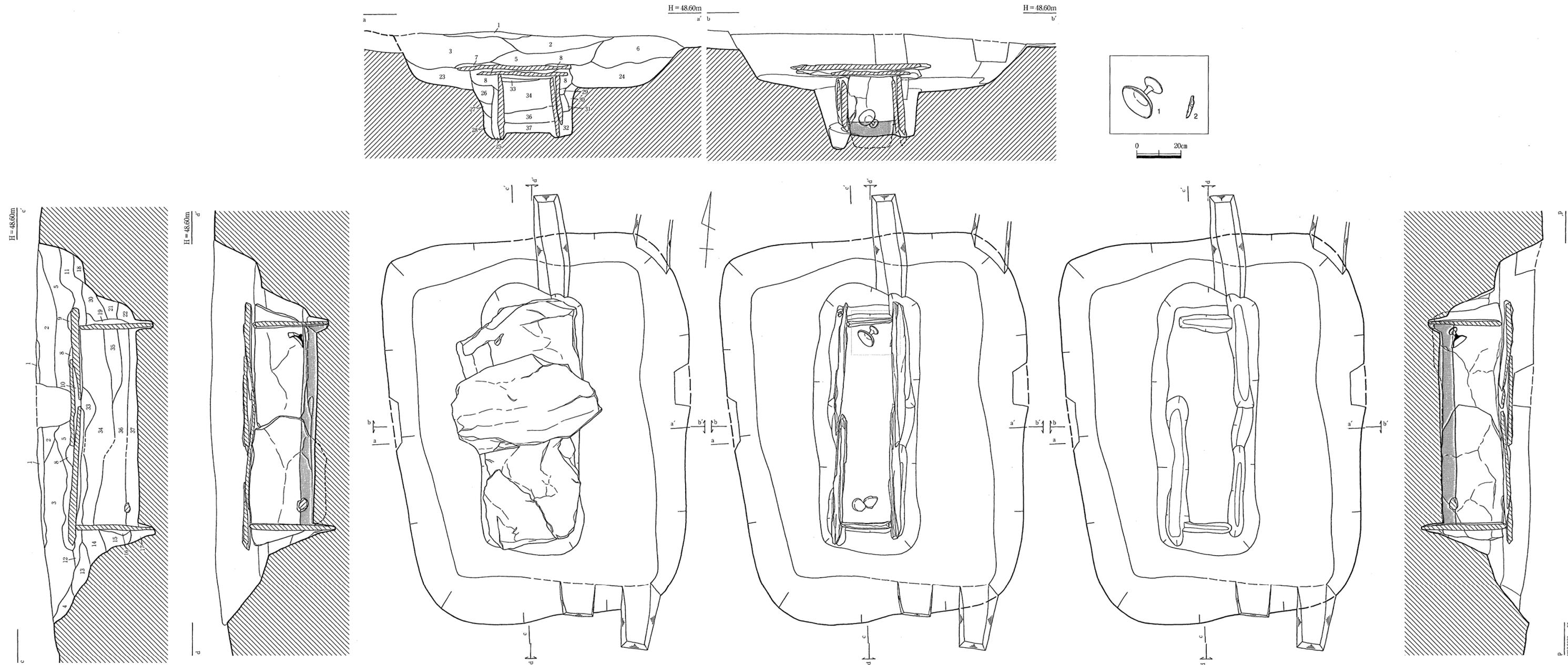
箱式石棺は、二段に掘り込まれた墓壇中央に設置され、棺の主軸はN-4°-Wをとる。棺幅はわずかに南が広いがそれほどの差でもなく、棺の内法は長さ1.83m、幅45cm、深さ46cmを測る。棺の底には黄褐色粘質土が7~12cmの厚さに敷かれる。蓋石は2石の繋ぎ目にもう1石を置き、蓋石の隙間および側板の周囲を粘質の強い褐色、明褐色あるいは明黄褐色粘質土で目張りする。石棺は側板2石をそれぞれ中央で被さるように繋ぎ合わせ両小口板を挟み込む構造である。

棺内には南小口側に拳大の円礫2点が並び、北小口側に完形の高杯(1)と東側の側板寄りに刀子(2)が出土している。南側の円礫は棺の床土内に埋め込まれた様相を示し、位置的に石枕の可能性を残す。北側の高杯に打欠きはなくやや南西を向くものの杯部内面が丁度頭に被さるような角度で床面に接地している。もちろん正位置に置かれたものが倒れた可能性もあるが、いずれにしても土器転用枕と考えられる。刀子(2)は被葬者の左肩あたりの位置になる。切先は足向き、刃部は側板側を向く。全長10.7cm、刀部7.1cmを測り、切先をやや欠き茎部に目釘穴を観察する。

下味野51号墳(第3・5・6・16・17図、図版2・3・7・8・15)

〔位置と現状〕 下味野51号墳は、調査区中央東端に位置し、東北東へ延びる尾根先端頂部からやや東へ張り出す尾根先端部、標高43.16~43.75mに立地する。尾根高位西に48号墳が配置する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は29mである。調査前の観察では、48~50号墳が立地する東北東へ延びる尾根筋から東へはずれ、緩斜面となって後世の改変を受けたとみられ特に51号墳が立地する辺りは幅5mほどの平坦面となっていた。50号墳から北東へ連続する土層ベルト沿いに設定したトレンチで溝を検出したことで古墳と判明した。

〔墳丘〕 表土下16cm程度で墳丘面を検出した。古墳の存在が明らかとなった時点でほぼ全域の表土除去を終えており、盛土の有無等が未確認となったが、西側に位置する48号墳の遺存状況などからも、盛



1. におい黄褐色粘質土
2. におい褐色粘質土 (暗褐色土ブロック及び橙色土ブロックを含む。)
3. 明褐色粘質土 (褐色土ブロック及び暗褐色土ブロックを含む。)
4. 褐色粘質土 (褐色土ブロック及び暗褐色土ブロックを含む。)
5. におい褐色粘質土 (2よりやや明。褐色土ブロック及び地山ブロックを多く含む。)
6. 褐色粘質土 (24よりやや明。地山ブロック及び褐色土ブロックを多く含む。)
7. 明褐色粘質土 (3よりやや暗。)
8. 明黄褐色粘質土と灰白色粘土の混合 (産石継ぎ目の目留め粘土。)
9. におい褐色粘質土
10. 褐色粘質土 (しまっていない。流入土。)
11. 褐色粘質土 (暗褐色土ブロック及び褐色土ブロックを僅かに含む。)
12. 褐色粘質土 (あまりしまっていない。)
13. 褐色粘質土 (4よりやや暗。地山ブロック及び褐色土ブロックを多く含む。)
14. 黄褐色粘質土 (地山ブロックを含む。)
15. 黄褐色粘質土 (14より明。褐色土ブロックを含む。ややしまる。)
16. 黄褐色粘質土 (乳灰色粘土ブロックを含む。よくしまる。)
17. 明黄褐色粘質土
18. 褐色粘質土 (20よりやや明。暗褐色土ブロック及び褐色土ブロックを含む。)
19. 褐色粘質土 (明黄褐色土ブロックを多く含む。)
20. 褐色粘質土 (暗褐色土ブロックを含む。褐色土ブロックを僅かに含む。)
21. 明黄褐色粘質土 (20より明。ややしまる。)
22. 明黄褐色粘質土 (21より暗。しまり弱い。褐色土ブロックを含む。)
23. 明褐色粘質土 (3よりやや暗。地山ブロック・褐色土ブロック及び褐色土ブロックを多く含む。)
24. 褐色粘質土 (地山ブロック及び褐色土ブロックを多く含む。)

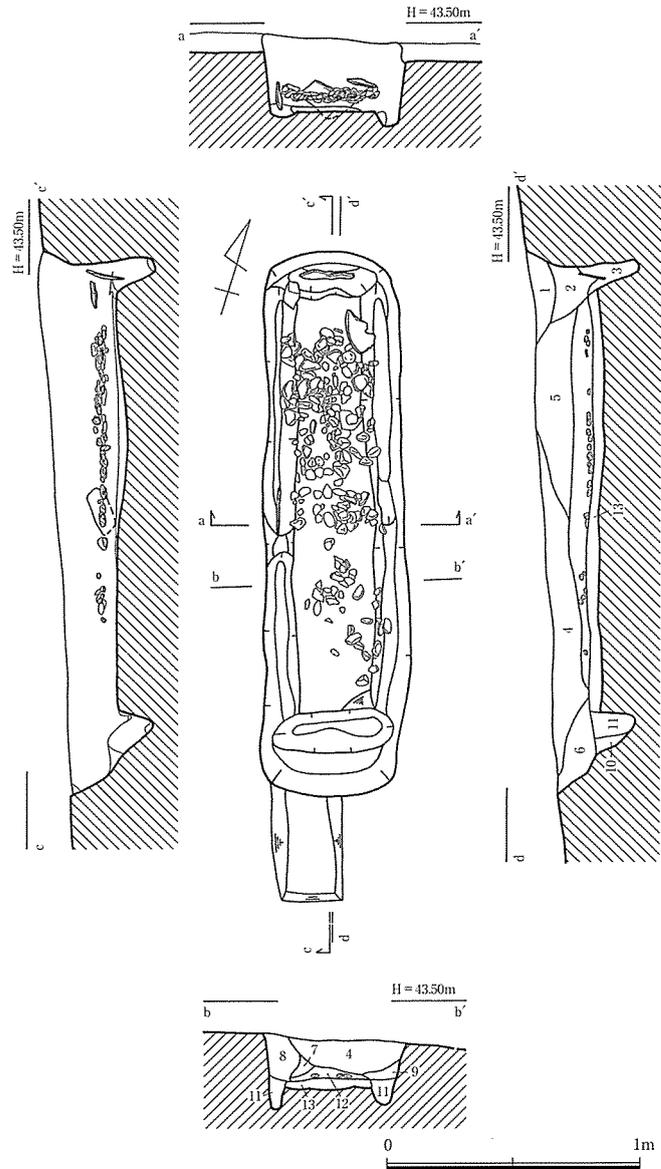
25. 黄褐色粘質土 (乳灰色粘土ブロックを含む。よくしまる。)
26. 明黄褐色粘質土 (23よりやや暗。褐色土ブロックを含む。)
27. 明黄褐色粘質土 (褐色土ブロックを含む。しまる。)
28. 黄褐色粘質土 (しまり弱い。)
29. 灰褐色粘質土
30. 明褐色粘質土
31. 褐色粘質土 (あまりしまっていない。)
32. 黄褐色粘質土 (褐色土ブロックを含む。しまる。)
33. 明褐色粘質土 (しまっていない。)
34. 褐色粘質土 (しまっていない。)
35. 褐色粘質土 (34より明。しまっていない。)
36. 褐色粘質土 (34よりやや明く35より暗。しまっていない。)
37. 黄褐色粘質土 (明黄褐色粘質土ブロック及び1~4cm大の礫を含む。床土。)

第15図 下味野50号墳 主体部実測図(S=1:30)

土および旧地表面、古墳東側部分は削平および流失したと考えられる。特に調査区境界付近では地山面が急激に東へ落ち込み、表土下は流土とみられる均一なぶい黄褐色シルトの厚い堆積が認められた。古墳の最高所は西～北側に掘削された幅2m余りの溝の肩部で、地山面である。尾根稜線に対し直交する軸をもつ方墳で、墳丘規模は南北方向で推定7.8m、東西方向で5.6mが遺存する。墳丘の高さは現況で北裾から59cmを測る。墳丘は、南東裾部の削り出しと尾根高位側にコ字形の溝を掘削し斜面低位に盛土することで造られていると推察される。

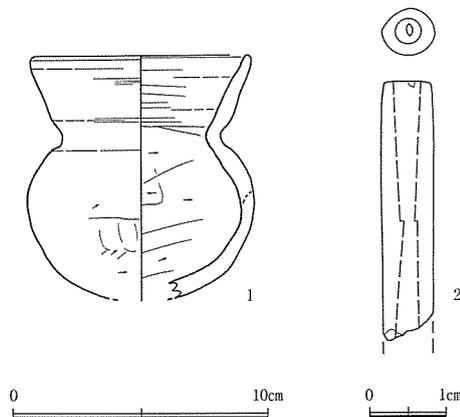
〔埋葬施設〕 西側溝肩から2.3m東の墳頂部で地山を掘り込んだ埋葬施設1基を検出した。平面形は隅丸長方形である。主軸は尾根の傾斜に直交方向のN-16°-Wをとる。表土および墓壙周辺で板石の出土はみられなかったが、棺材が抜き取られ痕跡が土層断面に認められ、墓壙内で板石の出土や円礫を用いた敷石、小口および側板溝の掘り込みなどから埋葬形態は箱式石棺と考えられる。墓壙規模は現況で長さ2.16m、幅58cm、深さ30cmを測る。棺の規模は内法で長さ1.65m、幅34cmが想定される。墓壙底面はわずかに北側へ傾斜するが厚さ4、5cm程度の茶褐色粘質土で床面を整え、その上に円礫を敷いて棺床としている。出土遺物は見られなかった。

〔その他の出土遺物〕 古墳北西側の周溝埋土から小形の壺(1)、主体部東側の調査区境界付近の表土下下層で碧玉製管玉(2)が出土している。(1)は口縁部は外傾し端部は内側に摘みながらも丸くおさめる。頸部は強いヨコナデで球形の体部へ続く。(2)は暗緑灰色で片端部を欠損し長さ3.43cmが遺存する。径0.7cmを測り両面穿孔である。



1. ぶい黄褐色粘質土 (しまり弱い)
2. ぶい黄褐色粘質土 (1より暗。0.5cm大の橙色土ブロックを含む。)
3. 暗褐色粘質土
4. 明褐色粘質土 (3～5cm大の円礫を含む。)
5. ぶい褐色粘質土 (4より暗。0.5～2cm大の地山ブロックを若干含む。)
6. 黄褐色粘質土 (0.5cm大の橙色土ブロックを含む。しまり弱い。)
7. 明褐色粘質土 (やや黄色かかる。)
8. 灰褐色粘質土 (根の攪乱。しまり弱い。)
9. 褐色粘質土
10. 明褐色粘質土
11. 黄褐色粘質土
12. ぶい橙色粘質土 (3～5cm大の円礫を含む。粘質やや強。)
13. 茶褐色粘質土 (地山ブロックを含む。)

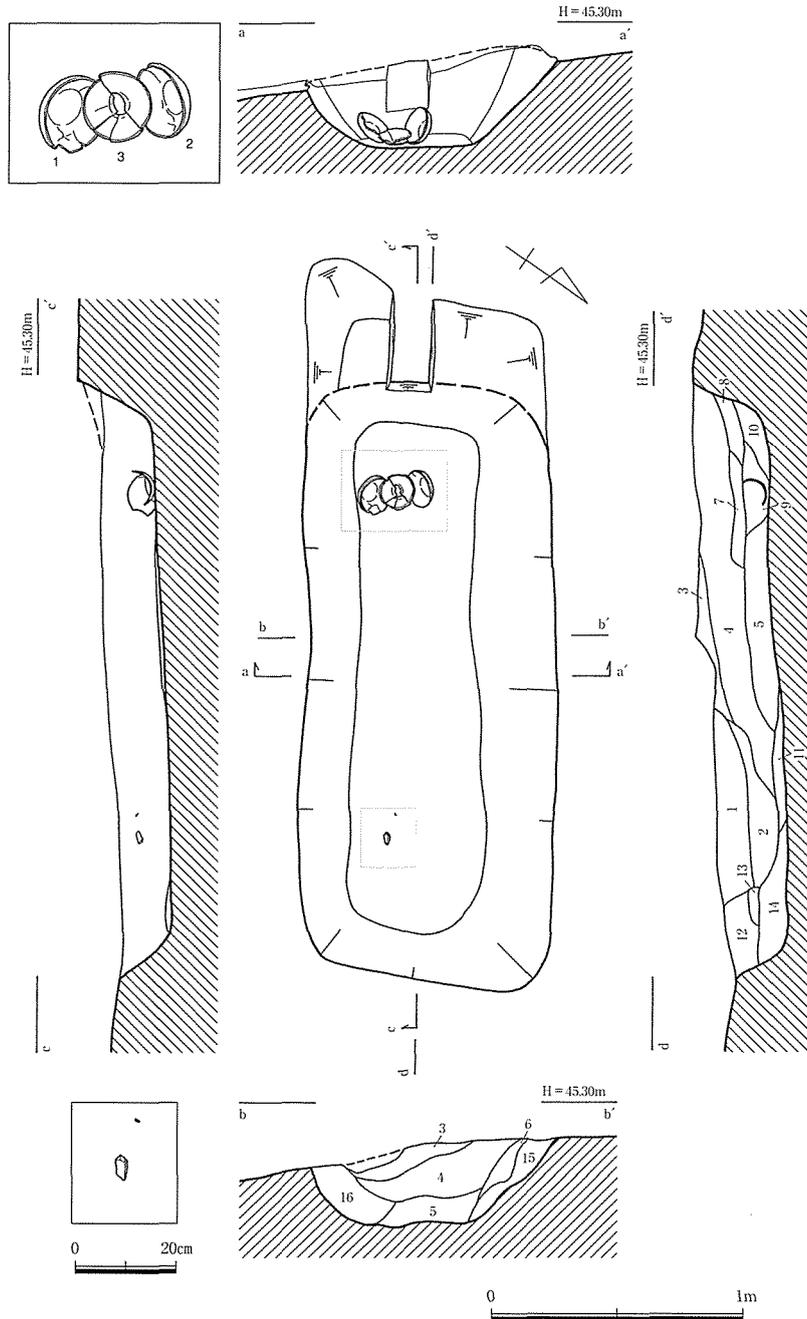
第16図 下味野51号墳 主体部実測図 (S = 1 : 30)



第17図 下味野51号墳 出土遺物実測図

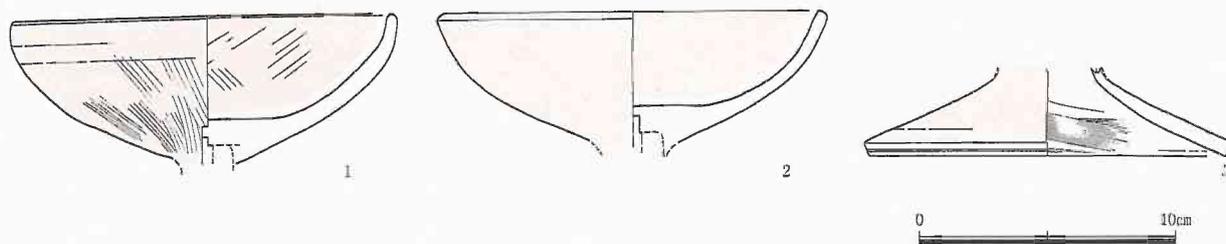
下味野52号墳(第3・5～7・18～20図、図版2・3・8・15)

〔位置と現状〕 下味野52号墳は、調査区中央部東寄りに位置し、48～50号墳が立地する東北東へ延びる尾根筋から南へ下る緩斜面、標高44.28～45.23mに立地する。北側の尾根上に48号墳、同じく北西に49号墳、緩斜面の南西隣に53号墳、さらに南斜面下位に54・55号墳が一部重複しながら配置し、非常に古墳密度の高い位置にあたる。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は30.5mである。調査前の観察では、東北東へ伸びる尾根の高まりを南へ下ったあたりに円形状の平坦面がいくつかみられ、52号墳と53号墳の境界部には弧状の窪みが認められた。52号墳の斜面高位側には東へ延びる一直線の後世の溝が観察された。西側に弧状の窪みと平坦面の存在から古墳と想定された。

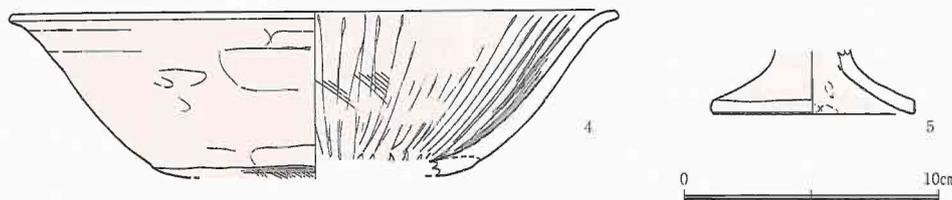


- | | |
|------------------------------|-------------------------------------|
| 1. 灰黄褐色粘質土(黒褐色かかる。明黄褐色土を含む。) | 10. 明黄褐色粘質土(8より灰色かかる。) |
| 2. にぶい黄褐色粘質土(1より明。) | 11. にぶい黄褐色粘質土(やや灰色かかる。しまる。) |
| 3. 明黄褐色粘質土(灰黄褐色土を含む。) | 12. にぶい黄褐色粘質土 |
| 4. 明黄褐色粘質土 | 13. 黄褐色粘質土(しまり弱い。) |
| 5. 黄褐色粘質土(やや灰色かかる。しまりやや弱い。) | 14. にぶい黄褐色粘質土(やや灰色かかる。炭片を若干含む。しまる。) |
| 6. にぶい黄褐色粘質土 | 15. にぶい黄褐色粘質土(やや灰色かかる。しまる。) |
| 7. 灰黄褐色粘質土(黒褐色かかる。) | 16. にぶい黄褐色粘質土(5より暗。炭片を若干含む。) |
| 8. 明黄褐色粘質土(黄褐色かかる。) | |
| 9. 黄褐色粘質土(僅かに黒褐色土を含む。) | |

第18図 下味野52号墳 主体部実測図(S = 1 : 30)



第19図 下味野52号墳 主体部出土遺物実測図



第20図 下味野52号墳 周溝内出土遺物実測図

〔墳丘〕 表土下6～15cm程度で墳丘面を検出した。49号墳からの流土が著しく、墳丘部の最高所は埋葬施設の西側で地山面であった。埋葬施設の南側一帯は旧地表面が露出しており、盛土は確認されなかった。また古墳の南側は急斜面となってさらに下位では54号墳および55号墳の周溝によって掘削を受け、南側の古墳範囲は不明となる。尾根斜面に対し直交する軸をもつ方墳で、墳丘規模は東西方向で8.2m、南北方向で4.6mが遺存する。墳丘の高さは現況で北東裾から95cmを測る。墳丘は、南裾部の削り出しと尾根高位側に幅1.5m、深さ推定80cm程度のしっかりしたコ字形の溝を掘削し斜面低位に盛土することで造られたと推察される。

〔埋葬施設〕 遺存する墳頂平坦面中央で地山を掘り込んだ埋葬施設1基を検出した。平面形は隅丸長方形である。主軸は尾根斜面の傾斜に直交するN-54°-Eをとる。墓壇規模は現況で長さ2.37m、幅1.01m、深さは墳丘断面から42cmを測る。墓壇底面は北東側へ傾斜し、やや中央部南西付近が窪む。土層断面の観察から木棺や棺の裏込めとみられる痕跡は積極的には認められず、墓壇底面の形状などからも直葬と考えられる。

墓壇南西側で、高杯杯部2点と脚裾部1点を組み合わせた土器枕、東壁側の底面から10cm弱浮いた状態で土器細片2点が出土している。土器枕は、脚裾部内面を上にして頭の置台とし、内面を上にした杯部2点を両側に挟み込む形態で、49号墳主体部にみられる逆A字状石枕と同様な構造をとる。

同様な形態の赤彩された椀形高杯(1)(2)は口径14.6cm、14.7cmを測り高さもほぼ同じで、風化剥落のため調整不明瞭となるが(1)内面に放射状の暗文、外面にハケ目のち口縁部ヨコナデ調整が認められる。脚裾部(3)も風化剥落のため調整不明瞭となるが脚径14.0cmと大きく(1)(2)とは別個体である。赤彩され内面にハケ目が観察される。打ち欠いた高杯の残部は杯部(1)(2)については周辺では確認されなかったが、脚裾部(3)の杯部の可能性のある高杯が北西側周溝内で出土している。

〔その他の出土遺物〕 北側周溝内で高杯および土器細片が出土している。このうち比較的実測可能な(4)(5)を図化した。特に北西周溝の埋土下層で出土した(4)は赤彩された有段高杯で、4分の1程度の残存で比較的壁面の遺存状態は良い。内面に放射状の暗文が施され、赤彩時の横方向の塗彩痕が観察される。西側の周溝埋土下層で出土した脚裾部(5)は赤彩されハケ目は観察されない。土器枕に使用された(1)(2)の脚部の可能性も全くないではないが、(5)はやや小形のように思われる。

下味野53号墳(第3・5・7・21・22図、図版2・3・8・9)

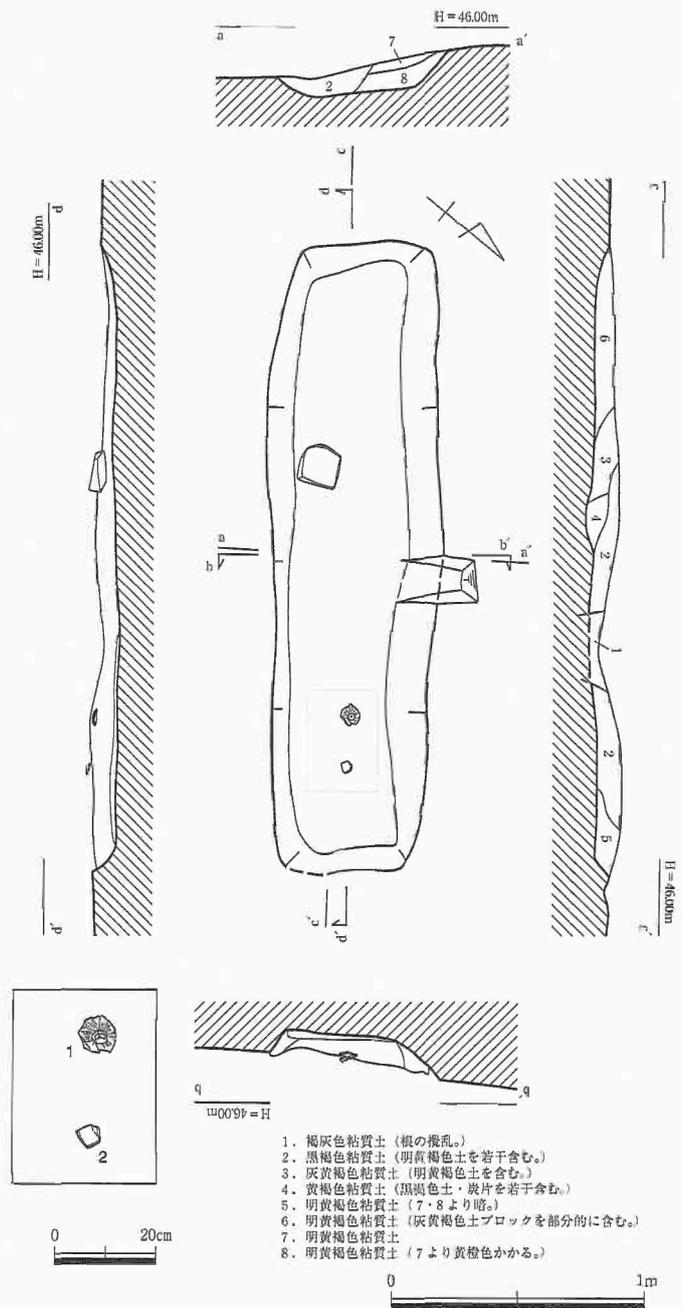
〔位置と現状〕 下味野53号墳は、調査区中央部に位置し、48～50号墳が立地する東北東へ延びる尾根筋から南へ下る緩斜面、標高44.98～45.99mに立地する。北側の尾根上に49号墳、同じく北西に50号

墳、緩斜面の南東隣に52号墳、さらに南斜面下位に54号墳が一部重複しながら配置し、非常に古墳密度の高い位置にあたる。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は31.3mである。調査前の観察では、東北東へ伸びる尾根の高まりを南へ下ったあたりに円形状の平坦面がいくつかみられ、52号墳と53号墳の境界部には尾根高位から続く弧状の窪みが認められた。弧状の溝と平坦面の存在から古墳と想定された。

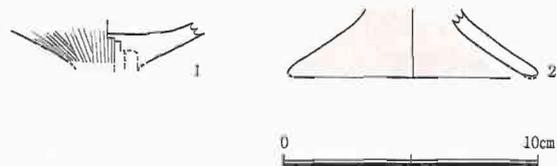
〔墳丘〕 表土下5～14cm程度で墳丘面を検出した。墳丘部の最高所は埋葬施設の北西側で地山面であるが、埋葬施設の東側一帯に最大24cmの盛土が遺存していた。旧地表面は確認されなかった。また古墳の南側は斜面となって下り、さらに下位では54号墳の周溝によって掘削を受け、南側の古墳範囲は不明となる。49・52号墳と重複するものの北側周溝角周辺について十分明らかにできなかった。尾根斜面に対し直交する軸をもつ方墳と考えられ、墳丘規模は東西方向で7.9m、南北方向で5.4mが遺存する。墳丘の高さは現況で北東裾から1.01mを測る。墳丘は、南裾部の削り出しと尾根高位側に溝を掘削し斜面低位に盛土することで造られたと推察される。

〔埋葬施設〕 遺存する墳頂平坦面の北側斜面高位寄り地山を掘り込んだ埋葬施設1基を検出した。平面形は隅丸長方形である。主軸は尾根斜面の傾斜に直交するN-52°-Eをとる。墓壇規模は現況で長さ2.49m、幅67cm、深さは13cmを測る。墓壇底面は凹凸がみられ中央部が木根の攪乱を受ける。主体部の上層は尾根高位からの流土でかなりの部分流失を受けており、遺存する墓壇断面からは積極的に棺の痕跡は認められず、埋葬形態は木棺直葬あるいは直葬が考えられる。

墓壇北東側で高杯杯底部(1)と脚裾部(2)が、東側壁面寄りで15×15×8cmの角礫が出土している。(1)(2)は底面から8～10cm浮いており、黒褐色土中の出土である。主体部上は尾根高位からの流土がかなりあったことからこれらの遺物は流れ込みの可能性がある。(1)(2)は赤彩され、(1)は椀形高杯と思われる。内面はナデ、外面にハケ目が観察される。(2)は推定径9.2cm、風化剥落で調整は不明である。



第21図 下味野53号墳 主体部実測図(S=1:30)

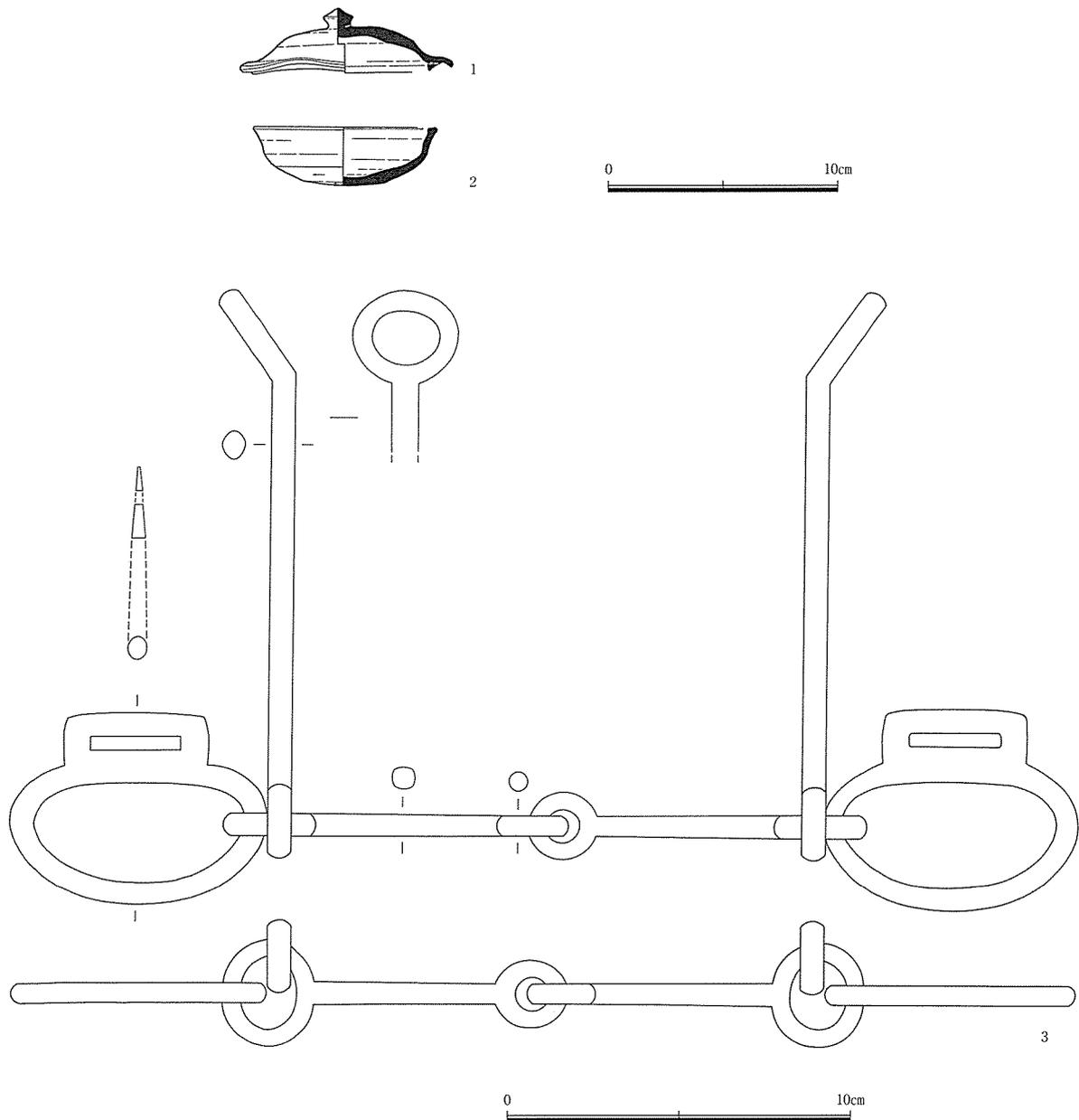


第22図 下味野53号墳 主体部出土遺物実測図

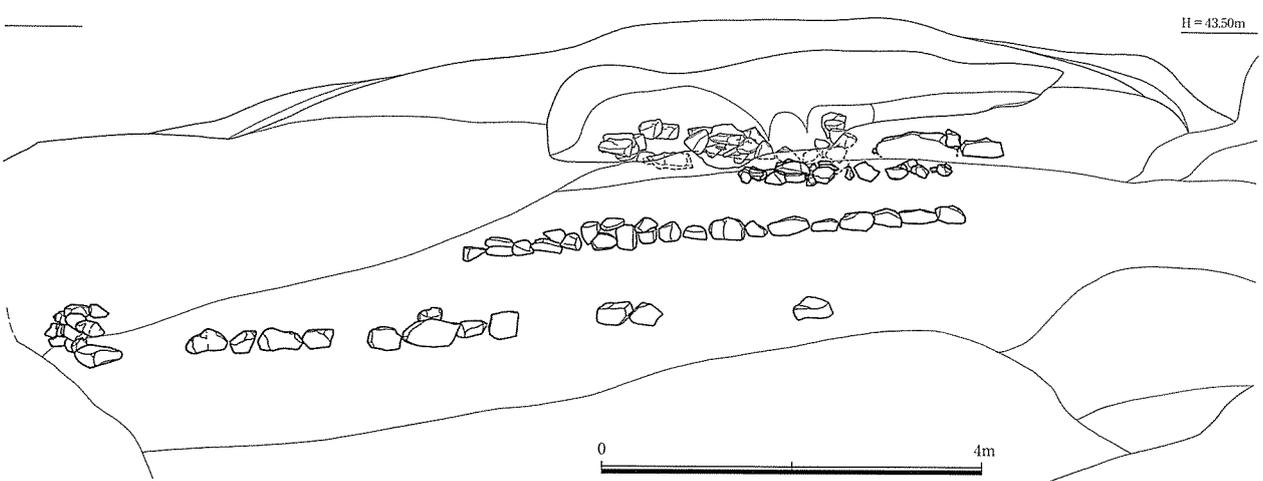
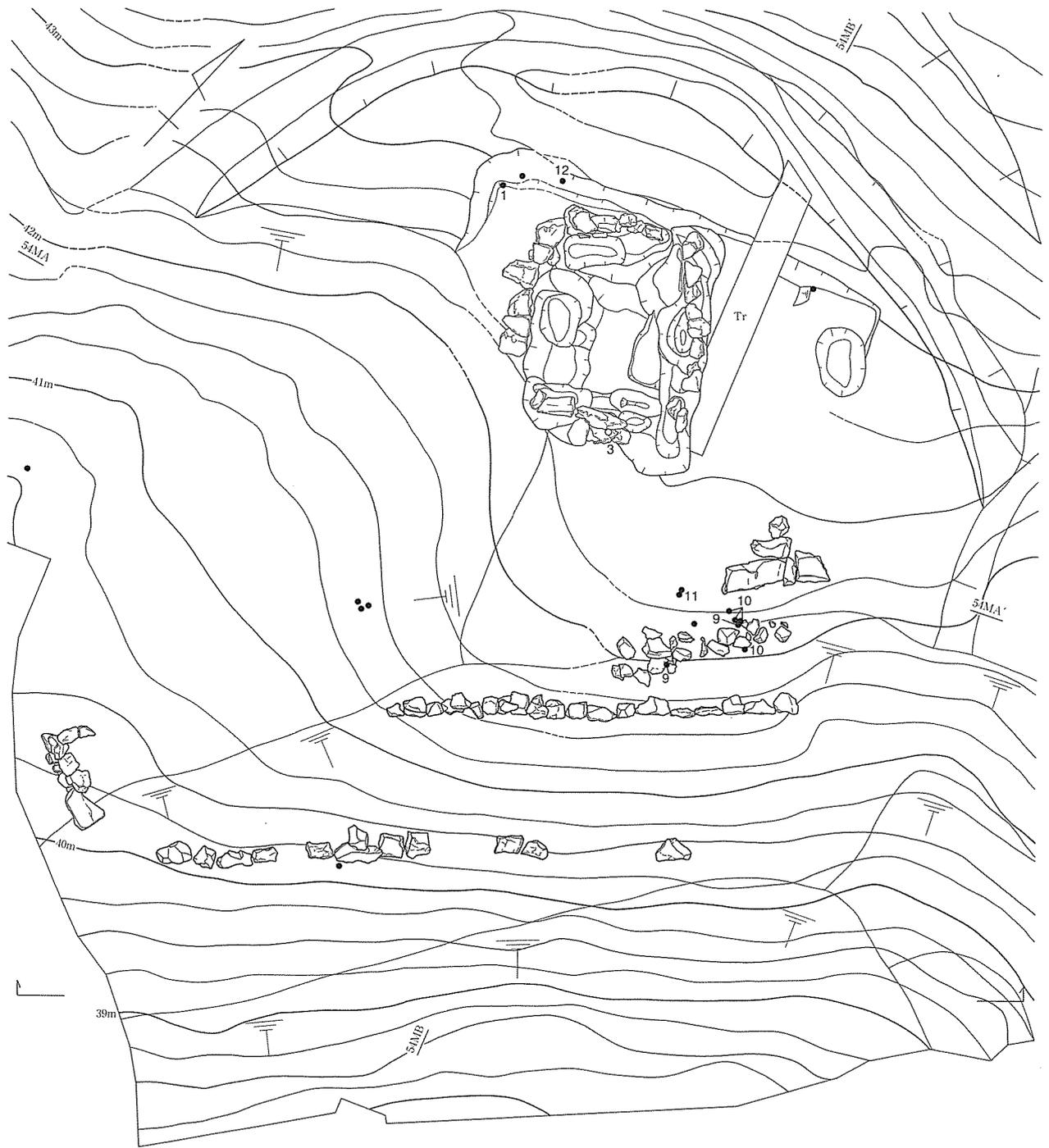
下味野54号墳(第3・5・7・23~28図、図版2・3・9・10・15・16)

〔位置と現状〕 下味野54号墳は、調査区中央部南寄りに位置し、48~50号墳が立地する東北東へ伸びる尾根筋から南へ下る緩斜面、標高39.32~43.57mに立地する。斜面高位の北側に52号墳、北西に53号墳、斜面の東隣に55号墳が一部重複しながら配置し、非常に古墳密度の高い地帯ながら斜面低位の位置にあたる。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は28.8mである。調査前の観察では、48~50号墳が立地する東北東へ伸びる尾根の南緩斜面には円形状の平坦面がいくつかみられ、さらにそれらの下位に三角状の平坦面が観察された。平坦面の東側は急激な崖となっており、積極的には古墳と想定できなかった。

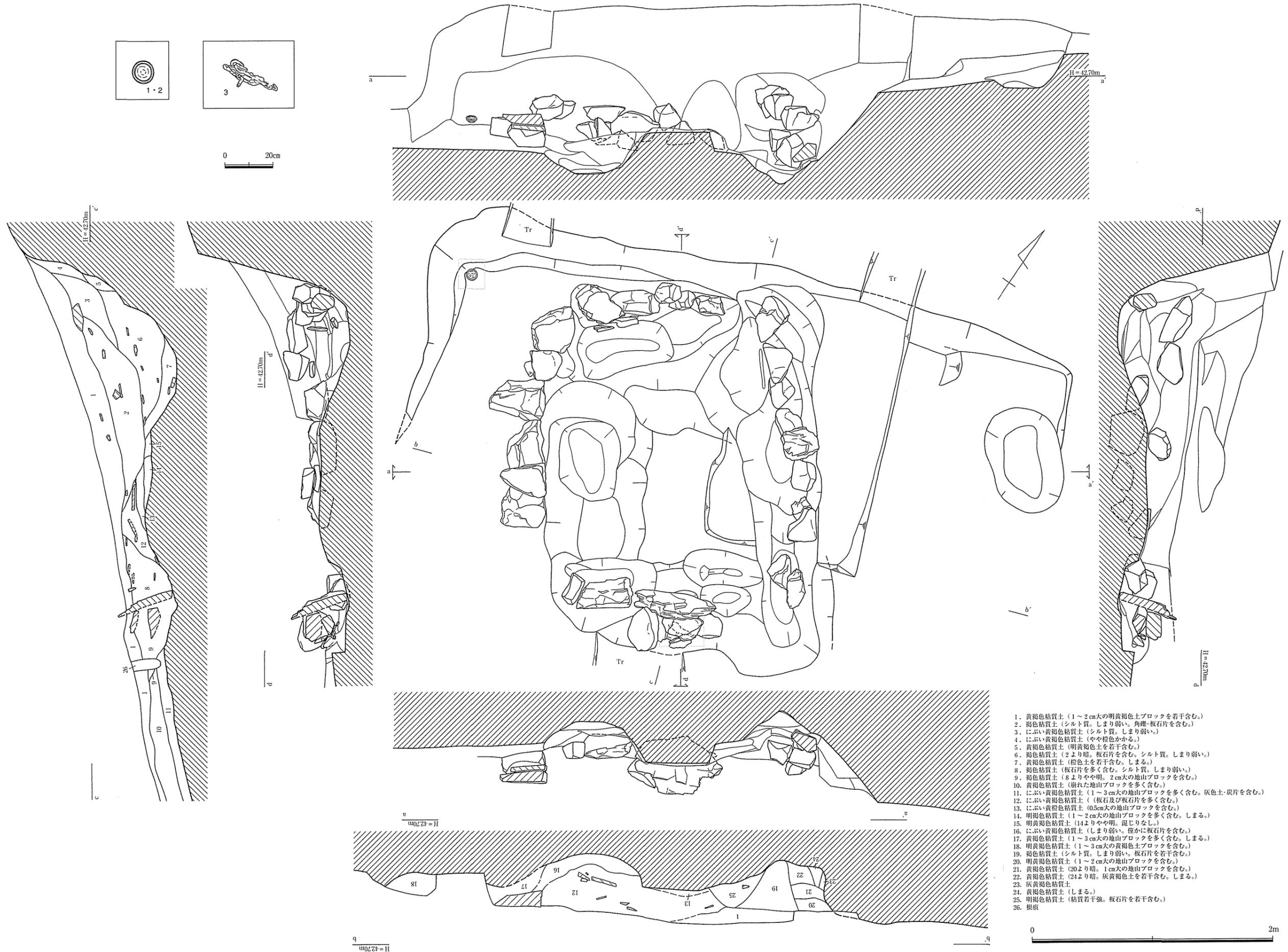
〔墳丘〕 表土下10~18cmで墳丘面を検出した。墳丘部の最高所は北側周溝近くにとり、盛土は遺存する墳丘全域で観察され、主体部南側で最大55cmが確認された。旧地表面は主体部周辺及び上位には認められず南側の地域で良好な状態で確認された。北側に掘削された弧状の周溝の規模から、本来墳丘全体に盛土が施されたと想定され、上部はかなり流失しているとみられる。現況の墳丘規模は東西方向10.7



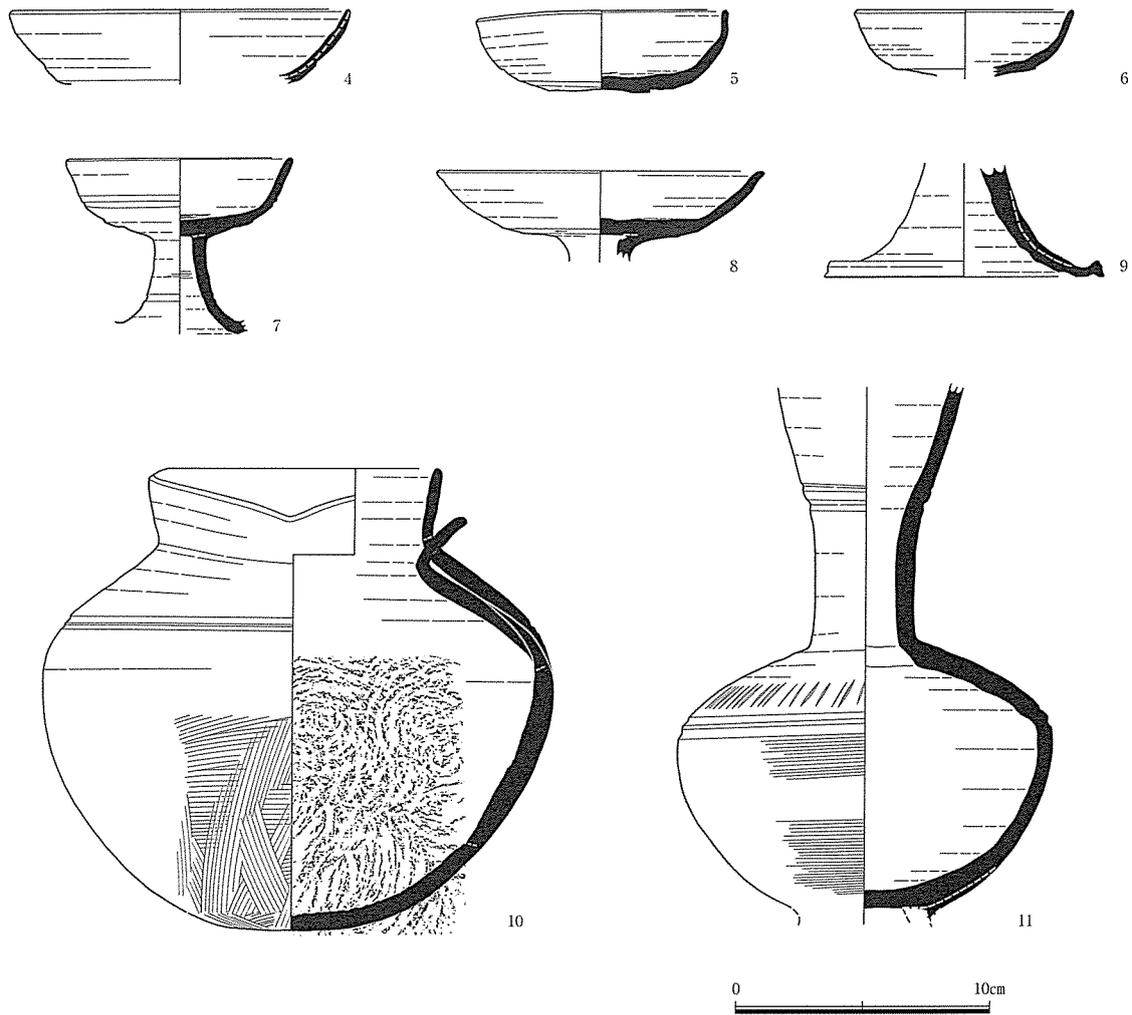
第23図 下味野54号墳 主体部出土遺物実測図



第24図 下味野54号墳 外護列石実測図(S = 1 : 80)



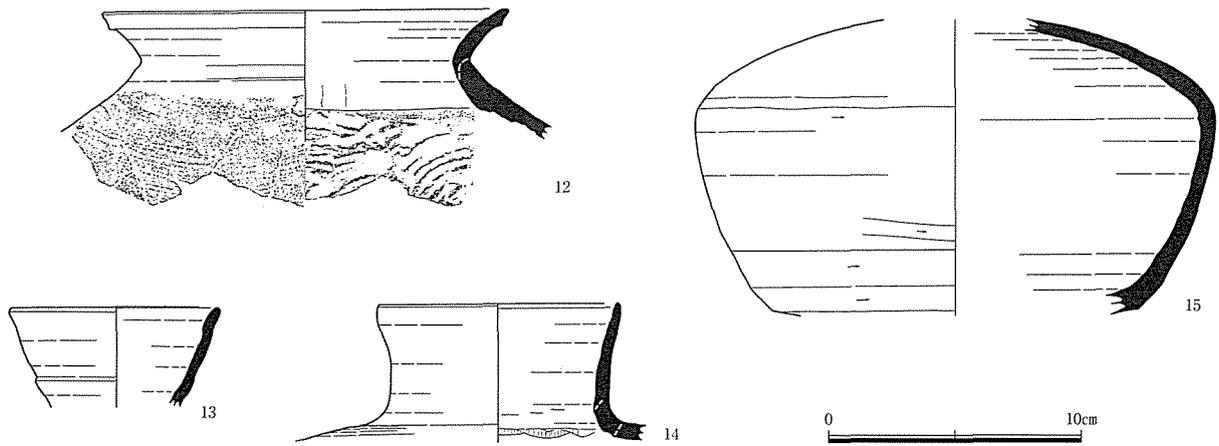
第25図 下味野54号墳 主体部実測図 (S=1:30)



第26図 下味野54号墳 外護列石周辺出土遺物実測図

m、南北で10.5mである。北側の周溝径を考慮に入れると径10mの円墳が復元される。墳丘の高さは南裾から現況4.25mを測る。墳丘は、主に北側斜面高位側に弧状の周溝を掘削することで墓域を確保している。斜面高位の周溝上端から周溝幅は約3m、深さ1.5mを測る。墳丘の築造は北側の周溝を掘削し、その土を南の斜面低位側へ厚く盛って築造したとみられる。墳丘北側で30cm程度の盛土が遺存しており、その本来盛られたであろう高さはかなりの土量が想定される。元々古墳南東側の地形は急斜面であり、厚い盛土の流失を防ぐためと考えられる外護列石を設ける。列石は南東墳丘斜面に3段3列が認められ、最下段の南西端は角をとり一部西側へ及ぶ。列石は主体部および斜面の傾斜に対し直交する軸で、北東側へ標高をやや上げながら一石が直線的に並ぶ。墳丘断面の観察から墳丘構築時に設けられたとみられる。上段の列石はやや乱れが認められ、周辺で須恵器片が集中して出土している。また、その北側上方にやや大きめの数石が検出されたが、主体部が大きく攪乱を受けていることなどから列石としての扱いには検討の余地が残る。東の55号墳との関係は、土層断面などから54号墳が55号墳に先行すると思われる。

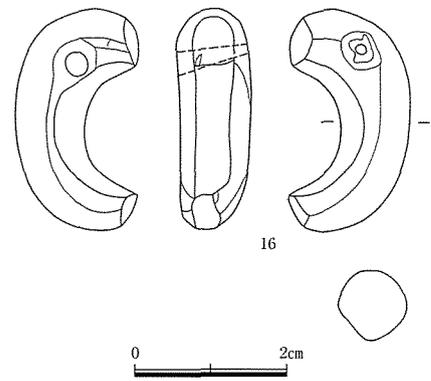
〔埋葬施設〕 墳頂部中央よりやや北の斜面高位寄りで埋葬施設1基を検出した。墓壙は地山面に尾根斜面に対し直交する軸で幅約5.5mのコ字形の掘削を行い、その西寄り部に軸をやや西のN-37°-Wへ振る隅丸長方形の墓壙を掘り込んでいる。墓壙の規模は現状で、長さ3.08m、幅2.30m、深さ約50cmを測る。墓壙内は斜面高位からの流土および板石を多く含んだ攪乱土で埋まる。墓壙の外縁には、20~50cm大程度の自然石、墓壙の中央部は1.1×0.95m程度の平坦面があり、その間は石材抜き取りおよび大形



第27図 下味野54号墳 出土遺物実測図(1)

の石を据えたと考えられる複数の土坑状の落ち込みが検出された。また、墓壙の南東端では厚さ8cm程度の板状の石が立っておりその背後を支えるように小規模な石が積まれていた。これらの状況から、本来横穴式石室が構築され、南東端の立石は閉塞石で、南東へ開口する両袖式の石室と考えられる。石室の内法は幅1m弱、奥行き1.6m程度が推測される。羨道部は元々そう長くはなかったとみられ流失している。

遺物は、石室内には何も遺存せず、墓壙外周のコ字形の掘り込み西端角部分で須恵器蓋杯のセット(1)(2)が、閉塞石支石の下から馬具の轡(3)が出土した。蓋杯(1)(2)は完形で杯蓋(1)の内面を上に向け杯(2)内面に重ねた状態で置かれていた。(1)は径9.3cm、高さ2.9cmと小形で、宝珠形つまみと内側にかえりをもつ。(2)は径7.9cm、高さ2.6cmと蓋より小形で口縁部に受部はなく肥厚する端面をもつ。馬具轡(3)は二連銜は鉄棒の両端を環状にし板状立間が付いた楕円形状の鏡板と引手を取り付ける。全体に銹化が進む。

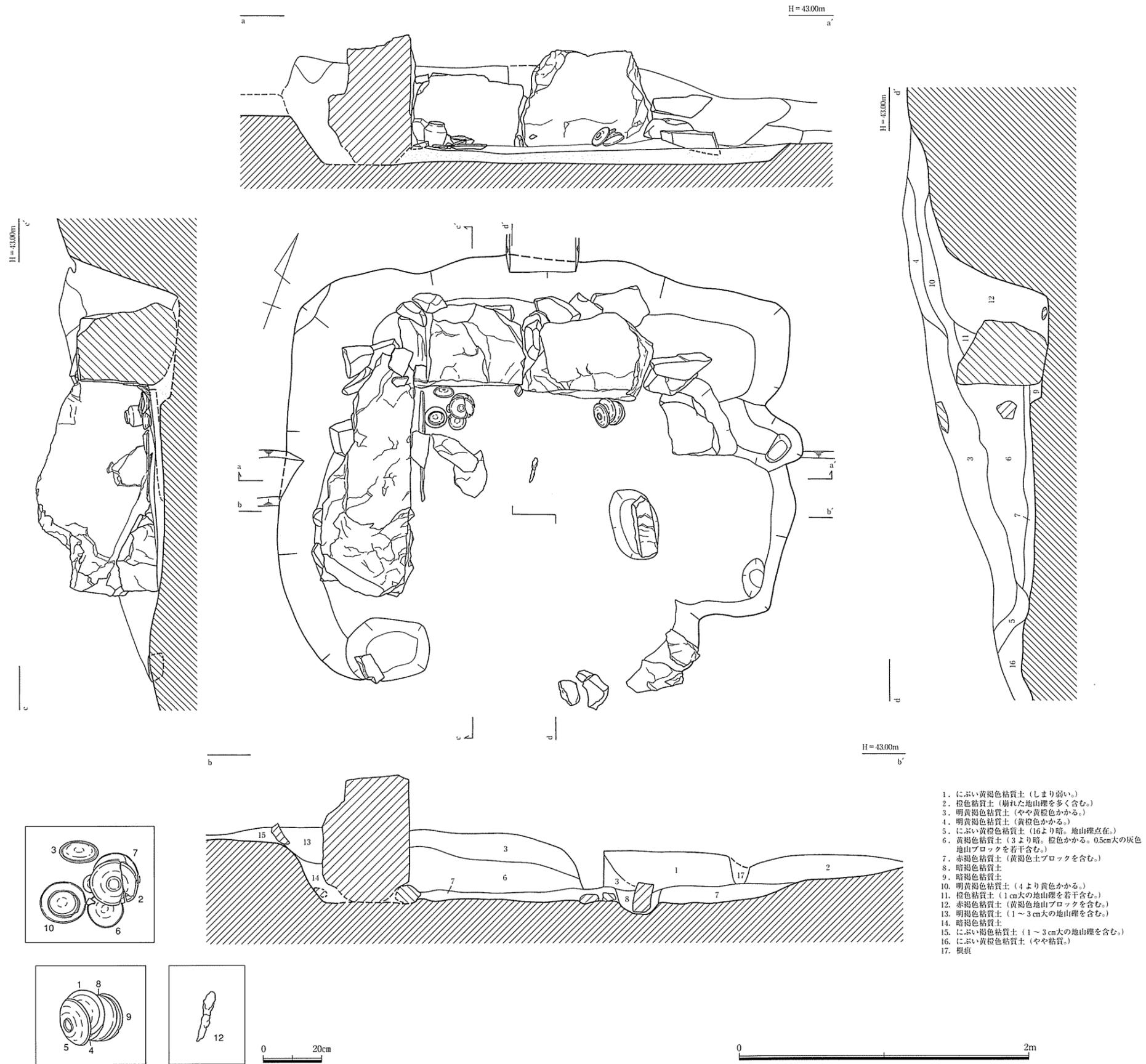


第28図 下味野54号墳 出土遺物実測図(2)

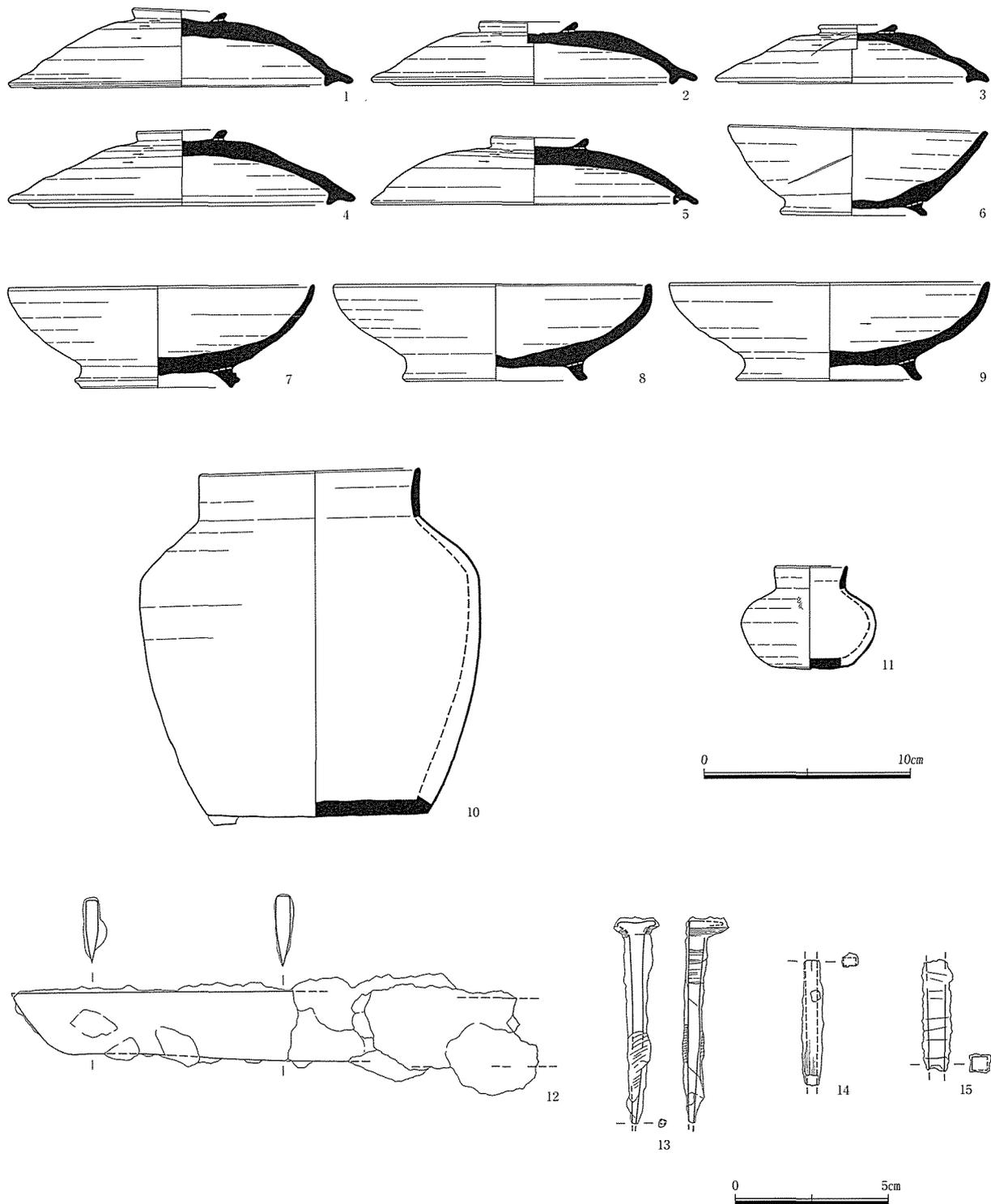
〔その他の出土遺物〕 石室東側の上段の外護列石付近と北西周溝内、墳丘表土下で須恵器が出土しておりこのうち実測可能な(4)~(15)を図化した。また、石室南東2mの墳丘斜面表土下層から碧玉製の勾玉(16)が出土しており、54号墳の埋葬品であった可能性が高い。列石付近で出土した須恵器は完形のものではなく皆破片で、蓋杯、高杯、台付長頸壺、壺がみられる。石室内の攪乱遺物の可能性もあるが、この周辺で祭祀行為が行われたとも考えられる。(4)は高杯の可能性があり、高杯は蓋杯(5)に似た形態の杯部(6)(7)と皿状に開く(8)との形態とがみられる。壺(10)は直立する口縁は片口をもち、体部下外面に横後縦ハケ目を施す。台付長頸壺(11)は口頸部が10.4cm以上と長く、肩部にヘラ工具による連続刺突文、体部下半にカキ目を施す。(12)は破片となって北西周溝および墓壙近くの表土下で出土した壺口縁で、(13)~(15)はいずれも墳丘表土下で出土しており、(14)(15)は複数箇所出土したものが接合している。

下味野55号墳(第3・5・7・29~31図、図版2・3・10・16・17)

〔位置と現状〕 下味野55号墳は、調査区中央部東端に位置し、48~50号墳が立地する東北東へ伸びる尾根筋から南へ下る緩斜面、標高41.46~43.03mに立地する。斜面高位の北西側に52号墳、斜面の西隣に54号墳が一部重複しながら配置し、非常に古墳密度の高い地帯ながら斜面の一番下位に位置する。南東墳裾部は調査区外となり確認できなかつた。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は28.3mである。調査前の観察では、48~50号墳が立地する東北東へ伸びる尾根の南緩斜面には円形状の平坦面がいくつ

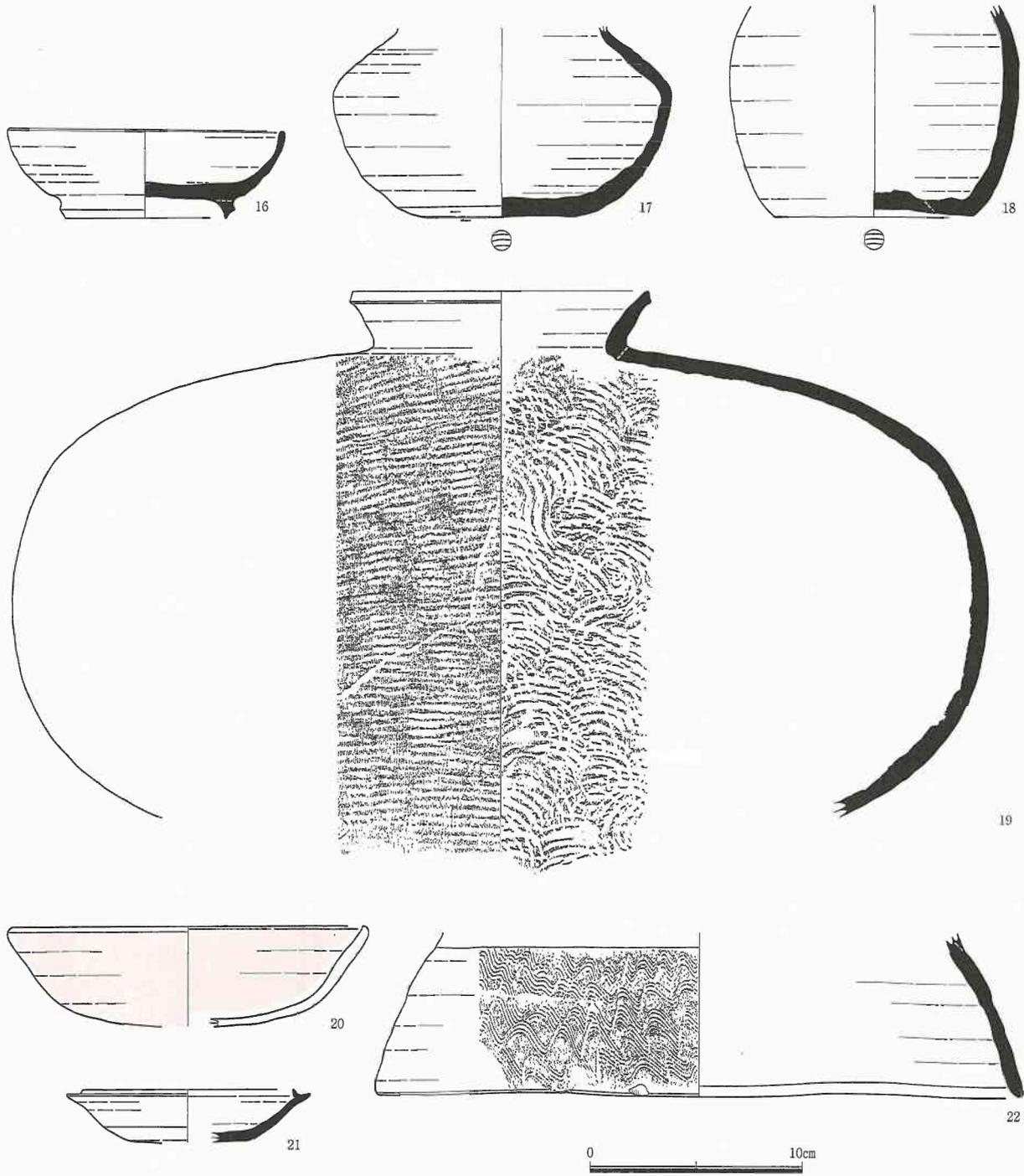


第29図 下味野55号墳 横穴式石室実測図 (S = 1 : 30)



第30図 下味野55号墳 石室内出土遺物実測図

かみられ、さらにそれらの下位に54号墳が立地する三角状の平坦面が観察されたが、55号墳は南東へ下る斜面にあたり、墳丘状の高まりや周溝状の窪みは特に観察されなかった。唯一露頭する石塊が横穴式石室の存在を懷疑させ、確認のため掘り下げたトレンチによって横穴式石室を内部主体とする古墳と判断された。



第31图 下味野55号墳 出土遺物実測図

〔墳丘〕 表土下5～14cm前後で墳丘面を検出した。墳丘部の最高所は北側周溝近くにあり、盛土も北側周溝から石室にかけての北西側部分で最大20cmが確認された。旧地表面は調査範囲内では認められなかった。北側に掘削された弧状の周溝の規模から、本来墳丘全体に盛土が施された想定され、上部は石室の露出からみてもかなり流失している。南西側は崖で崩れ、南東部は調査区外となるものの、かなり流失しているものとみられる。現況での墳丘規模は東西方向9.1m、南北で7.6mが遺存、北側の周溝径を考慮に入れると径9m程度の円墳が復元される。墳丘の高さは南裾から現況1.6mを測る。墳丘は、主に北側斜面高位側に弧状の周溝を掘削することで墓域を確保し、掘削した土を南の斜面低位側へ厚く盛って築造したとみられる。北側周溝の規模からその本来盛られたであろう高さはかなりの土量が想定される。

〔埋葬施設〕 墳頂部北西寄りで横穴式石室を検出した。天井石は失われ、奥壁および北西壁の腰石、右袖石と柵石、斜面高位側が遺存する状況である。石室は尾根斜面の傾斜に並行する東北東に開口し、主軸はN-69°-Eをとる。奥壁幅1.43m、右壁長1.52mを測り、玄室は正方形に近いプランをもつ。玄室の遺存高は奥壁で78cmを測る。墓壇掘り方の規模は、東西3.55m、南北2.96m、深さ65cmを測りその軸は斜面傾斜に対しやや東へ振る。掘り方底面には腰石、袖石を設置するための掘り込みが随所に確認される。奥壁には1.65×0.55×0.9mの石材を垂直横位に据えて腰石とし、右袖には2石を面をそろえて配している。床面には玄門部に框石を設置している。また右奥壁寄りに板石を立てた仕切りが設けられている。石室内には北側を中心に遺物が比較的良好な状態で遺存しており、奥壁右隅と、右袖にまとまった須恵器を検出した。また、石室中央北西寄りで鉄刀、石室埋土から鉄釘、鉄鏃茎部が出土している。

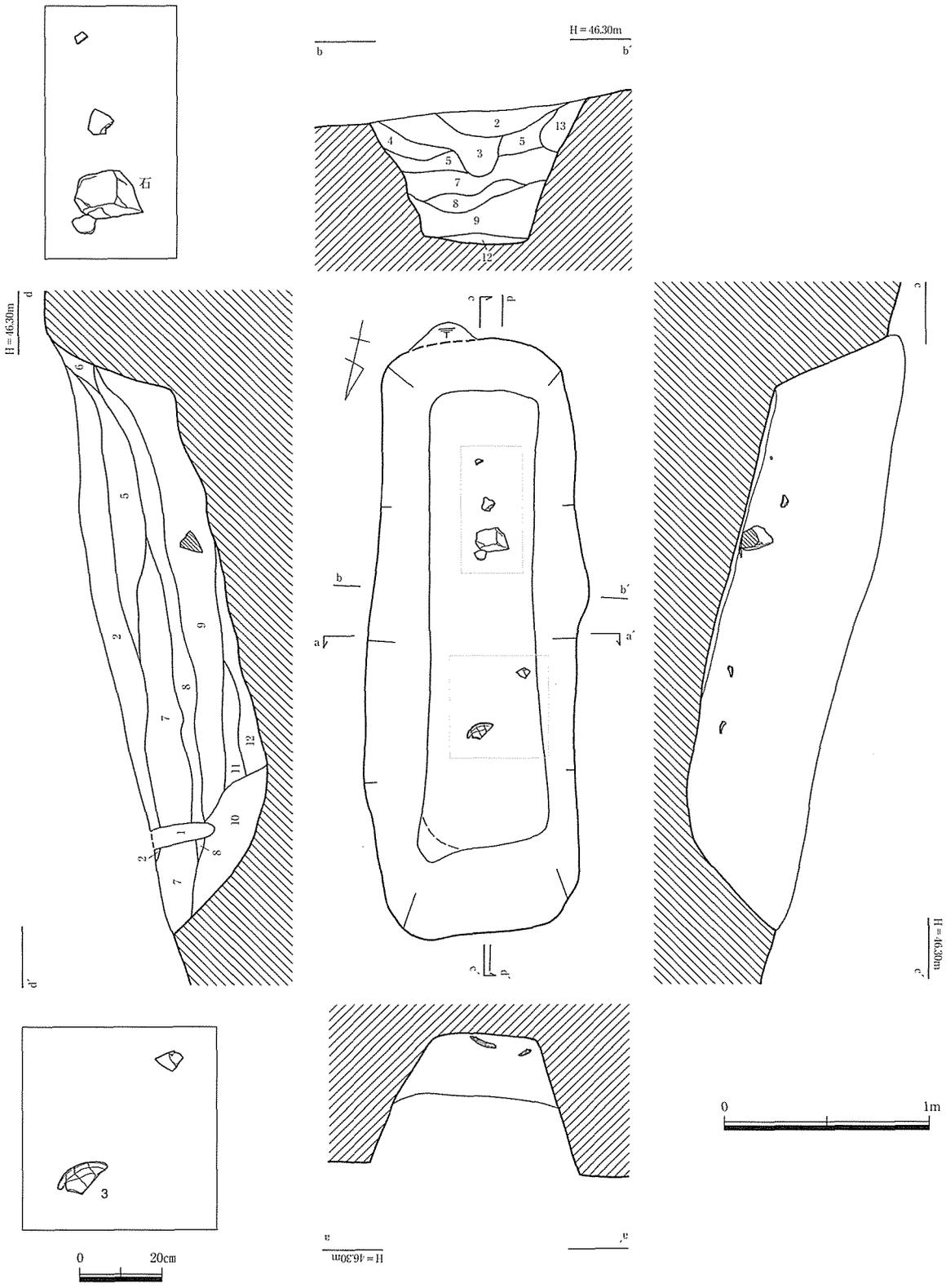
須恵器杯蓋(1)～(5)は天井部に輪状の摘みが付き、杯部(6)～(9)は高台付杯である。壺(10)は肩部の張る直口壺で、(11)は小形の壺である。鉄刀(12)は切先部3.6cmの遺存で銹化著しい。鉄釘(13)はわずかに尖先を欠損し、頭部はL字状である。木質痕が認められる。鉄鏃(14)(15)は茎部の遺存で木質および巻締痕が観察される。

〔その他の出土遺物〕 北西側周溝内および墳丘北側表土下、石室南東の表土下から土師器片、須恵器が出土しており、特に西～北西周溝内でまとまった須恵器片を検出した。このうち比較的事実可能な(16)～(22)を図化した。高台付杯(16)、壺(17)(18)、横瓶(19)、土師器杯(20)、杯身(21)、器台(22)がある。(16)は高台が杯底部屈曲部よりやや内側に付いており、口縁部は内彎して立ち上がる形態である。(20)は赤彩が認められ、口縁部はて状。(21)は口径10.0cm、わずかな立ち上がりは受部からほんの摘み程度に突出し、外面底部は平坦である。(22)は台裾端部は丸くおさめ、外面にやや雑な波状文が観察される。

2. 弥生時代の埋葬施設の調査

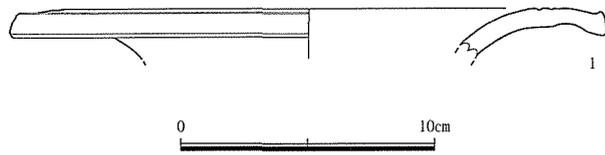
SX-01(第5・32・33図、図版2・3・11)

SX-01は、調査区中央部北端に位置する。東北東へ延びる尾根筋から北西へ下る斜面、標高45.11～46.14mに立地する。位置的には49号墳の北西墳裾部にあたり、東隣にほぼ並列するSX-02とともに当初は49号墳に帰属する埋葬施設と思われた。墓壇平面は隅丸長方形で、主軸は斜面の傾斜に対し並行方向のN-13°-Wをとる。規模は現況で2.89m、幅1.02m、深さ1.02mを測る。横断面は逆台形で、壁面の立ち上がりは急で深さもあり、地山をしっかりと掘り込んでいる。墓壇底面は傾斜に合わせたかのように北側へ向けて標高を下げ、南北の底面の標高差は44cmにも及ぶ。墓壇断面の観察から棺の痕跡は認められず、第10～12層は床面の整地層とみられ、床面が水平になるよう盛ったと考えられる。その地山と整地層の境界付近に10cm大の地山に含まれる角礫と土器片、そのさらに北側60、85cm離れて土器片と弥生中期の広口壺口縁部(1)が検出された。北側の2点については整地床面の出土と考えられる。角礫については、特に上層からの落ち込みも観察されず、位置的に石枕的な役割を果たしたとも考えられる。(1)

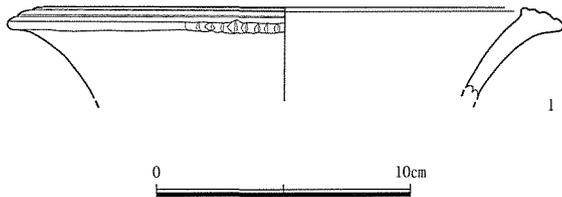


- 1. 根痕
- 2. 黒褐色粘質土
- 3. 黒褐色粘質土 (2より暗)
- 4. にぶい橙色粘質土 (5より明。3cm大の地山ブロックを若干含む。)
- 5. にぶい褐色粘質土 (0.5~1.5cm大の地山ブロックを含む。)
- 6. 灰褐色粘質土 (黒褐色かかる。)
- 7. にぶい褐色粘質土 (5より暗で黒褐色かかる。黄褐色かかる。)
- 8. 黒褐色粘質土 (2より明。にぶい褐色土を含む。1cm大の地山ブロックを含む。)
- 9. 褐色粘質土 (0.5~2.5cm大の地山ブロックを若干含む。)
- 10. 灰褐色粘質土 (0.5~2cm大の地山ブロックを含む。しまる。)
- 11. 灰褐色粘質土 (9より暗。灰色かかる。)
- 12. 褐色粘質土 (9よりやや暗。)
- 13. 灰褐色粘質土 (根痕。)

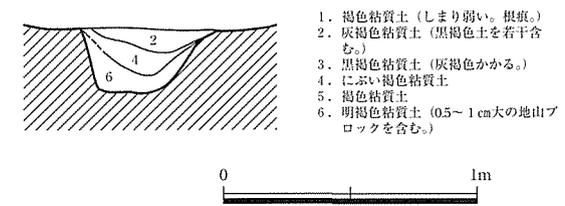
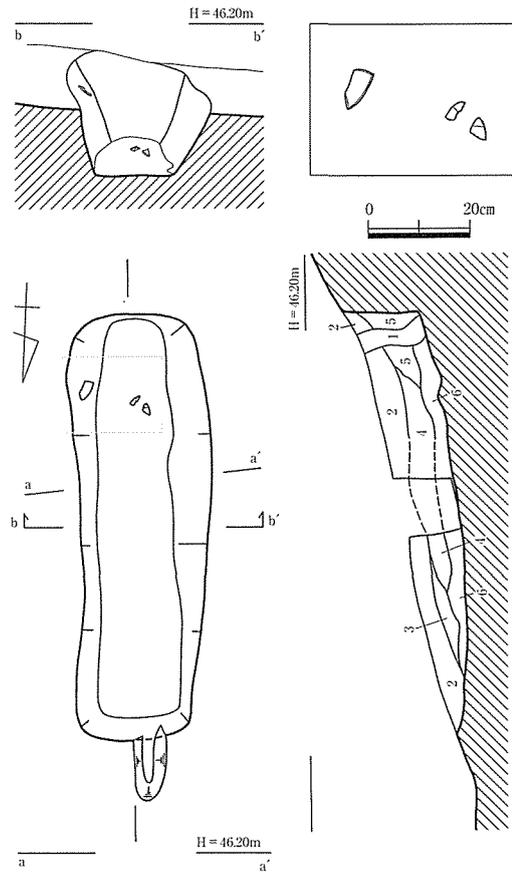
第32図 下味野古墳群 SX-01実測図 (S = 1 : 30)



第33図 下味野古墳群 SX-01出土遺物実測図
(S = 1 : 3)



第35図 下味野古墳群 SX-02出土遺物実測図
(S = 1 : 3)



1. 褐色粘質土 (しまり弱い。根痕。)
2. 灰褐色粘質土 (黒褐色土を若干含む。)
3. 黒褐色粘質土 (灰褐色かかる。)
4. にぶい褐色粘質土
5. 褐色粘質土
6. 明褐色粘質土 (0.5~1cm大の地山ブロックを含む。)

第34図 下味野古墳群 SX-02実測図 (S = 1 : 30)

は風化剥落がすすみ調整が不明であるが、口縁部は大きく開いてやや反り返り、平坦な口縁端面をもつ広口壺である。

SX-02(第5・34・35図、図版2・3・11)

SX-02は、調査区中央部北端に位置する。東北東へ延びる尾根筋から北西へ下る斜面、標高4.58~46.06mに立地する。位置的には49号墳の北西墳裾部にあたり、西隣にほぼ並列するSX-01とともに当初は49号墳に帰属する埋葬施設と思われた。墓壙平面は隅丸長方形で、主軸は斜面の傾斜に対し並行方向のN-3°-Wをとる。規模はSX-01に比較してかなり小さく、現況で1.70m、幅55cm、深さ48cmを測る。地山を掘り込んでおり、墓壙北側については少なからず流失しているとみられる。横断面は逆台形状である。墓壙底面はSX-01同様北側へ向けて標高を下げ、底面の標高差は16cmを測る。墓壙断面の観察から棺の痕跡、床面の整地層は認められなかった。遺物は南側で最下層出土の土器細片を含め土器片3点が検出され、そのほかに埋土中から壺口縁部片(1)が出土している。(1)は口縁部は逆ハ字状に外反し、口縁端面は肥厚して端面に2条の凹線、外縁部に刻み目が施される。

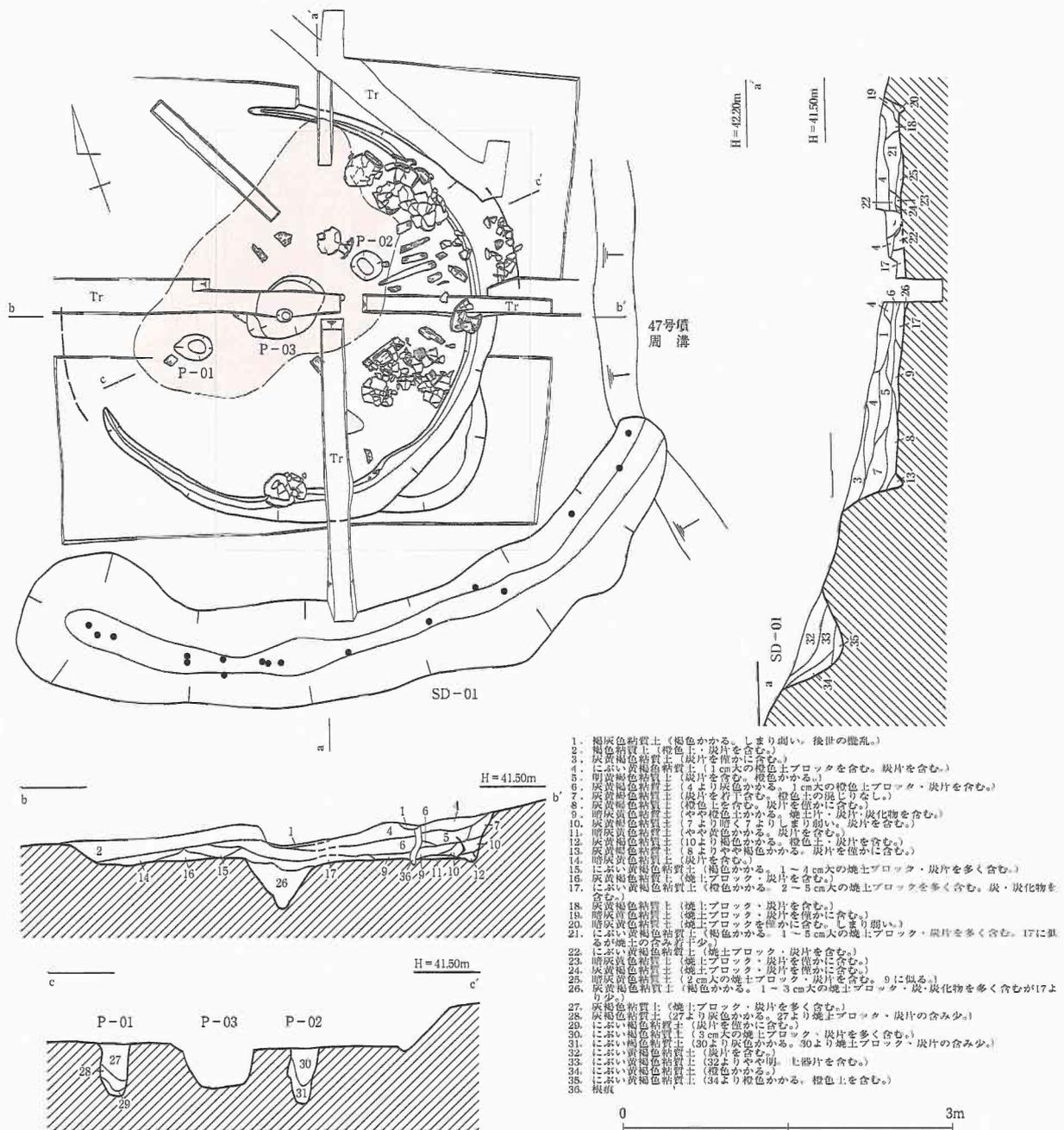
第3節 下味野童子山遺跡の調査

1. A区の調査

(1) 竪穴住居

SI-01(第3・5・6・36~40図、図版2・3・11・17・18)

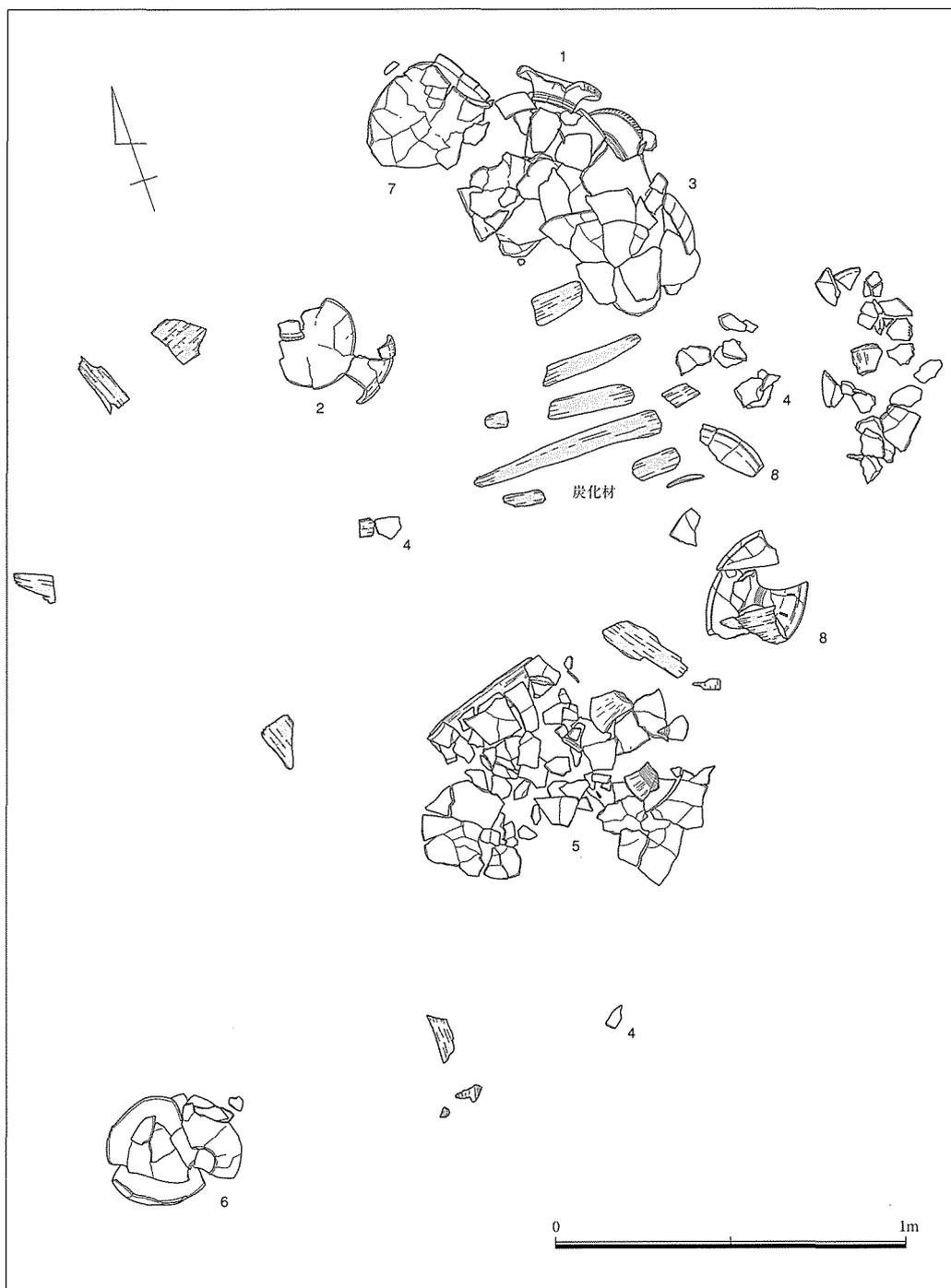
A調査区北東側に位置し、東北東へ延びる尾根筋から北へ下る斜面の鞍部手前、稜線上よりやや西側の標高40.37~41.40mに立地する。東には47号墳が、鞍部を越えた北側には46号墳が築造される。また、南側の急斜面との傾斜変換部にSD-01がSI-01に沿って弧状に配置することから外周溝と考えられる。住居の中央は後世の根掘りとみられる径2mの円形の攪乱穴があり、その周辺部で焼土が観察されたが斜面高位からの流土の堆積等から、トレンチや一部グリッドの掘り下げによって検出を行った。北西壁面は流失する。平面円形で、規模は径4.2m、深さ58cmを測る。床面はほぼ平坦で標高40.8m前後を測る。深さ5cm程度の壁溝が巡り、支柱穴は斜面に直交方向の東西2本で、柱間は1.70mである。ま



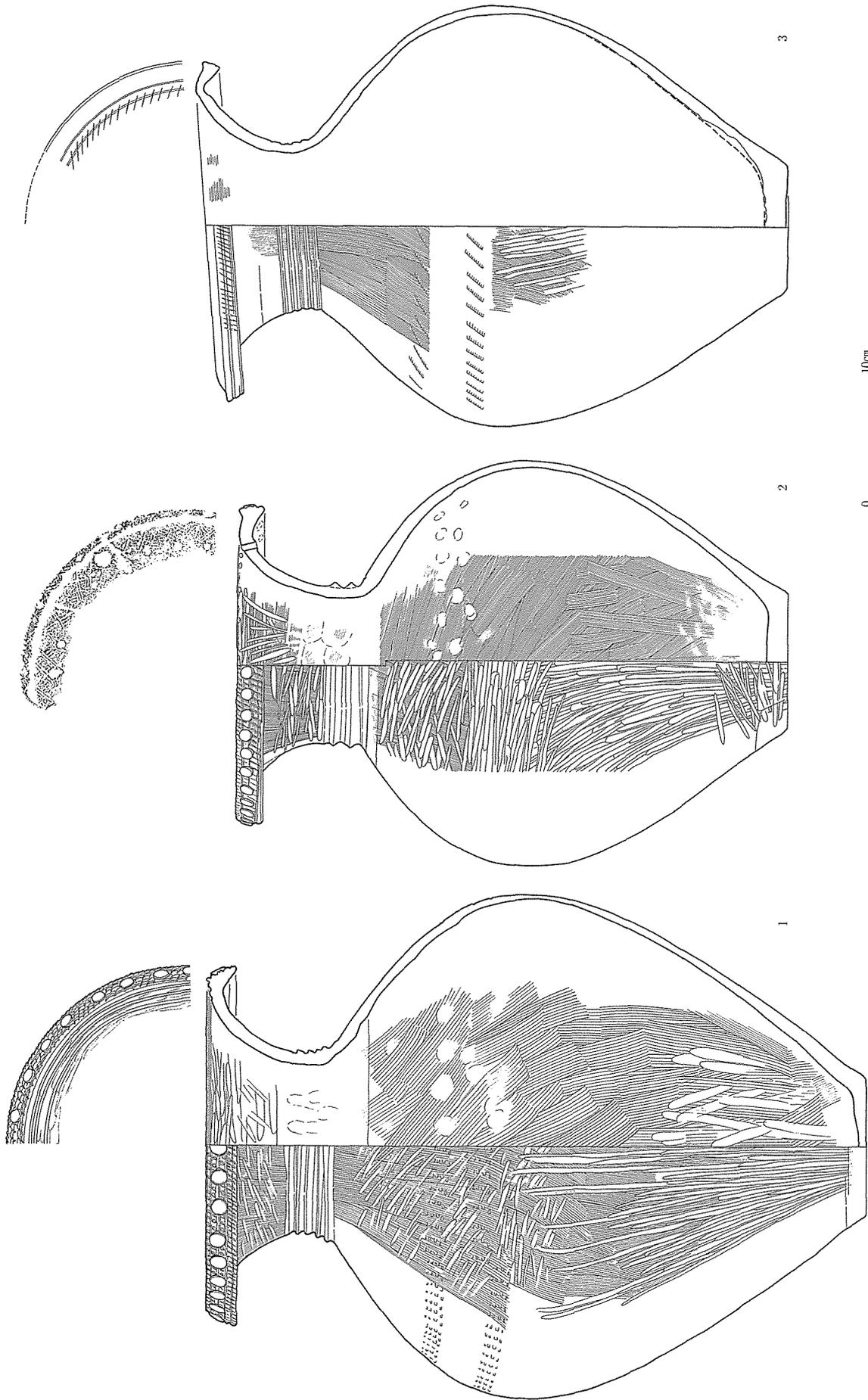
第36図 下味野童子山遺跡A区 SI-01実測図(S=1:60)

た、支柱穴中央に平面楕円形の中央ピットがあり、土層断面には柱の痕跡は認められず埋土は焼土ブロックや炭片を多く含む灰黄褐色粘質土であった。掘り下げ当初から、焼土および炭片の出土が目立ち、支柱穴間周辺および北側壁面一帯にかけて厚い焼土に覆われ、P-02東側付近の床面で東西に軸をもつ炭化材が複数検出された。さらに、住居の約束側半分で壁面に沿うような位置に土圧で潰れたような土器8個体分が床面から出土した。状況から焼失住居で、土器はある程度原位置を反映していると考えられる。石製品はみられなかった。

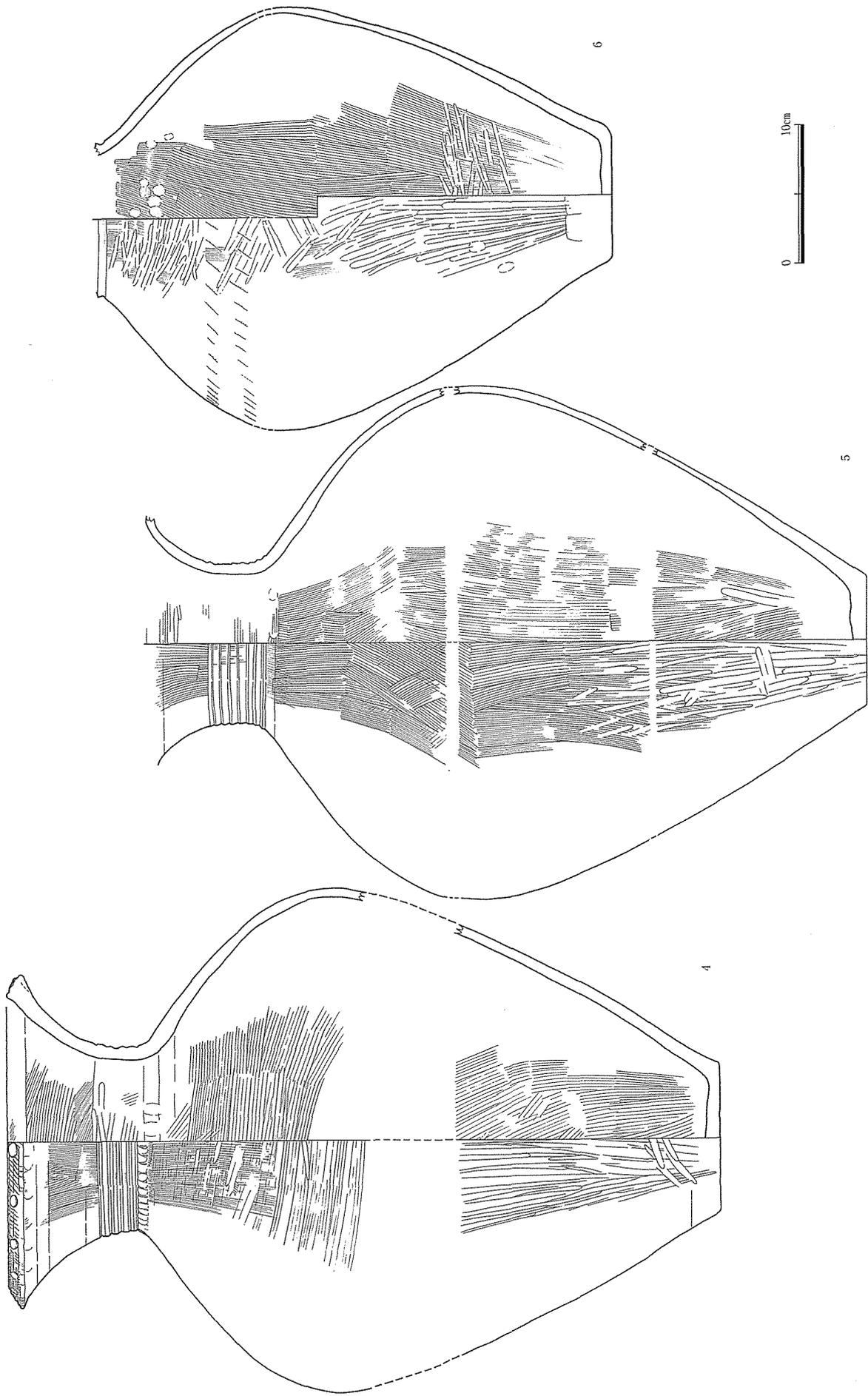
土器は壺類が多く、広口壺6点と甕1点、高杯1点である。壺(1)~(6)は口縁部の形状が不明な(5)(6)を除き、口縁部は大きく開いて下垂する(1)(2)(3)と、口縁部は開いて肥厚し端面をもつ(4)とがある。いずれの壺もしっかりした平底から大きく張る肩部へ続き、頸部ですぼまって屈曲部上位に複数の凹線および



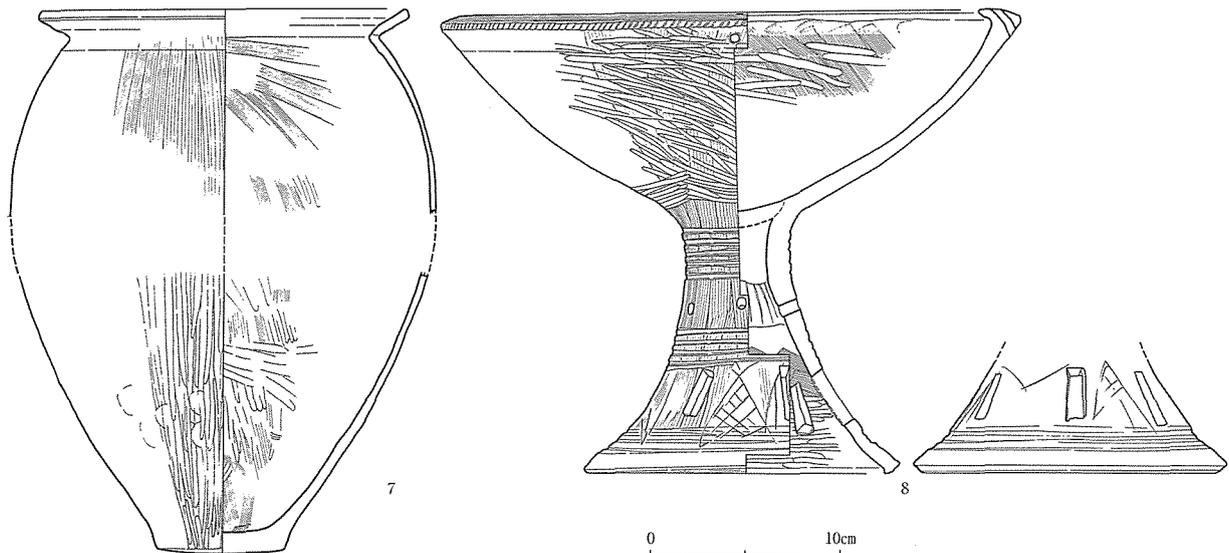
第37図 下味野童子山遺跡A区 SI-01遺物出土状況実測図(S = 1 : 20)



第38图 下味野童子山遺跡A区 S1-01出土遺物実測図(1)(S=1:4)



第39图 下味野童子山遺跡A区 S1-01出土遺物実測図(2)(S=1:4)



第40図 下味野童子山遺跡A区 SI-01出土遺物実測図(3)(S=1:4)

貼付突帯文が巡る。(4)のみ屈曲部に1条の刻目突帯を施す。口縁部は端面に凹線、刻み目、円形浮文で装飾され、(3)は浮文を省略する。(2)は口縁部上面も斜格子文、円形浮文で飾る。(1)(3)(6)は肩部外面に2段の連続刺突文を施す。調整は内外ハケ目調整、のち外面は体部下半ヘラ磨きを行い肩部にも施すものがみられる。甕(7)は器壁薄く脆弱な遺存状態で体部中央が接合できなかったが、口縁部はくの字状で、端部はあまり肥厚することなく端面をもち凹線は施されない。高杯(8)は杯底部から口縁部へなだらかに立ち上がる鉢形の杯部で、口縁部は内面側へ肥厚して端面をもち外縁に刻み目を施す。端面に凹線は施されない。脚部は周回するヘラ描沈線、円孔6、長方形透かし孔6がみられ、一部に鋸歯文が線刻される。円盤充填による接合で、ハケ目調整のち杯部と脚裾部にヘラ磨きを行う。

(2) 土坑

SK-01(第5・41図、図版2・12)

A調査区中央部東寄りに位置し、東北東へ延びる尾根先端頂部から東へ下る斜面、標高43.64~43.91mに立地する。51号墳の西側墳丘斜面に重複する。平面は不整円形で、規模は長径90cm、短径79cm、深さ18cmを測る。断面は椀状で、埋土は2層でにぶい黄褐色粘質土である。遺物は出土していない。

SK-02(第5・42図、図版2・12)

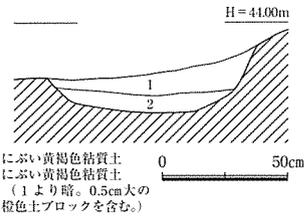
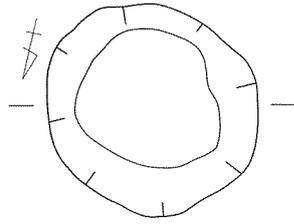
A調査区中央部東寄りに位置し、東北東へ延びる尾根先端頂部からやや東北東へ下った斜面、標高41.15~43.10mに立地する。平面は不整円形で、規模は長径81cm、短径71cm、深さ14cmを測る。断面は椀状で、埋土はにぶい黄褐色粘質土1層である。遺物は出土していない。

SK-03(第5・43図、図版2・12)

A調査区中央部東寄りに位置し、東北東へ延びる尾根先端頂部から北東へ下った斜面、標高43.37~43.68mに立地する平面は不整円形とみられ、規模は遺存長径90cm、短径73cm、深さ18cmを測る。断面は椀状で、埋土はにぶい黄褐色粘質土1層である。遺物は出土していない。

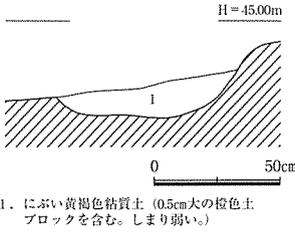
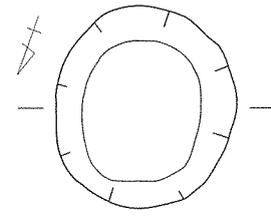
SK-04(第5・44図、図版2・12)

A調査区中央部東寄りに位置し、東北東へ延びる尾根先端頂部からやや北側へ下った斜面、標高



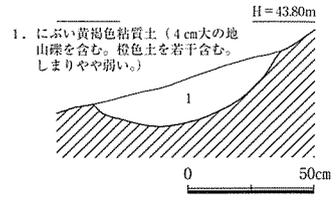
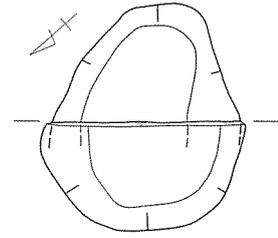
1. にぶい黄褐色粘質土
2. にぶい黄褐色粘質土
(1より暗。0.5cm大の
棕色土ブロックを含む。)

第41図 下味野童子山遺跡A区
SK-01実測図 (S = 1 : 30)



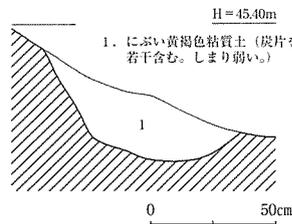
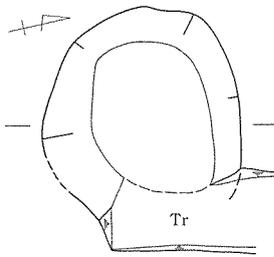
1. にぶい黄褐色粘質土 (0.5cm大の棕色土
ブロックを含む。しまり弱い。)

第42図 下味野童子山遺跡A区
SK-02実測図 (S = 1 : 30)



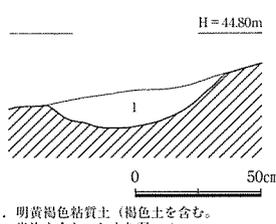
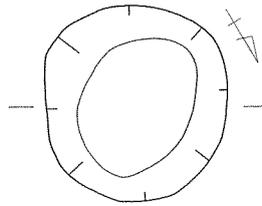
1. にぶい黄褐色粘質土 (4cm大の地
山礫を含む。棕色土を若干含む。
しまりやや弱い。)

第43図 下味野童子山遺跡A区
SK-03実測図 (S = 1 : 30)



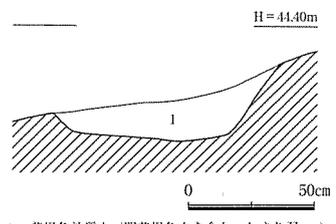
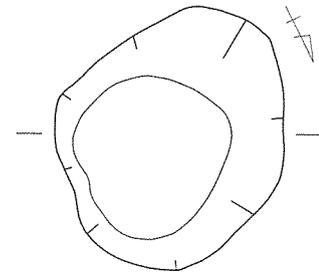
1. にぶい黄褐色粘質土 (炭片を
若干含む。しまり弱い。)

第44図 下味野童子山遺跡A区
SK-04実測図 (S = 1 : 30)



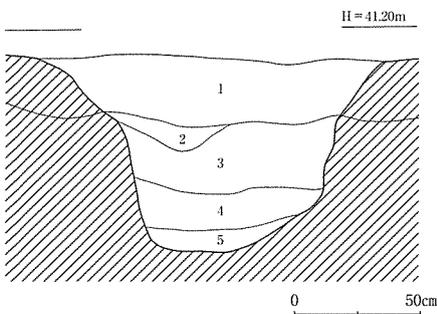
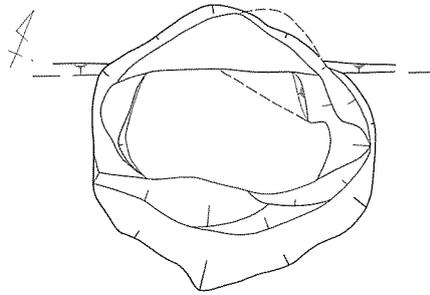
1. 明黄褐色粘質土 (棕色土を含む。
炭片を含む。しまり弱い。)

第45図 下味野童子山遺跡A区
SK-05実測図 (S = 1 : 30)



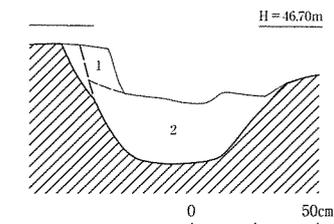
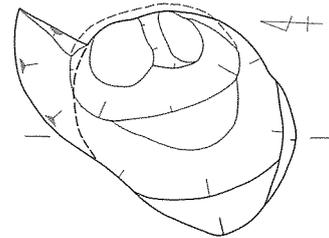
1. 黄褐色粘質土 (明黄褐色土を含む。しまり弱い。)

第46図 下味野童子山遺跡A区
SK-06実測図 (S = 1 : 30)



1. にぶい褐色粘質土
(しまり弱い。0.5~
1.5cm大の地山礫を含
む。)
2. にぶい褐色粘質土
(0.3cm大の棕色地山
礫を含む。)
3. にぶい赤褐色粘質土
(シルト質。0.1~0.5
cm大の砂礫を含む。
5cm大の崩れた紫灰
色地山ブロック有。)
4. にぶい赤褐色粘質土
(シルト質。3より
暗。炭片を含む。1
cm大の灰色粘土ブロ
ックを含む。)
5. にぶい褐色粘質土
(しまり弱い。灰色
土を含む。)

第47図 下味野童子山遺跡A区
SK-07実測図 (S = 1 : 30)



1. 黒褐色粘質土 (土器片を含む。)
2. 褐色粘質土 (炭片を含む。)

第48図 下味野童子山遺跡A区
SK-08実測図 (S = 1 : 30)

44.85～45.30mに立地する。東側をトレンチで掘削されるが平面は不整円形とみられ、規模は遺存長径89cm、短径79cm、深さ25cmを測る。断面は椀状で、埋土はにぶい黄褐色粘質土1層である。遺物は出土していない。

SK-05(第5・45図、図版2・12)

A調査区中央部やや東寄りに位置し、東北東へ延びる尾根先端頂部から南東へ下った緩斜面、標高44.43～44.64mに立地する。平面は不整円形で、規模は長径79cm、短径78cm、深さ14cmを測る。断面は椀状で、埋土は明黄褐色粘質土1層である。遺物は出土していない。

SK-06(第5・46図、図版2・12)

A調査区中央部やや東寄りに位置し、東北東へ延びる尾根先端頂部から南東へ下った緩斜面、標高39.40～44.25mに立地する。4m斜面高位にSK-05が配置する。平面は不整円形で、規模は長径1.07m、短径90cm、深さ18cmを測る。断面は不整な椀状で、埋土は黄褐色粘質土1層である。遺物は出土していない。

SK-07(第5・47図、図版2・12)

A調査区南西端に位置し、東北東へ延びる尾根筋から急傾斜で南へ下り、やや緩い傾斜となった標高40.31～41.10mに立地する。平面は不整円形で、規模は長径1.14m、短径1.12cm、深さ78cmを測る。断面は不整なU字状で、地山を深く掘り込み、底面は隅丸長方形状となる。埋土は5層に分かれる。遺物は出土していない。

SK-08(第5・48図、図版2・12)

A調査区中央部やや北寄りに位置し、東北東へ延びる尾根筋上、標高41.15～46.63mに立地する。49号墳の墳丘下、地山面で検出した。平面は不整楕円形で、主軸はN-62°-Eをとる。規模は長径97cm、短径77cm、深さ46cmを測る。断面は椀状で、埋土は2層が確認され、上層は黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

(3) その他の遺構と遺物

SD-01(第5・36図、図版2)

A調査区北東側に位置し、東北東へ延びる尾根から北へ下る急斜面と緩斜面の傾斜変換部、標高41.42～42.00mに立地する。傾斜に対し直交して地山を掘り込み、平面弧状となる。北側に配置する円形竪穴住居SI-01から80cm程度外周にあたる。西側は完結し東側は47号墳に掘削される。規模は遺存長6.8m、幅1.3m、深さ40cmを測る。断面は椀状で、埋土は4層に分かれる。埋土からSI-01と同時期の土器片などが出土している。

SD-02(第5・49・50図、図版2・13)

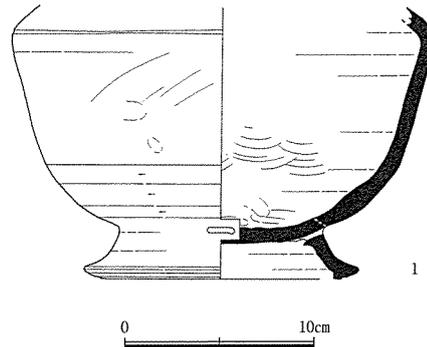
A調査区南西端に位置し、東北東へ延びる尾根筋から急傾斜で南へ下り、やや緩い傾斜となる南東斜面、標高40.38～41.87mに立地する。途中、中央で西に屈曲し、高位側でN-45°-Wを振るが低位側でN-69°-Wをとる。斜面の傾斜にほぼ並行な軸である。遺存長8.4m、幅1.2mを測り、深さは断面図で22～33cmであるが、円形の落ち込みなどもあり全体的に所により異なる。横断面は皿あるいは緩やかなV字状である。自然地形とも考えられる。埋土中から角礫や須恵器台付壺(1)が出土している。

溝状石列遺構(第5・51図、図版2・13)

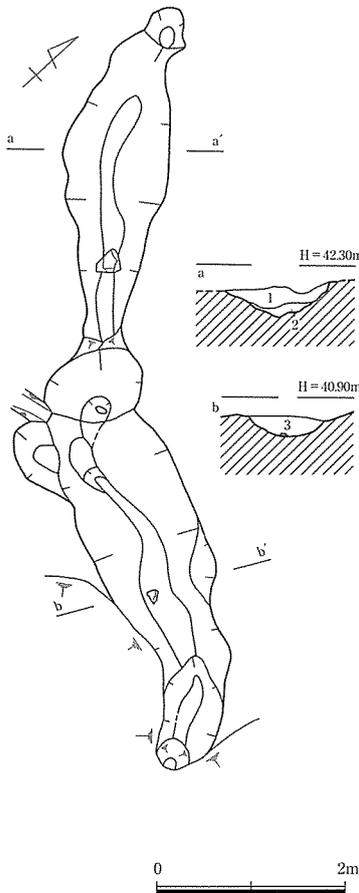
A調査区中央部東端に位置し、東北東へ延びる尾根稜線から南東へ下る緩斜面、標高43.20~43.55mに立地する。表土除去時から露出しており、上層は炭を多量に含む黒褐色土で覆われていた。角礫は長さ30cm、幅15cm、厚さ13cm程度の自然石を長軸方向に用い、幅30cm程度の間隔をおき二重の平面L字形に配置する。主軸はN-18°-Eを振る。石列は各一石をほぼ水平・直線的に並べており、北でほぼ直角に角をとり東側へ折れる。出土遺物は見られなかった。

A区遺構外出土遺物(第52・53図、図版18)

A調査区で出土した遺構外の遺物として(1)~(6)を図化した。これらはいずれもSI-01の周辺部で出土したものである。甕(1)は口縁部端面に凹線のち円形浮文の剥離痕を観察する。高杯(2)は口縁部に4条の凹線がめぐる。磨石(3)は、自然石の長軸方向に擦痕、一端面に敲打痕が観察される。加工用の石斧(4)~(6)はそれぞれ刃部に使用痕が観察される。(4)(5)は粘板岩製、(6)は硬質砂岩製で、(6)は砥石の可能性をもつ。

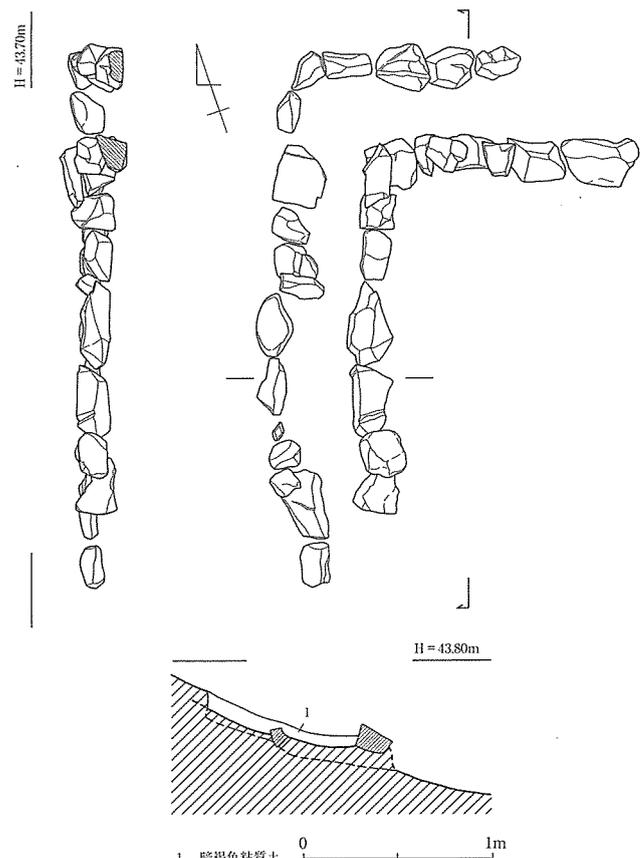


第50図 下味野童子山遺跡A区
SD-02出土遺物実測図(S=1:4)

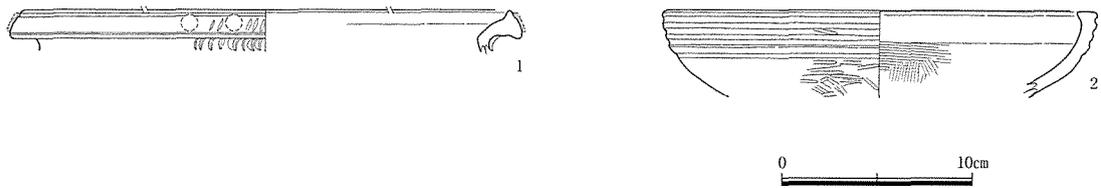


1. にふい褐色粘砂質土(0.3~3cm大の地山ブロックを含む。)
2. にふい褐色粘砂質土
3. にふい褐色粘砂質土(1よりやや暗。0.3~1.5cm大の地山ブロック及び板状石片を含む。)

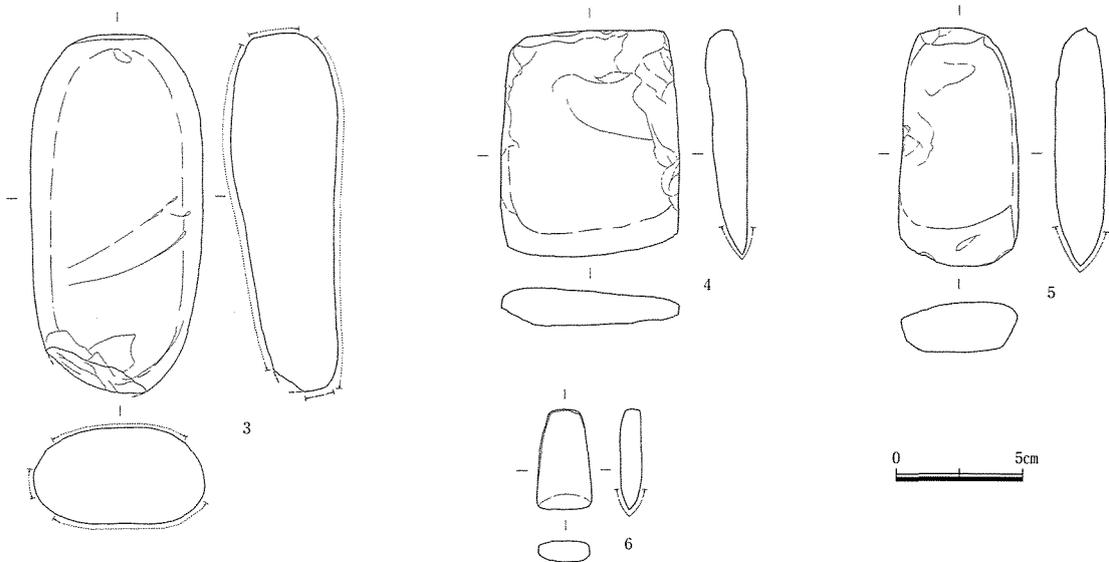
第49図 下味野童子山遺跡A区
SD-02実測図(S=1:80)



第51図 下味野童子山遺跡A区
溝状石列遺構実測図(S=1:40)



第52図 下味野童子山遺跡A区 遺構外出土遺物実測図(1)(S=1:4)



第53図 下味野童子山遺跡A区 遺構外出土遺物実測図(2)(S=1:3)

2. B区の調査

(1) 竪穴住居

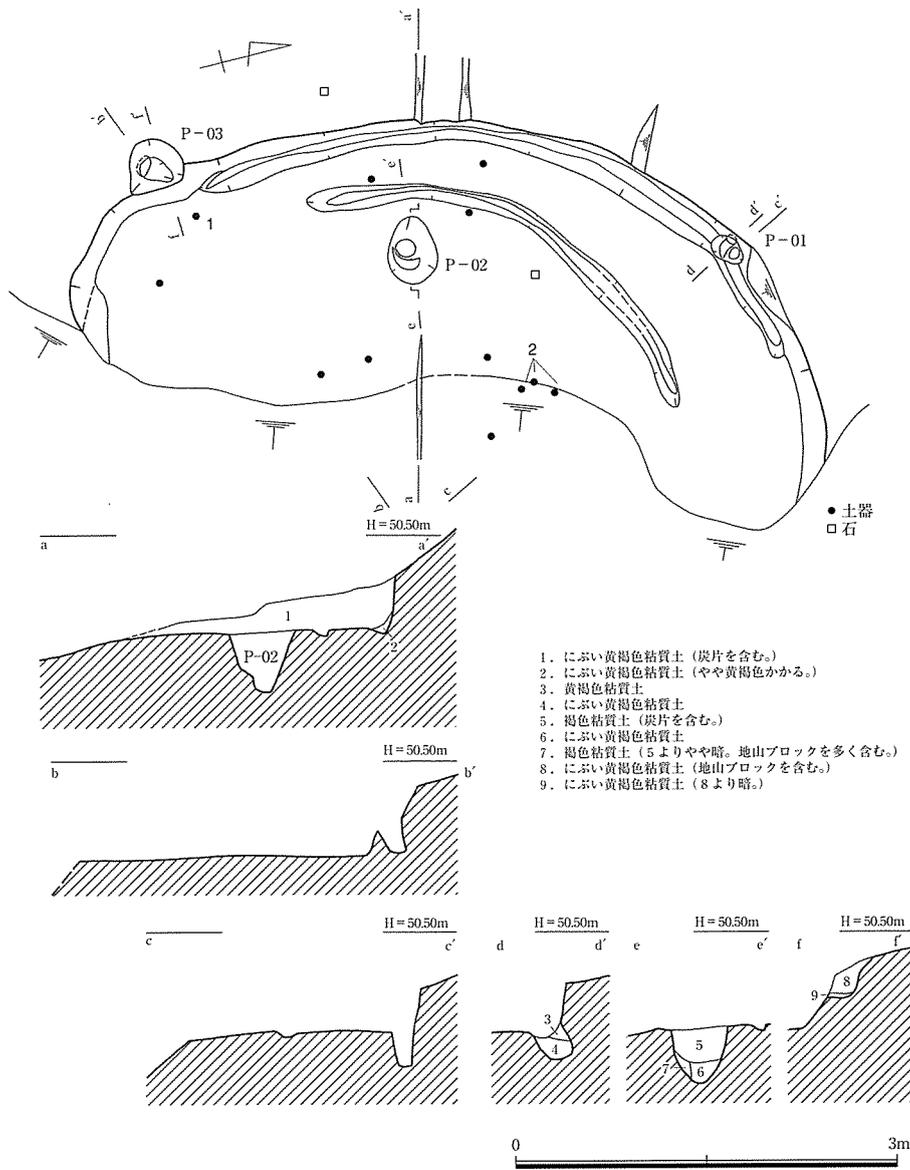
SI-02(第3・4・8・54・55図、図版2・13・18・19)

B調査区中央やや南東寄りに位置し、東南東へ伸びる尾根筋、標高49.23~50.18mに立地する。尾根は現状で崩れが著しく、本来住居は尾根頂部先端からやや東へ下った南東斜面とみられる。平野部への視界は良好で水田部との比高差は35.5mである。北側の北東斜面に段状遺構3が近接する。東の斜面低位側が流失し、全体では約5分の2程度の遺存であるが、平面円形で、径6m弱が復元される。現況で南北6.13mを測り、東西2.14m、壁高43cmが遺存する。建替えがあったとみられ、深さ5cm程度の壁溝の側40cmにさらに径が一回り小さい深さ5cm弱の弧状の溝が検出された。床面はほぼ平坦で、標高49.75m前後を測る。主柱穴は壁面から1.3mほど内側にP-02が検出され、その他は不明である。また、壁溝内でP-01、壁面際にP-03が検出されている。遺物は床面から若干浮いた状態で出土しており、このうち(1)~(5)を図化した。

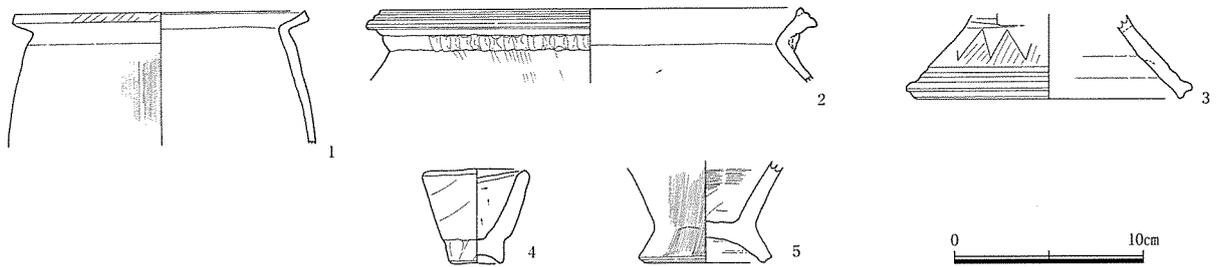
甕(1)はく字状口縁で、端部は肥厚して面をもち刻み目を施す。甕(2)は頸部に刻目貼付突帯が巡り、肥厚する口縁端面に2条の凹線を施す。脚部(3)は透かし孔痕と裾部に鋸歯文を施す。(4)は小型の手握ね杯、(5)はハ字形に開く脚台部である。

SI-03(第3・4・8・56図、図版2・13)

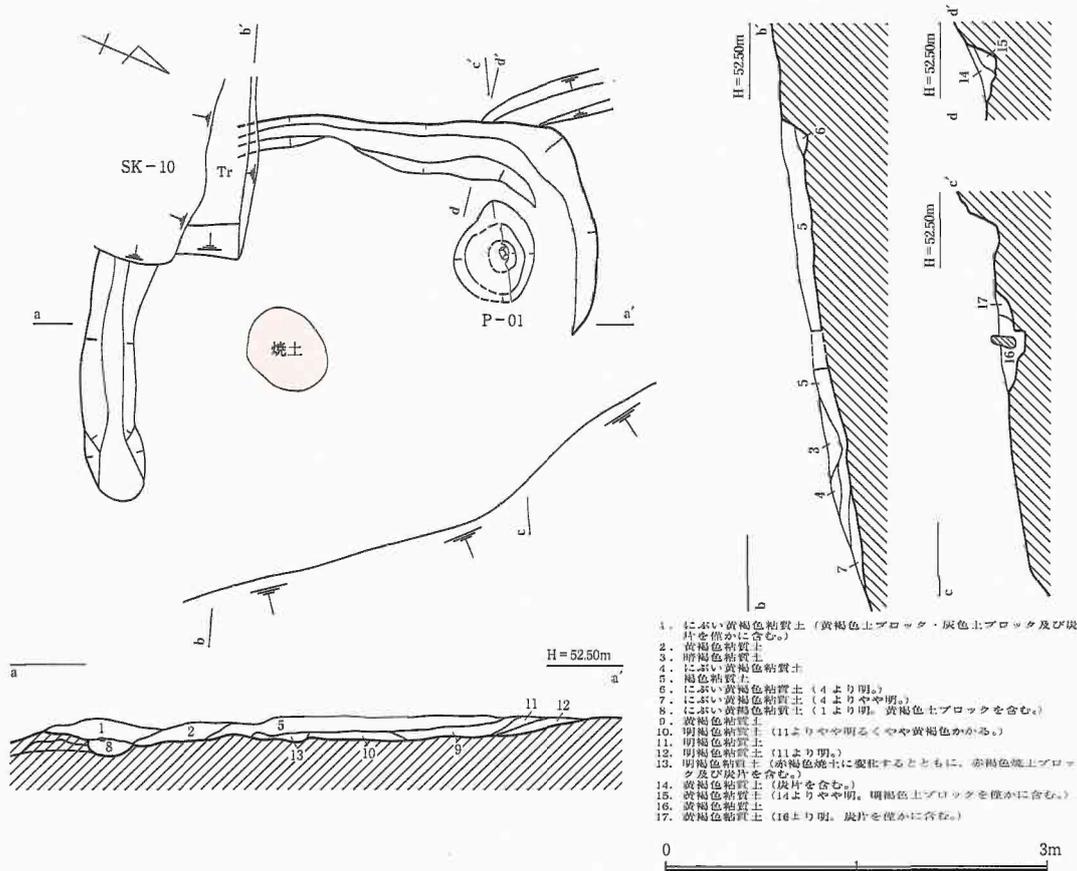
B調査区中央やや南東寄りに位置し、東南東へ伸びる尾根筋からやや北東へ下った斜面、標高51.84~52.26mに立地する。尾根は現状で崩れが著しく、住居も北東斜面低位側が流失し、SK-10が南西壁部で重複するなど全体では約2分の1弱の遺存である。平野部への視界は良好で水田部との比高差は37.5mである。北西側の北東斜面に段状遺構2が、北東斜面下位には段状遺構3が近接する。平面は隅丸方形とみられ、現況で南北3.96m、東西3.08m、壁高36cmが遺存する。南西壁面際にはやや幅広の深



第54図 下味野童子山遺跡B区 SI-02実測図 (S = 1 : 60)



第55図 下味野童子山遺跡B区 SI-02出土遺物実測図 (S = 1 : 4)



第56図 下味野童子山遺跡B区 SI-03実測図 (S = 1 : 60)

さ8 cm程度の壁溝が遺存する。床面はほぼ平坦で、標高51.90m前後を測る。北東角際付近で深さ21cmのピットを検出し、中央に自然石が立って出土した。また、焼土が住居中央やや南東寄りで見出されている。遺物は弥生土器細片が壁溝埋土から数点出土している。

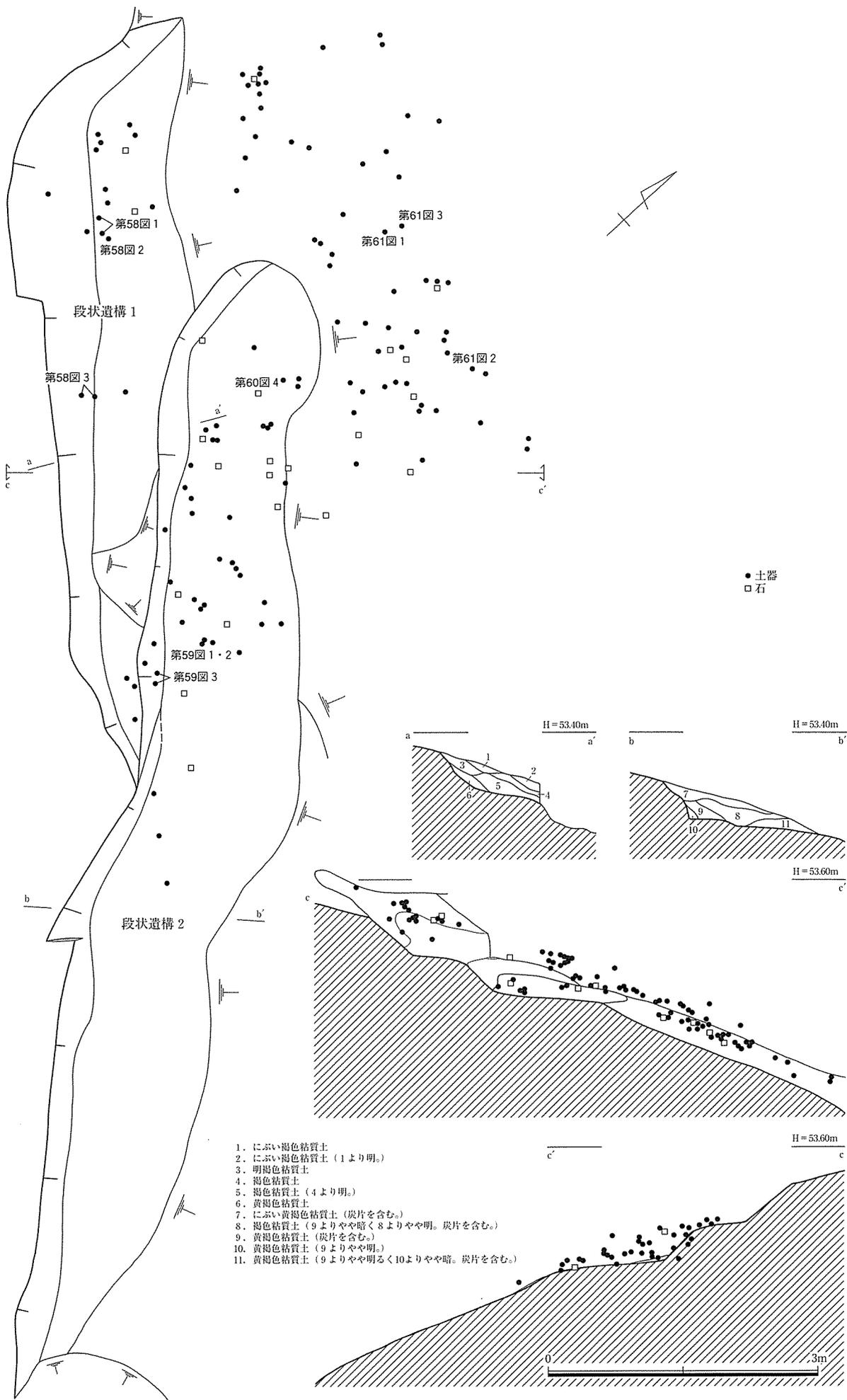
(2) 段状遺構

段状遺構1 (第3・4・8・57・58図、図版2・13・14・19)

B調査区北西寄りに位置し、東南東へ延びる尾根筋からやや北東へ下った斜面、標高52.61~53.18mに立地する。斜面の傾斜に対し直交するように緩やかなコ字状に掘り込みを行い、規模は南東に重複する段状遺構2で不明となる。掘り込み高は57cmが確認され、平坦面の遺存規模は長さ3m弱、幅40cm程度である。遺物は底面から浮いた状態で多数出土しており、このうち(1)~(3)を図化した。壺(1)は大きく下垂し4条の凹線を施す口縁部をもつ。甕(2)は口縁端部が肥厚して無文の端面をもつ。底部(3)は平底で調整は剥落不明である。

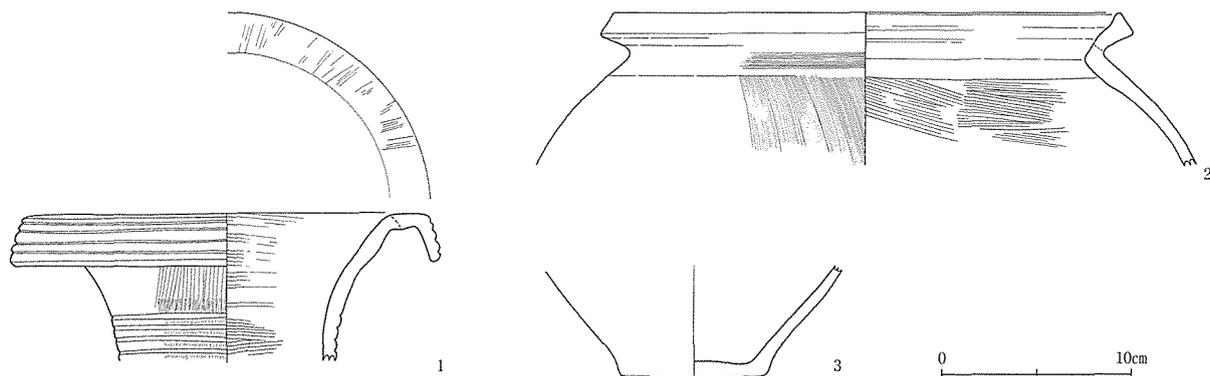
段状遺構2 (第3・4・8・57・59・60図、図版2・13・14・19)

B調査区北西寄りに位置し、東南東へ延びる尾根筋からやや北東へ下った斜面、標高52.26~52.86mに立地する。北西で段状遺構1、南東でSI-03と重複する。斜面の傾斜に対し直交するように緩やかなコ字状に掘り込みを行い、掘り込み高は60cmが確認される。平坦面の遺存規模は長さ4.6m弱、幅55cm程度である。遺物は底面から浮いた状態で多数出土している。北側に遺物が集中する傾向があり、中位で壁面の屈曲がみられることから遺構の重複の可能性も考えられる。遺物は壺(1)、甕(2)、高杯(3)、石庖丁(4)を図化した。(1)は広口の口縁で端部は上下に肥厚して下垂面に3条の凹線と刻み目、円形浮文を施

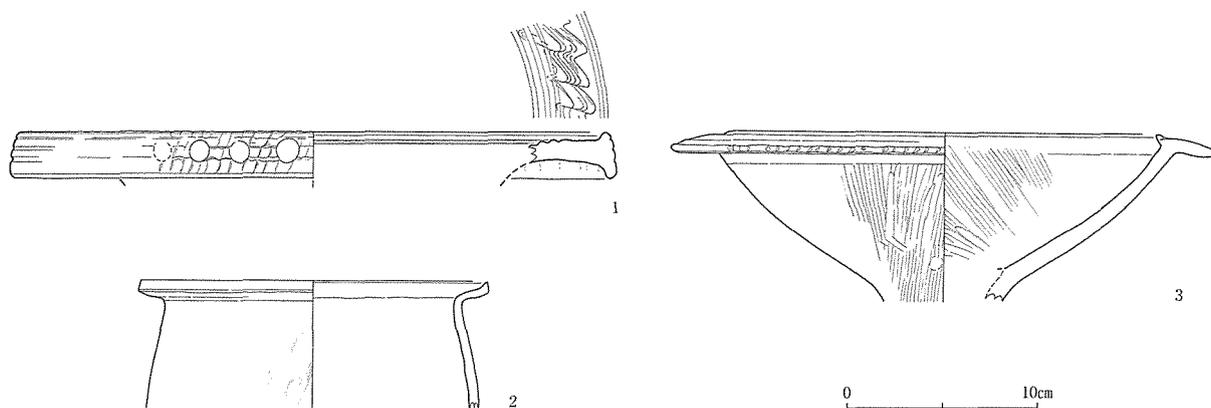


1. にぶい褐色粘質土
2. にぶい褐色粘質土 (1より明)
3. 明褐色粘質土
4. 褐色粘質土
5. 褐色粘質土 (4より明)
6. 黄褐色粘質土
7. にぶい黄褐色粘質土 (炭片を含む)
8. 褐色粘質土 (9よりやや暗く8よりやや明。炭片を含む)
9. 黄褐色粘質土 (炭片を含む)
10. 黄褐色粘質土 (9よりやや明)
11. 黄褐色粘質土 (9よりやや明るく10よりやや暗。炭片を含む)

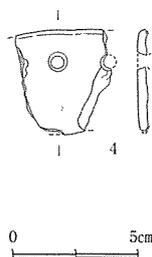
第57図 下味野童子山遺跡B区 段状遺構1・2実測図(S=1:60)



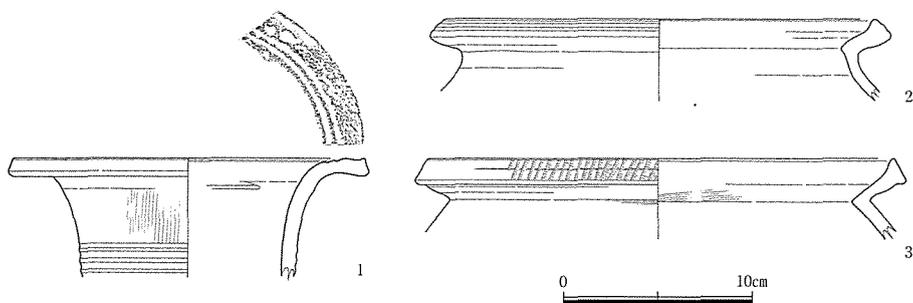
第58図 下味野童子山遺跡B区 段状遺構1出土遺物実測図(S=1:4)



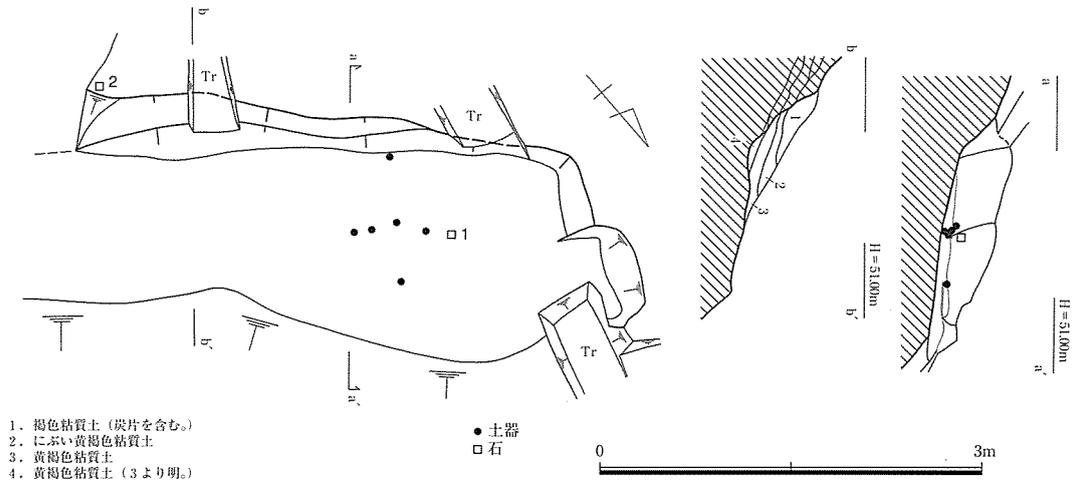
第59図 下味野童子山遺跡B区 段状遺構2出土遺物実測図(1)(S=1:4)



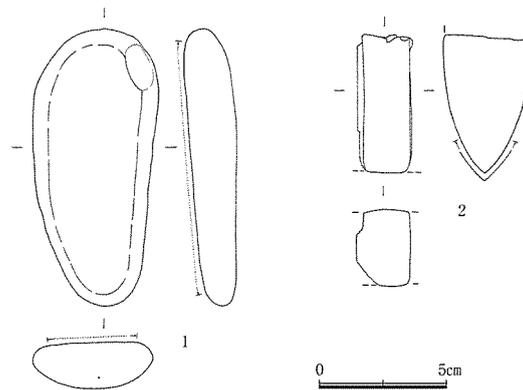
第60図 下味野童子山遺跡B区 段状遺構2出土遺物実測図(2)(S=1:3)



第61図 下味野童子山遺跡B区 段状遺構1・2北側出土遺物実測図(S=1:4)



第62図 下味野童子山遺跡B区 段状遺構3 実測図(S = 1 : 60)



第63図 下味野童子山遺跡B区 段状遺構3 出土遺物実測図(S = 1 : 3)

す。(2)は口縁端部は肥厚して端面をもつが凹線はみられない。(3)はやや外傾する水平口縁をもつ。上面はヨコナデで端部に刻み目を施す。(4)は紐孔部分の石庖丁片で風化著しい。また、段状遺構1、2の北東斜面低位で弥生土器が多数出土しており、段状遺構1、2の遺物と考えられる。土層断面から、段状遺構2が段状遺構1に先行する可能性をもつ。

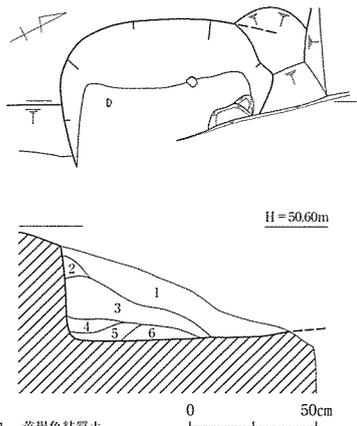
段状遺構3 (第3・4・8・62・63図、図版2・14・19)

B調査区中央部やや北東寄りに位置し、東南東へ延びる尾根筋からやや北東へ下った斜面、標高50.06~50.64mに立地する。南西斜面高位にSI-03、南東にSI-02が近接する。斜面の傾斜に対しほぼ直交するようにコ字状に掘り込みを行い、掘り込み高は58cmが確認される。平坦面の遺存規模は長さ3.8m、幅1.5m程度である。遺物は底面から浮いた状態で出土しており、(1)は磨石、埋土から石斧(2)の他に円形浮文をもつ壺片や内面へラ削りのみられる胴部片などもみられる。

(3) 土坑

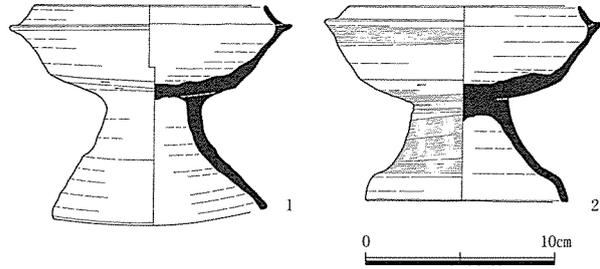
SK-09(第4・64図、図版2・14)

B調査区の南東に位置し、南東へ延びる尾根稜線から東へ下る斜面、標高50.14~50.52mに立地する。東側で段状遺構3との重複およびトレンチの掘削、北側の流失などで形状不明となる。平面は隅丸方形あるいは長方形が想定され、現況で主軸はN-24°-Eをとる。規模は長さ84cm、幅55cmが遺存、深さ38cmを測る。断面は逆台形が想定され、壁面は急な立ち上がりである。埋土は6層に分かれてシルト質である。遺物はわずかに土器細片が出土している。

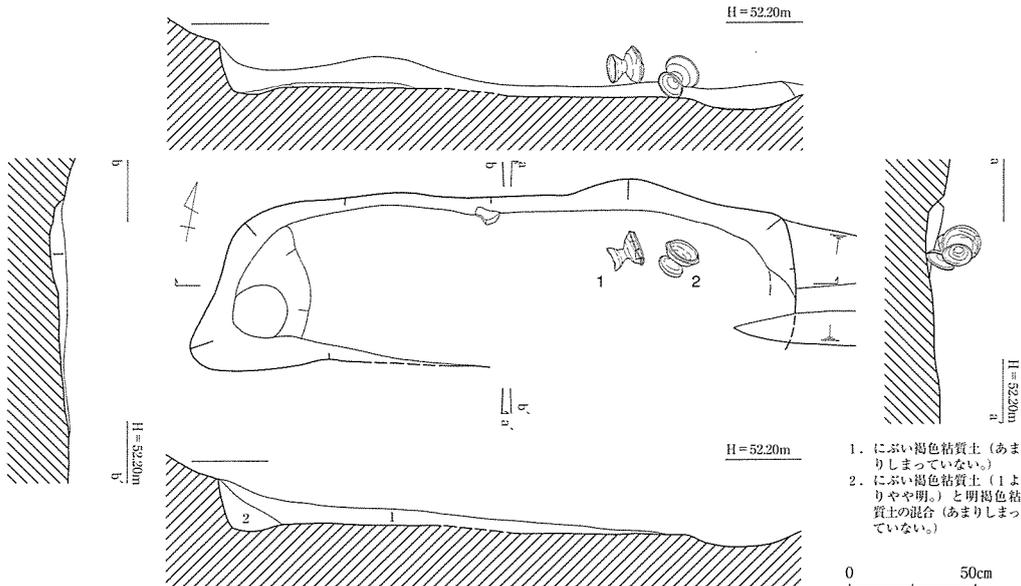


1. 黄褐色粘質土
2. 黄褐色粘質土 (1より明)
3. にぶい黄褐色粘質土 (炭片を含む)
4. にぶい黄褐色粘質土 (3よりやや明。炭片を含む)
5. にぶい黄褐色粘質土 (3・4より暗。炭片及び地山アロクを僅かに含む)
6. にぶい黄褐色粘質土 (5より明るく3・4よりやや暗。炭片を含む)

第64図 下味野童子山遺跡B区
SK-09実測図 (S = 1 : 30)



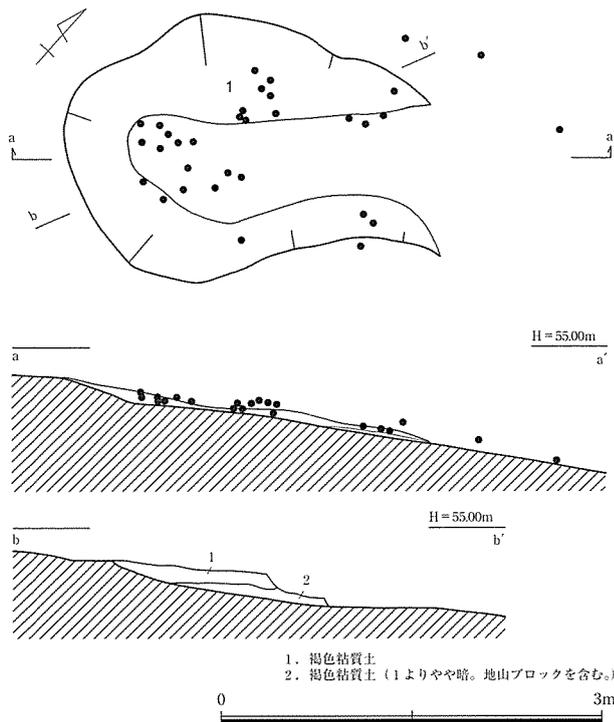
第66図 下味野童子山遺跡B区
SK-10出土遺物実測図 (S = 1 : 4)



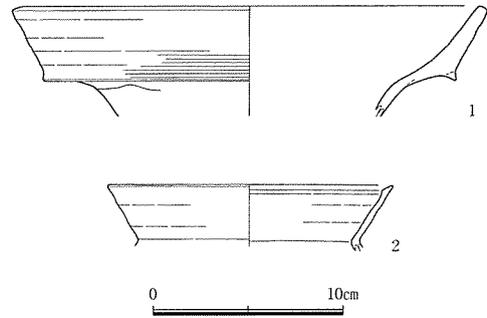
第65図 下味野童子山遺跡B区 SK-10実測図 (S = 1 : 30)

SK-10(第4・65・66図、図版2・14・19)

B調査区の南東に位置し、南東へ延びる尾根稜線から東へ下る斜面、標高51.92~52.13mに立地する。北側でSI-03と重複し、全体に深さ20cm程度と南側壁面ほか上部を流失する。平面は不整な隅丸長方形で、主軸はN-79°-Eをとる。規模は長さ2.27m、幅69cm、深さ21cmを測る。断面は皿状で、埋土は2層である。東側で須恵器高杯2点を検出した。杯部内面を北東へ向けやや横倒しとなった状態である。有蓋高杯(1)(2)はともに似通った形態で、内傾する立ち上がりと横に鈍く突出した受部をもつ。(1)の脚部に焼き歪みがあり(2)に比べると直線的に開く裾部となる。(2)の外面にはカキ目が観察される。



第67図 下味野童子山遺跡B区
土器溜実測図 (S = 1 : 60)



第68図 下味野童子山遺跡B区
土器溜出土遺物実測図 (S = 1 : 4)

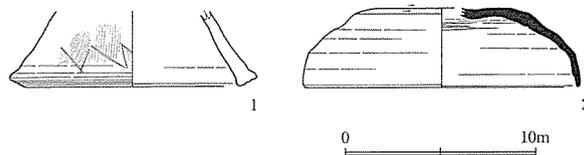
(4) その他の遺構と遺物

土器溜 (第3・4・67・68図、図版2・14)

B調査区の北西に位置し、南東へ延びる尾根稜線からやや北東へ下った緩斜面、標高47.50～52.60mに立地する。長軸2.90m、短軸2.13mを測る馬蹄形の落ち込み内を中心に土器の出土がみられた。底面は傾斜と同様に北東へ向けて標高を下げ、断面皿状で明確な壁の掘り込みは認められず、落ち込み内の土層は2層に分層される。出土遺物は土器細片が目立つものの、実測可能な(1)(2)を図化した。壺(1)は大きく開く複合口縁で、口縁部外面下位に薄いハケ目痕が観察される。甕(2)は器壁が薄いく字状口縁部で端部は内側に肥厚する。この他に弥生土器片なども出土している。

B区遺構外出土遺物 (第69図)

B調査区で出土した遺構外の遺物として(1)(2)を図化した。(1)はハ字状に開く脚裾部で、端部は肥厚して2条の凹線を施す端面をもつ。裾部外面に縦ハケ目を施し工具痕が観察される。(2)は須恵器杯蓋でSI-02の西側斜面で出土している。天井部と口縁部を介する稜は見られず口縁端部は丸くおさめる。



第69図 下味野童子山遺跡B区 遺構外出土遺物実測図 (S = 1 : 4)

出土遺物観察表

—記載事項について—

挿図番号 遺構ごとの実測番号、図版番号、付図内表示番号を統一して示す。

器種 土器は形態的特長から、壺・甕・高杯・杯等の呼称を用い須恵器は、蓋杯・杯蓋・杯身・有蓋高杯・高杯・壺・甕・横瓶・平瓶・杯等の従来の呼称を用いた。部分名称の場合は()で表示。鉄製品は形態、使用痕等の観察から、鉄刀・刀子・鉄鏃・鉄釘の名称を用いた。石製品は形態、使用痕等の観察から、石斧・石包丁・敲石・磨石等の名称を用いた。

法量 土器……口径：① 底径：② 最大胴径：③ 器高：④をcmで示す。なお、()は復元値。〈 〉は推定値。ただし目安として径の残存が7分の1以下を推定値とした。

石製品・鉄製品……長さ：L 幅：W 厚さ：Tをcmで表す。()は現存値。

形態・手法の特徴 主要部分について記述した。土器については口縁部の内外ヨコナデ調整を特別な場合以外は省略した。

胎土・焼成・色調

①胎土 砂粒の大きさとその量を示す。

②焼成 良好(堅緻)・良(普通)・やや不良(やや軟)・不良(軟)の4段階に分けた。

③色調 主として外面の色調を示すが、内外面が異なる場合(内)・(外)で表示。

備考 赤彩、黒斑、煤の有無等を記載。鉄・石製品は重量、材質を記載。()は現存値。

遺物登録番号 出土地を調査区分の通し番号で表示。遺物台帳登録番号。

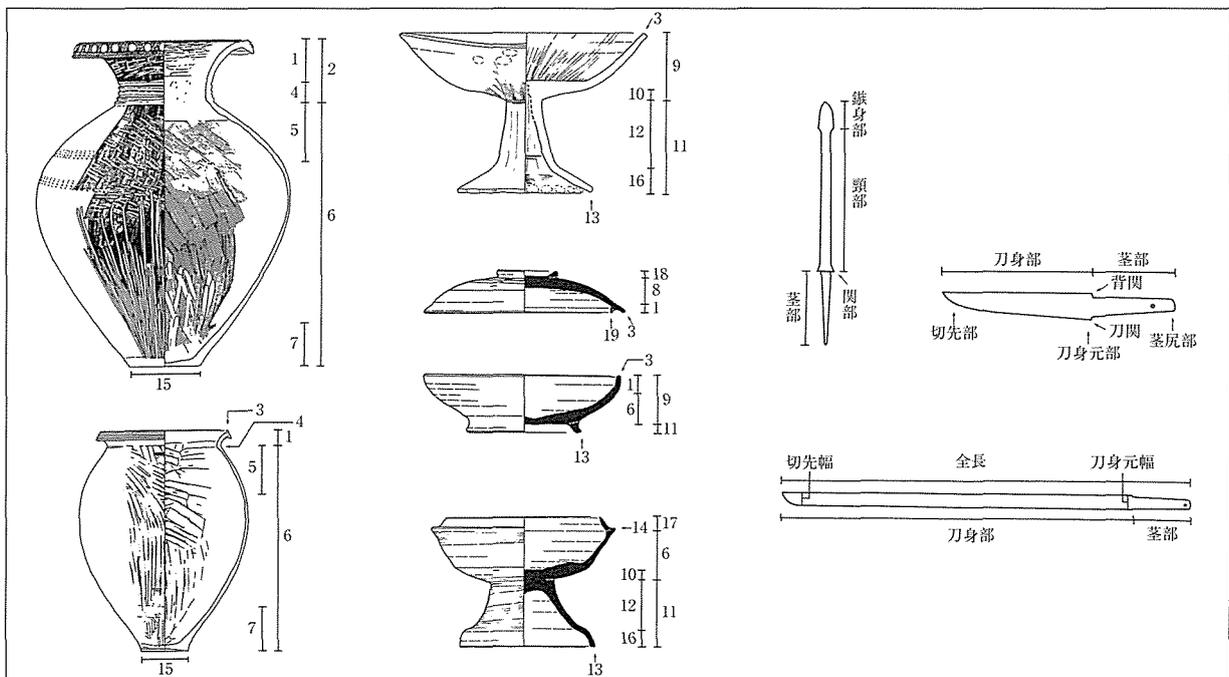
—遺物実測図中における表示—

須恵器：黒塗り 土器静止糸切り：⊙ 土器実測図のヨコナデ調整による稜：———

石製品実測図使用痕範囲：←——→ 石製品実測図摩滅範囲：←-----→

—土器の部分名称について— 部分名称を略す場合は頭文字を()で表示。

- 1：口縁部 2：口頸部 3：口縁端部 4：頸部 5：肩部 6：体部 7：底部 8：天井部
9：杯部 10：杯底部 11：脚(台)部 12：脚柱部 13：脚(台)端部 14：受部 15：底面
16：裾部 17：立上がり 18：摘み 19：かえり



第70図 土器・鉄製品細部名称図

下味野50号墳 (第14図)

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
1	高杯	① 17.2 ② 最大 17.8 ③ 9.3 ④ 11.8	口縁部は外傾し端部に面をもつ。脚部は基部から緩やかに開いて下半で八字状に開き裾端面をもつ。	杯部(外) 口縁端面に1条の沈線後ヨコナデ。杯部ハケ目後上半ヨコナデ、指成形痕。杯底部ナデ。 赤彩の後放射状暗文を2段に施す。 脚部(外) 上半縦方向の工具ナデ後軽いナデ。下半ナデ。裾端部ヘラ削り後軽いナデ。 (内) 上半絞り目後ナデ。裾部ナデ後横、斜位ハケ目。中位に工具痕。成形時の指頭圧痕。 接合部(外) 赤彩の後1条のヘラ描沈線。	① 1mm以下の砂粒を多く含む ② 4mmの砂粒有 ③ 良好 ④ 淡橙褐色 褐灰色	完形	赤彩 口縁部歪 土器転用枕	1

下味野51号墳 (第17図)

1	小型壺	① 8.4 ③ 8.9	口縁部は外傾し端部で丸く納める。体部は中位に最大径をもち球形。	(内外) 口縁部ハケ目後ヨコナデ。 (外) 体部上半ナデ、下半ヘラ削り後軽いナデ。 (内) 中位に指頭圧痕。 (内) 頸部ナデ。体部ヘラ削り後ナデ。	① 1mm前後の砂粒を多く含む ② 3mmの砂粒有 ③ 良好 ④ 褐色	(口) 1/2 (体) 1/2	黒斑有	3 4 5
---	-----	----------------	---------------------------------	---	--	--------------------	-----	-------------

下味野52号墳 (第19・20図)

1	高杯	① 14.6	碗状の杯部。口縁部は内湾気味に立ち上がり端部で上方へ丸く納める。	剥落不明瞭。 杯部(外) ハケ目後軽いヨコナデ。 (内) ハケ目。 赤彩後放射状暗文。	① 0.5mm以下の砂粒を多く含む ② やや不良 ③ 淡灰褐色 褐灰色	(口) 3/4 (体) 3/4	赤彩 土器転用枕	2
2	高杯	① 14.7	口縁部は内湾気味に立ち上がり端部は膨らみをもつ。	風化剥落不明瞭。	① 1mm以下の砂粒を多く含む ② やや良 ③ (外) 黄褐色 (内) 橙褐色	(杯) ほぼ1	赤彩 黒斑有 土器転用枕	3
3	高杯	② 14.0	脚部は大きく八字状に開き裾端面をもつ。	剥落不明瞭。 脚部(外) ナデ? 裾端部1条の沈線後ヨコナデ。 (内) ハケ目。	① 0.5mm以下の砂粒を多く含む ② やや不良 ③ 黄褐色 淡褐色	(脚) 1	赤彩 土器転用枕	1
4	高杯	① (23.7)	口縁部は外傾し端部で外反して面をもつ。	杯部(外) ナデ。指成形痕。杯底部横ハケ目後縦ハケ目後軽くナデ。 (内) 一部ハケ目痕。 杯底部凹盤成形。 赤彩後放射状の暗文を2段に施す。	① 0.5mm以下の砂粒を多く含む ② 良 ③ 黄褐色	(杯) 1/4	赤彩	9 12
5	高杯	② (7.8)	脚部は八字状に開き端部に面をもつ。	脚部(外) ナデ。 (内) ナデ? 成形時の圧痕、工具痕。	① 1mm前後の砂粒を多く含む ② 2mmの砂粒有 ③ 良 ④ 黄褐色	(脚) 1/2	赤彩	10 11

下味野53号墳 (第22図)

1	高杯			杯底部(外) ハケ目。 (内) 丁寧なナデ。	① 1mm前後の砂粒を多く含む ② 3mmの砂粒有 ③ 良 ④ 淡褐色	(杯底) ほぼ1	赤彩	1
2	高杯	② <9.2>	脚部は八字状に開き裾端部を欠く。	風化剥落不明瞭。	① 0.5mmの砂粒を僅かに含む ② やや不良 ③ 黄褐色	(脚) 1/7	赤彩	2

下味野54号墳 (第23・26・27・28図)

1	須恵器 杯蓋	摘み 1.3 ① 最大 9.1 ② 最大 9.3 ③ 最大 7.7 ④ 2.9	摘みは宝珠形。天井部は膨らみをもつ。下り口縁部で外方に内湾気味に納め端部は丸味をもつ。口縁部内にかえりをもつ。	(内外) ヨコナデ。 (外) 天井部ヘラ削り。後のヨコナデにより消える。 (内) 摘み貼付後天井部をヨコナデ。天井部周囲するナデ。	① 0.5mm以下の砂粒を多く含む ② 2mmの砂粒有 ③ 良 ④ (内) 淡青灰色 (外) 灰色 淡青灰色	完形	自然釉 口縁部歪 2とセット で出土	1
---	-----------	---	---	---	--	----	-----------------------------	---

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底最大径 ③最大径 ④器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物番号
2	須恵器杯身	① 7.9 ④ 2.6	口縁部は外傾し端部で肥厚し面をもつ。 (内外) ヨコナデ。 (外) 体部1/2逆時計廻りのヘラ削り 後底部中央ナデ。 (内) 底部一方のナデ。	① 1mm以下の砂粒を多く含む 1.5~3mmの砂粒有 ②良好 ③青灰色	完形	1とセットで出土	2
4	須恵器(口縁部)	① (13.2)	口縁部は内湾気味に立ち上がり端部で丸く納める。 (内外) ヨコナデ。	① 0.5mm以下の砂粒を僅かに含む 2.5mmの砂粒有 ②良 ③灰色	(口) 3/8		21 24
5	須恵器杯身	①最大(9.8) ④ 3.3	口縁部は直立して立ち上がり端部で丸く納める。 (外) 底部回転ヘラ切り、中心にヘラ起こし痕。 (内) 底部回転ナデ、円弧文工具痕。	① 1mm前後の砂粒を多く含む 2~5mmの砂粒有 ②良 ③灰色 淡青灰色	(口) 1/2 (体) 1/2 (底) 3/4	口縁部歪	24 25
6	須恵器(杯部)	① 8.5	口縁部は外傾し端部で丸く納める。 (内外) ヨコナデ。 (外) 底部回転ヘラ切り。	① 1mm以下の砂粒を僅かに含む 2~5mmの砂粒有 ②良 ③(内)灰色 (外)暗青灰色 灰色 (断)セピア色	(口) 3/4 (体) 1/2 (底) 3/4		21 24 25 28
7	須恵器杯	① (8.8)	口縁部は外傾し端部で丸く納める。脚部はラッパ状に開き、端部で屈曲、裾端部を欠く。 (内外) ヨコナデ。 杯部(外) 中位に2条の沈線。 (内) 底部カキ目後ナデ。 脚部(外) 中位に1条の沈線。カキ目痕。 (内) 上半カキ目痕。	① 1mm以下の砂粒を多く含む 3mmの砂粒有 ②良 ③淡灰色	(杯) 1/4 (脚) 上半 1 下半 2/3	胎土中の溶融物が斑点状に噴出	25
8	須恵器杯	① (12.8)	浅い杯部。口縁部は外傾し、端部で外反して丸みをもつ。 (内外) ヨコナデ。 (外) 杯底部逆時計廻りのヘラ削り。脚接合部ヨコナデ。	① 0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③(内)淡灰色 (外)暗灰色	(杯) 上半 1/7 下半 1/2	自然釉	25
9	須恵器杯	② 11.0	脚部はラッパ状に開き、端部で屈曲、外方に短く納める。 脚部(内外) ヨコナデ。	① 0.5mm以下の砂粒を多く含む 2.5mmの砂粒有 ②良 ③灰色	(脚柱) ほぼ1 (脚裾) 1/2		21 22 24 25
10	須恵器壺	①片口 11.2 ③ 12.3 ④ 20.3 ④ 18.7	口縁部は直立気味に上方へ伸び端部は丸い。片口をもつ。体部中上位に最大径をもつ。 (外) 肩部ヨコナデ後2条の沈線。胴部中位叩き目後軽いナデ。以下横後縦ハケ目。 (内) 胴部同心円状当て工具痕。底部同一工具による円弧状当て工具痕。	① 1~2mmの砂粒を多く含む 3~4mmの砂粒有 ②良好 ③灰色	(口) 1/3 (体) ほぼ1		11 19 20 21 23 24 29
11	須恵器付壺	③ 14.9	口縁部は頸部から外傾しながら開き端部を欠く。体部は中上位に最大径をもち丸みをもつ。底部へ続く。台部を欠く。 (内外) ヨコナデ。 (外) 口頸部中位、胴部上位各2条の沈線を施し、体部沈線上位にヘラ工具による連続刺突文を周囲にさせる。胴部カキ目後上半軽いヨコナデ。台接合部ヨコナデ。頸部ナデ。底部ナデ。 (内) 頸部ナデ。底部ナデ。	① 2~3mmの砂粒を多く含む 4~4.5mmの砂粒有 ②良 ③(内)淡青灰色 (外)淡灰色 (断)淡いぶいセピア色	(頸) 上半 1 下半 1/2 (体) 上半 3/4 下半 1/8	自然釉	17 25 29
12	須恵器壺	① (15.9)	口縁部は短く外傾し、端部で上外方へ摘み出す。 (外) 肩部平行叩き目後カキ目。 (内) 頸部ナデ、工具痕有。肩部円弧文当て工具痕。	① 0.5mm以下の砂粒を多く含む 2.5mmの砂粒有 ②良 ③灰色	(口) 1/4 (肩) 3/8		37 40 42
13	須恵器(口縁部)	① (8.2)	口縁部は外傾し端部で丸く納める。頸部に1条の稜が突出する。 (内外) ヨコナデ。	① 1mmの砂粒を多く含む 2.5~3mmの砂粒有 ②良 ③灰色	(口) 1/4		28
14	須恵器瓶	① (9.4)	口縁部は外傾気味に立ち上がり端部で上方へ丸く納める。口縁部は体部上面よりずらして接合。 (外) 頸部ヨコナデ。 (内) 頸部縦後横方向のナデ。後ヨコナデ。接合痕。	① 0.5mm前後の砂粒を多く含む 3mmの砂粒有 ②良 ③淡灰色 暗灰色 灰色	(口) 1/4 (頸) 2/3 (肩) 1/8	自然釉	27 28 30
15	須恵器(体部)	③ (20.6)	体部は中上位に最大径をもつ。 (外) 体部中上位横方向のナデ。砂の動きが残る。胴部ヨコナデ後底部ヘラ削り。 (内) 底面ナデ。ヨコナデ。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良 ③(内)灰白色 (外)灰色	(肩) 1/8 (体) 1/4	自然釉	27 33

下味野55号墳 (第30・31図)

挿入番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大口径 ④器高	形態・手法の特徴	①胎土成調 ②焼色 ③色	残存状況	備考	遺物登録番号	
1	須恵器杯蓋	① 4.6 ② 16.3 ③ 14.1 ④ 3.9	① 摘みは凹面。天井部は膨らみをもつて口縁部へと下り端部は丸い。口縁部内面にかえりをもち1~4はかえりより先端が口縁端部より僅かに突出する。	(内外) ヨコナデ。 (外) 天井部2/3上半逆時計廻りのヘラ削り。後摘み貼付、その周縁部をヨコナデ。 (内) 天井部不定方向のナデ。	① 1mm以下の砂粒を多く含む 2.5mmの砂粒有 ② 良 ③ 淡灰色	ほぼ完形	2	
2	須恵器杯蓋	① 4.9 ② 15.5 ③ 13.4 ④ 3.1	① 摘みは凹面。天井部は膨らみをもつて口縁部へと下り端部は丸い。口縁部内面にかえりをもち1~4はかえりより先端が口縁端部より僅かに突出する。	(内外) ヨコナデ。 (外) 天井部1/2逆時計廻りのヘラ削り。天井中心部にヘラ起こし痕。後摘み貼付。その周縁部をヨコナデ。 (内) 天井部不定方向のナデ。	① 1mm前後の砂粒を多く含む ② 良 ③ 灰色	ほぼ完形	7	
3	須恵器杯蓋	① 3.9 ② 13.0 ③ 11.2 ④ 2.9	① 摘みは凹面。天井部は膨らみをもつて口縁部へと下り端部は丸い。口縁部内面にかえりをもち1~4はかえりより先端が口縁端部より僅かに突出する。	(内外) ヨコナデ。 (外) 天井部2/3逆時計廻りのヘラ削り。後摘み貼付、その周縁部をヨコナデ。ヘラ状工具による1条の記号。 (内) 天井部ナデ。	① 1mm前後の砂粒を多く含む ② 良 ③ 淡灰色	ほぼ完形	自然釉 セット焼痕 胎土中の溶融物が斑点状に噴出	10
4	須恵器杯蓋	① 14.4 ② 16.3 ③ 14.3 ④ 3.7	① 摘みは凹面。天井部は膨らみをもつて口縁部へと下り端部は丸い。口縁部内面にかえりをもち1~4はかえりより先端が口縁端部より僅かに突出する。	(内外) ヨコナデ。 (外) 天井部2/3逆時計廻りのヘラ削り。後摘み貼付、その周縁部をヨコナデ。 (内) 天井部不定方向のナデ。	① 1mm前後の砂粒を含む 4mmの砂礫有 ② 良 ③ 淡灰色	ほぼ完形	3	
5	須恵器杯蓋	① 4.8 ② 15.6 ③ 13.6 ④ 3.4	① 摘みは凹面。天井部は膨らみをもつて口縁部へと下り端部は丸い。口縁部内面にかえりをもち1~4はかえりより先端が口縁端部より僅かに突出する。	(内外) ヨコナデ。 (外) 天井部2/3逆時計廻りのヘラ削り後軽いナデ。後摘み貼付、その周縁部をヨコナデ。 (内) 天井部不定方向のナデ。	① 1mm以下の砂粒を多く含む 4mmの砂礫有 ② 良 ③ (内) 淡灰色 (外) 暗灰色	完形	胎土中の溶融物が斑点状に噴出	1
6	須恵器高台付杯	① 12.5 ② 6.8 ③ 4.3 ④ 4.3	① 口縁部は外傾し端部で丸く納める。高台部は短く八字状に開く。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部回転ヘラ切り、後高台部貼付、その周縁部をヨコナデ。体部ヘラ状工具による1条の記号。 (内) 底部軽いナデ。指ナデ。	① 1mm前後の砂粒を多く含む ② 良 ③ (内) 灰色 (外) 暗灰色	ほぼ完形	自然釉 胎土中の溶融物が斑点状に噴出	9
7	須恵器高台付杯	① 14.7 ② 7.3 ③ 5.0 ④ 5.0	① 口縁部は内湾し端部で丸く納める。高台部は八字状に開き凹面をもつ。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部ヘラ切り、中心にヘラ起こし痕。後高台部貼付、その周縁部をヨコナデ。 (内) 杯底部不定方向のナデ。	① 1mm以下の砂粒を多く含む 3mmの砂粒有 ② 良 ③ (内) 灰色 (外) 暗灰色	ほぼ完形	自然釉 胎土中の溶融物が斑点状に噴出	8
8	須恵器高台付杯	① 15.4 ② 8.3 ③ 4.8 ④ 4.8	① 口縁部は内湾し端部で上方へ丸く納める。高台部は八字状に開く。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部回転ヘラ切り、後高台部貼付、その周縁部をヨコナデ。 (内) 杯底部不定方向のナデ。	① 1mm前後の砂粒を含む ② やや不良 ③ 淡灰色	ほぼ完形	4	
9	須恵器高台付杯	① 15.6 ② 9.0 ③ 4.8 ④ 4.8	① 口縁部は内湾し端部で丸く納める。高台部は八字状に開く。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部ヘラ切り、後高台部貼付、その周縁部をヨコナデ。 (内) 杯部上半調整不十分な為砂の動きが残る。杯底部不定方向のナデ。工具痕。	① 1mm前後の砂粒を含む 5mmの砂礫有 ② やや不良 ③ 淡灰色	ほぼ完形	5	
10	須恵器壺	① 最大10.9 ② 最小10.2 ③ 10.8 ④ 16.6 ⑤ 17.2	① 口縁部は直立し端部は丸い。体部は上位に最大径をもち、平底の底部へ徐々に窄む。	(内外) ヨコナデ。 (外) 体部下半ナデ。底部ナデ。底部に須恵器片が付着。	① 1mm以下の砂粒を多く含む 3mmの砂粒有 ② 良好 ③ 青灰色	ほぼ完形	自然釉	6
11	須恵器小型壺	① 3.5 ② 6.7 ③ 5.1 ④ 5.1	① 口縁部は短く外傾し端部は丸い。体部は横に長軸をなす楕円状。平底。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部ナデ、工具痕。砂の動きが残る。	① 2mm以下の砂粒を多く含む 3mmの砂粒有 ② 良 ③ 暗灰色	完形	自然釉 布目痕	11
16	須恵器高台付杯	① 12.9 ② 7.6 ③ 4.3 ④ 4.3	① 口縁部は内湾し端部で丸く納める。高台部は八字状に開き端部で下方に摘み出す。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部ナデ後高台部貼付、その周縁部をヨコナデ。底部糸切りか？ (内) 杯底部ナデ。	① 1mm前後の砂粒を多く含む 4mmの砂礫有 ② 良 ③ (内) セピア色 淡青灰色 (外) 淡青灰色 (断) セピア色	(口) 1/2 (底) 1	17	
17	須恵器壺	② 7.5 ③ (16.0)	① 体部は中上位に最大径をもつ。平底。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底面静止糸切り後ナデ。後外周をヘラ削り2回転。 (内) 底部不定方向のナデ。	① 1mmの前後の砂粒を含む 2.5~3mmの砂粒有 ② 良 ③ 淡青灰色 灰色	(肩) 1/4 (体) 1/8 (底) 1	自然釉	22 30 34
18	須恵器壺	② 9.4 ③ 13.8	① 体部は緩やかに内湾して下り平底の底部へ続く。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底面かすかに静止糸切り痕後粗なナデ。 (内) 底部指頭圧痕。接合痕。	① 1mm以下の砂粒を含む 5mmの砂礫有 ② 良 ③ 灰白色 青灰色	(体) 1/2	22 23 30	

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
19	須恵器 横瓶	① (14.0) ③ (46.1)	口縁部は外傾して開き端部で凹面をもつ。体部は俵型。	(外) 体部平行タタキ目痕後カキ目。俵型側面に口縁を接合後ヨコナデ。 (内) 体部同心円状当て工具で成形、突出部は同一工具で青海波文とする。	① 1mm前後の砂粒を含む ② 良 ③ 淡灰色	(口) 1/3 (体) 1/2		23 30
20	土師器 杯	① (16.5)	口縁部は外傾し端部で僅かに内方へ摘み出す。	剥落不明瞭。 (外) 底部ナデ。砂の動きが残る。	① 1mm以下の砂粒を含む ② 良 ③ 黄橙色	(口) 1/5 (杯) 1/2	赤彩	41
21	須恵器 蓋杯 杯身	① 受部 (10.0) ③ (11.6)	立ち上がりは短く内傾し端部は細る。体部は底部で屈曲し受部は外上方に納める。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部回転ヘラ切り後ナデ。 (内) 底部ナデ。	① 1mm以下の砂粒を含む 2mmの砂粒有 ② やや不良 ③ 淡灰色	3/7	胎土中の溶融物が斑点状に噴出	25 42
22	須恵器 器台	② <30.4>	台部は内湾気味に開く。	(内外) ヨコナデ。 (外) 台裾部波状文を5段施す。裾端部移動時の工具差込みの為工具痕多い。	① 1mm前後の砂粒を多く含む 4mmの砂粒有 ② 良 ③ (内) 淡青灰色 淡灰色 (外) 淡灰色	(台裾) 1/8		27 31 34

SX-01 (第33図)

1	壺	① (22.8)	口縁部は大きく外反して開き端部で下垂気味に納め、端面をもつ。端面を上方に摘む。	風化剥落不明瞭。 (内) 口縁部に2条の沈線痕。	① 1mm以下の砂粒を多く含む ② 良 ③ 黄橙色	(口) 1/4		14
---	---	----------	---	-----------------------------	---------------------------------	---------	--	----

SX-02 (第35図)

1	壺	① <18.8>	線上口縁。口縁部は外反気味に開き端部で肥厚し面をもつ。	風化剥落不明瞭。 (外) 口縁端面に3条の凹線、ヘラ状工具による刻み目を連続させる。	① 0.5mm以下の砂粒を多く含む ② 良 ③ 橙褐色 橙色	(口) 1/8	黒斑有	21
---	---	----------	-----------------------------	---	--------------------------------------	---------	-----	----

下味野古墳群 鉄製品 (鉄刀・刀子・馬具・釘)

(単位) : cm

出土地	挿図番号	器種	全長	法量						形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
				刀部		茎部		断面					
				長さ	断面形	長さ	断面形	計測部位	幅				
下味野古墳 49号主体部	第13図 1	刀子	23.0	18.0	二等辺三角形	4.9	長方形	刀身切先部 1.15 0.20 刀身中央部 1.60 0.50 刀身元部 1.78 0.50 茎中央部 0.80 0.28	両関をもつ。刃関から徐々に幅、厚を減らし切先を丸く納める。茎尻部屈曲する。	完存	49.0g	2	
	第13図 2	刀子	11.1	8.0	二等辺三角形	3.1	長方形	刀身中央部 1.45 0.30 刀身元部 1.63 0.28 茎元部 1.28 0.32	刃関をもつ。刃関から徐々に幅、厚を減らし切先を丸く納める。茎尻は丸みをもつ。	ほぼ完存	(15.1)g	1	
下味野古墳 50号主体部	第14図 2	刀子	10.7	7.1	二等辺三角形	3.5	長方形	刀身中央部 1.55 0.28 刀身元部 1.80 0.30 茎中央部 1.20 0.30	両関をもつ。刃関から徐々に幅、厚を減らし切先を欠く。茎部に目釘孔を観察。	ほぼ完存	(12.0)g	2	
下味野古墳 54号主体部	第23図 3	馬具 (轡)	2連銜 引手	棒断面隅丸方形 棒断面楕円形状				2連銜は長さ18.6cmの鉄棒の両端を環状とし脚金は径2.0cmの環を連結し銜先環は径3.2×2.7cmを測り、環に鏡板、引手を取り付ける。鏡板は長さ7.4cmの楕円形状を呈し板状立間を付し立間は方形孔をもつ。引手は16.7cmを測り引手壺は屈曲して外径3.0cmの環とする。			ほぼ完存	(210.0)g 錆着	3
下味野古墳 55号石	第30図 12	鉄刀	(16.9)		二等辺三角形			刀身切先部 2.00 0.40 刀身中央部 2.30 0.45	カマズ状の切先。錆化膨張著しい。	刀身部	(80.6)g	12	
	第30図 13	釘	(6.6)					尖端部 0.17 0.18	頭部は鍛造により逆L字状に折り曲げる。	尖端部欠	(6.9)g 木質痕	13	

下味野古墳群 鉄製品 (鉄鏃)

出土地	挿番号	器種	全長 ①鏃身 ②頭部 ③茎部	鏃身部			頭部		茎部		形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
				闊部	断面計測	逆刺	闊部	断面計測	断面形	断面計測				
				平面形	W T	幅厚さ	平面形	W T						
下味野55号墳石室	第30図14	鉄鏃	(7.7)						長方形	下部 W 4.0 T 2.8	鏽化する。	茎部	(3.4)g 木質痕	15
	第30図15	鉄鏃	(3.6)						方形	下部 W 4.9 T 4.7	鏽化する。	茎部	(5.5)g 巻締痕 木質痕	14

下味野51号墳 出土玉類 (第17図)

挿図番号	種類	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	穿孔	色調	重量 (g)	材質	残存状況	備考	遺物登録番号	
2	管玉	(34.3)	7.0	3.5	3.2	両面	暗緑灰色	(2.47)	碧玉	一端部欠		2

下味野54号墳 出土玉類 (第28図)

16	勾玉	29.6	9.0	3.0	1.2	片面	暗緑灰色	5.56	碧玉	完存	C字形	9
----	----	------	-----	-----	-----	----	------	------	----	----	-----	---

下味野童子山遺跡

A区 SI-01 (第38~40図)

挿図番号	器種	法量 (cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色	残存状況	備考	遺物登録番号
1	壺	① 23.0 ② 9.5 ③ 35.1 ④ 46.0	口縁部は大きく外反して開き、端部で下垂し面をもつ。体部は中上位を最大径とし卵形状で平底をもつ。 (外) 口縁端面に4条の凹線。後連続刺突文を3段に押しつける。後に凹形浮文を密に施す。後残存部に連続貼付。体部ハケ目後口頭部～体部上半を縦ハケ目後粗な斜位ハケ目。後体部下半縦ヘラ磨き。頭部は3条の凹線を施し3～4条が突出する。胴部貝殻腹線による連続刺突文を2段周回させる。接地面横方向のナデ。底面はナデ後一方のヘラ磨き後直角に交差するヘラ磨き。 (内) 口縁部ヘラ磨き後端部ヘラ状工具による3条の独立した沈線後軽いヨコナデ。頭肩部ナデ。成形時の圧痕。体部ハケ目、下半原体不明のナデ。底部ナデ。	① 1mm前後の砂粒を多く含む ② 良 ③ 淡黄褐色 淡褐色	(口) 3/4 (体中位) 5/6 (底) 1		21 22
2	壺	① 21.4 ② 9.3 ③ 28.1 ④ 38.4	(外) 口縁端面に3条の凹線。後連続刺突文を2段に押しつける。後に凹形浮文を残存部に連続貼付。下垂部に成形時の圧痕。体部ハケ目後口頭部～肩部縦ハケ目、下半縦ヘラ磨き。後横斜位方向のヘラ磨きを胴部に密に、口頭部、底部は粗に施す。頭部は2条の突帯貼付後ヨコナデ。底部は軽い横方向のナデ、底面は丁寧なナデ。 (内) 口頭部ハケ目後縦横ヘラ磨き後端部ヨコナデ。頭部は3条単位の工具による斜格子文。頭部ナデ。体部丁寧なハケ目後底部ナデ。体部上位に成形時の圧痕が带状に残る。	① 1mm前後の砂粒を多く含む ② 良 ③ 淡褐色	(口頭) 3/5 (体上半) 2/3 (体下半) 一部 (底) 2/3	黒斑有	5 7 8 9 10 11 14 23 24
3	壺	① (19.8) ② 8.6 ③ 29.3 ④ 40.6	剥落不明瞭。 (外) 口縁端面に2条の凹線。後連続刺突文が周回。体部ハケ目後口頭部～肩部縦ハケ目、体部下半縦ヘラ磨き。頭部に5条の凹線。胴部にハケ目状工具による連続刺突文を2段に施す。 (内) 口縁部ハケ目。口縁屈曲部に2条の沈線後ヘラ状工具による連続刺突文を施す。	① 1mm以下の砂粒を多く含む ② やや不良 ③ 黄褐色	(口) 1/5 (肩) 1/2 (体) 1/2 (底) 2/3	黒斑有	20

挿図号	器種	法量(cm) 径 ①口 ②底大 ③最大 ④器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録号
4	壺	① 20.6 ② 10.5 ③ 36.0	口縁部は外反して開き4は端部に面をもく。5は端部を欠く。体部は中上位を最大径とし卵形状で平底をもつ。 (外) 口縁端面に3~4条の凹線。後上段連続刺突文、下段ヘラ状工具による刻み目を施す。後に円形浮文を残存部に連続貼付。成形時の圧痕が残る。体部上半斜位ハケ目後口頸部~肩部縦ハケ目、後肩部横ヘラ磨き。体部下半縦ヘラ磨き後底部軽い斜位ヘラ磨き後底部軽くナデ。頸部上位に5条の凹線、下位に指頭圧痕突帯を巡らす。工具痕有。底面丁寧なナデ。 (内) 口頸部横斜位ハケ目後端部ヨコナデ。頸部ナデ後ヘラ磨き。成形時の圧痕が残る。体部上半横斜位ハケ目、下半縦後斜位ハケ目。後底部ナデ。不定方向のナデ。	① 1mm以下の砂粒を含む ② やや不良 ③ (外) 橙褐色 橙褐色 (内) 灰褐色	(口) ほぼ1/7/8 (肩) 1/2 (底) 3/4	黒斑有	341819272931
5	壺	② 最大 10.0 ③ 最小 8.8 (36.6)	(外) 体部ハケ目後口頸部~肩部縦ハケ目。頸部7条の凹線後軽くヨコナデ。体部下半縦ヘラ磨き後斜位ヘラ磨き。後に底部ナデ。底面丁寧なナデ。 (内) 剥落不明瞭。口縁部上半、外面と同一工具によるハケ目後ヨコナデ?下半ヘラ磨き? 頸部ハケ目後ナデ? 成形時の圧痕。体部ハケ目後下半一部ナデ。底部ナデ。	① 1mm前後の砂粒を含む ② 良 ③ (外) 淡橙褐色 (内) 淡橙褐色 暗褐色 淡褐色	(頸) 3/4 (肩) ほぼ1/2 (体) 1/2 (底) ほぼ1	黒斑有 炭片	28
6	壺	② 8.6 ③ 30.1	(外) 体部上半ハケ目後斜位ヘラ磨き、下半縦ヘラ磨き。後底部ナデ。頸部残存部に凹線が1条に上? 胴部にはハケ状工具による連続刺突文を2段に施す。体部下位に成形時の圧痕が残る。 (内) 体部ハケ目後頸部ナデ、体部下位横ヘラ磨き後底部ナデ。肩部に成形時の指頭圧痕が带状に残る。	① 0.5mm以下の砂粒を多く含む 1~2mmの砂粒有 ② やや不良 ③ (外) におい黄褐色 (内) 暗灰色	(体) ほぼ1/1 (底) ほぼ1	黒斑有 煤付着	26
7	甕	① (18.8) ② 6.7	(外) 体部上半ハケ目、下半ヘラ磨き一部ハケ目痕。体部下位带状に成形時の圧痕と砂の動きが残る。底部大きな面取り状の成形痕。底面丁寧なナデ。 (内) 体部上半ハケ目状工具によるナデ後一部ヘラ磨き。下半ハケ目後ヘラ磨き、ナデ。底部ハケ目。	① 1mm前後の砂粒を含む 2~3mmの砂粒有 ② やや不良 ③ 黄褐色 暗褐色	(口) 3/8 (肩) 3/8 (体上半) 1/2 (体下半) 1 (底) ほぼ1	黒斑有 煤付着	22
8	高杯	① 28.2 ② 15.5 ④ 24.5	杯部(外) ハケ目後ヘラ磨き。 (内) 上半ハケ目後口縁部ヨコナデ。下半剥落不明瞭。 脚部(外) 接合部からハケ目後上、中、下段に各々4条、4条、3条単位のヘラ描沈線で区画し下段は後強いヨコナデ。端面横ハケ目。区画の上段には円孔6、下段には長方形の透かし窓6を外から穿つ。下段の透かし窓間に線刻文を施すが剥落部多く鮮明さを欠く。一箇所の明確部には鋸歯文内に斜格子が施される。 (内) 上半絞目後その上半をナデ消す。下半ナデ後ハケ目。裾部ヘラ磨き。接合部円盤充填痕。	① 1mm前後の砂粒を多く含む 3mmの砂粒有 ② やや不良 ③ 淡褐色	(杯) 3/4 (杯底) 1 (脚) 1	黒斑有	25

A区 SD-02 (第50図)

1	須恵器 台付壺	② <12.7> ③ <22.2>	体部は上位に最大径をもつ。脚台部は八字状に開き端部で肥厚し面をもつ。透し窓をもつ。 (内外) ヨコナデ。 (外) 体部ナデ、上位に1条の沈線。成形時の指頭圧痕。底部ヘラ削り。後高台部貼付、その周縁部をヨコナデ。 (内) 体部ヨコナデ。中下位円弧文工具痕が残る。底部粗なナデ。指成形痕。接合部に長方形の透し窓2を観察。4方向の可能性。	① 1mm前後の砂粒を僅かに含む 3mmの砂粒有 ② 良 ③ 淡灰色	(体) 1/8 (底) 1/10	自然釉 胎土中の溶融物が内面斑点状に噴出	23
---	------------	----------------------	---	---	---------------------	-------------------------	----

A区 遺構外 (第52・53図)

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
1	甕	① <25.6>	縦上口縁。口縁部は短く外傾し端部で上下に肥厚して面をもつ。 (外) 口縁端面の上下に各1条の沈線後残存部に円形浮文2を貼付するが共に剥離する。頸部指頭圧痕突帯を巡らす。 (内) 剥落不明瞭。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡橙褐色	(口) 1/19		A-42
2	高杯	① <22.2>	口縁部は内湾し端部で内方に肥厚して面をもつ。 (外) 口縁部4条の凹線。体部ヘラ磨き。 (内) 杯部横後縦ハケ目。	①1~2mmの砂粒を含む 4.5mmの砂礫有 ②やや不良 ③灰褐色	(口) 1/20		A-15
3	磨石	L (14.3) W 6.7 T 4.1	平面は楕円状の自然石。長軸一端部を欠く。 長軸3、端部1に磨り痕。他一端部に蔽打痕。	③淡褐色	一端部欠	(564)g 砂岩	A-23
4	磨石 製斧	L 8.9 W 7.0 T 1.6	片刃成形。平面形は長方形状。 刃部に使用痕。	③淡灰色	ほぼ1	160g 粘板岩	A-32
5	磨石 製斧	L 9.5 W 4.7 T 2.0	両刃成形。平面形は刃部方向へと幅増とし刃縁は弧状。 刃部に使用痕。	③乳灰色に淡灰色の斑点状	ほぼ1	144g 粘板岩	A-22
6	磨石 製斧	L 4.0 W 2.1 T 0.8	小型。両刃成形。平面形は刃部方向へと幅増する。横断面は隅丸長方形状。 刃部に使用痕。	③褐色	完存	11.2g 硬質砂岩	A-35

B区 SI-02 (第55図)

1	甕	① (15.2)	く字状口縁。口縁部は短く外傾肥厚し端部に面をもつ。 風化剥落不明瞭。 (外) 口縁部はヨコナデ後刻み目が周囲する。体部はハケ目。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③(外)濃橙色 褐色 (内)橙色 橙褐色	(口) 1/5 (肩) 1/7		1
2	甕	① (22.1)	縦上口縁。口縁部は短く外傾し端部で肥厚して面をもつ。 (外) 口縁端面2条の凹線後下段軽くナデ。頸部ヨコナデ後刻み目貼付突帯。体部ハケ目後軽くヨコナデ。 (内) 剥落不明瞭。	①1mm前後の砂粒を多く含む 2mmの砂粒有 ②良 ③淡橙褐色	(口) 1/6 (頸) 1/6 (肩) 1/16		9
3	(脚部)	② <14.0>	ハ字状に開き凹端面をもつ。透し窓をもつ。 (内外) ヨコナデ。 (外) 上位3条のヘラ描沈線。裾部に2条の凹線。中位ヘラ状工具による鋸歯文を施し文内に斜位線文。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③橙褐色	1/8		14
4	手捏ね杯	① 5.2 ② 2.6 ④ 5.1	口縁部は外傾し端部は丸みをもつ。上げ底の底部。 (外) ナデ。脚部成形時の指頭圧痕。 (内) ヘラ削り後ナデ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む 1~3.5mmの砂粒有 ②良 ③橙褐色	(口) 7/8 (底) 1	口縁部歪	2 15
5	(脚台部)	② 6.3	脚部はハ字状に開き凹端面をもつ。 (外) ハケ目。 (内) 体部ハケ目。底部ナデ、工具痕。脚部ヨコナデ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③暗褐色 灰褐色	7/8	黒斑有	14

B区 段状遺構1 (第58図)

1	壺	① 21.3	口縁部は外反して開き端部で屈曲、外下方に下垂し面をもつ。 (外)口縁端面4条の凹線。口頸部ハケ目後上端部ヨコナデ、頸部残存部に5条の凹線。 (内)口縁上端面部に放射状のハケ目。口頸部同一工具による横斜位ハケ目後上半横方向のナデ、頸部所々ナデ。	①1~2mmの砂粒を多く含む 3~6mmの砂礫有 ②良 ③濃橙色	(口) 1/2		3 4
2	甕	① (26.6)	縦上口縁。口縁部は短く外傾し端部で肥厚し面をもつ。 (外)肩部縦斜位ハケ目後頸部ヨコナデ、後横ハケ目。 (内)口縁部横ハケ目後ヨコナデ。頸部ヨコナデ。肩部ハケ目。	①1mm前後の砂粒を含む 3.5mmの砂粒有 ②良 ③淡黄褐色	(口) 1/5 (肩) 1/6	朱付着?	4
3	底部	② 7.7	平底。 風化剥落不明瞭。	①2mm前後の砂粒を含む 5~5.5mmの砂礫有 ②やや不良 ③(外)黄褐色 (内)黄褐色 橙褐色	(底上半) 1/4 (底下半) 1/2	黒斑有	7

B区 段状遺構2 (第59・60図)

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色	残存状況	備考	遺物登録番号
1	壺	① <30.6>	口縁部は端部で水平とし上下に肥厚して面をもつ。 (外) 口縁端面3条の凹線後ハケ状工具による刻み目を2段に施す。後残存部に円形浮文7貼付。剥離痕2。口縁部ナデ。成形時の指頭圧痕。 (内) 口縁部に3条の凹線、後6条の波状文。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③褐色	(口) 1/11		58
2	甕	① <18.4>	く字状口縁。口縁部は大きく外傾して開き端部で上方へ摘み出し端面をもつ。 (外) 体部ハケ目。 (内) 体部剥落不明瞭。	①1~2mmの砂粒を多く含む 3.5mmの砂粒有 ②良 ③淡橙褐色	(口) 1/8		8
3	高杯	① (22.6)	口縁部は内湾気味に立ち上がり端部で内外に肥厚する。 (外) 口縁端部刻み目。杯部縦ハケ目後粗なヘラ磨き、後所々軽いナデ。下位成形時の圧痕。杯底部斜位ハケ目。 (内) 杯部ハケ目後2/3上半ナデ。杯底部粗なヘラ磨き。円盤充填痕。	①0.5mm以下の砂粒を含む 2mmの砂粒有 ②良 ③淡橙褐色 褐色	(口) 3/8 (杯上半) 3/8 (杯下半) 1/2	黒斑有	49
4	石包丁	L (3.7) W 4.1	磨製。 背側に紐通し穴2。	③淡灰緑色	片	(7.7)g 滑石千枚岩	2

B区 段状遺構1・2北側 (第61図)

1	壺	① (18.4)	口縁部は外反して端部で水平方向に開き凹端面をもつ。 (外) 口縁部ハケ目後頭部に4条の凹線。 (内) 口縁部波状文後2条の凹線。頭部ヘラ磨き。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③橙褐色	(口) 1/6		7
2	甕	① <22.6>	縁上口縁。口縁部は短く外傾し端部で肥厚し面をもつ。 (内外) ヨコナデ。 (外) 口縁端面2条の凹線。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③黄褐色	(口) 1/7	黒斑有	11
3	甕	① <24.5>	(外) 口縁端面に1条の沈線後ハケ状工具による連続刺突文。肩部横ハケ目、後のヨコナデにより上部が残り下方は消えかかる。 (内) 口縁部ハケ目後ヨコナデ。肩部ナデ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む 3mmの砂粒有 ②やや不良 ③黄褐色	(口) 1/8	黒斑有	7

B区 段状遺構3 (第63図)

1	磨石	L 11.1 W 4.9 T 2.1	楕円状の自然石。 1面に磨り痕。	③淡黄褐色	ほぼ1	122g	4
2	磨石 製斧	L (5.6) W (2.0) T 3.3	両刃。 刃こぼれする。 側2面割れにより欠失。	③灰色	片	(72)g 緑色片岩 〔緑糜石〕 〔緑泥石〕	5

B区 SK-10 (第65図)

1	須有高 器蓋杯	①最大 12.8 最小 12.1 受部 14.9 ②最大 11.1 最小 9.3 ④ 11.9	立ち上がりは内傾し端部は丸い。杯体部は外傾し受部は水平に短く納める。脚部は基部から八字状に開き端部に面をもつ。 (内外) ヨコナデ。 (外) 杯体部1/2逆時計廻りのヘラ削り後脚台部接合、後ヨコナデ。	①1~2mmの砂粒を多く含む 3.5mmの砂粒有 ②良 ③(外)灰色 (内)暗灰色	ほぼ1	自然釉 全体に歪 杯部内面に 胎土中の溶 融物が斑点 状に浸出	1
2	須有高 器蓋杯	① 12.1 受部 14.6 ②最大 11.2 最小 10.6 ④ 10.5	立ち上がりは内傾し端部は細る。杯体部は外傾し受部は外方に短く納める。脚部は基部から八字状に開き端部で内湾して凹端面をもつ。 (内外) ヨコナデ。 (外) 杯部中位カキ目後ヨコナデ。杯体部1/2逆時計廻りのヘラ削り。脚台部接合後ヨコナデ後カキ目。 (内) 杯底部粗なナデ。	①1~2mmの砂粒を多く含む 6mmの砂粒有 ②良 ③(外)灰色 (内)暗灰色	ほぼ1		2

B区 土器溜 (第68図)

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
1	壺	① <24.0>	複合口縁。口縁部は外傾して開き端部に面をもつ。口縁屈曲部は貼付の稜とする。	剥落不明瞭。 (外) 口縁部櫛描平行沈線後半ヨコナデ。	① 1mm以下の砂粒を含む ② 良 ③ 黄褐色	(口) 1/8		4
2	甕	① (14.8)	く字状口縁。口縁部は外傾し外端部をつまむ。		① 0.5mm以下の砂粒を含む ② 良 ③ 褐色	(口) 1/6	黒斑有	8

B区 遺構外 (第69図)

1	(脚部)	② <11.2>	脚部は八字状に開き端部で肥厚し面をもつ。	(外) 脚部縦ハケ目後ヘラ状工具による鋸歯文。端面ヨコナデ後2条の凹線。 (内) 脚部ナデ。	① 1mm以下の砂粒を含む ② 良 ③ 黄褐色	(底) 1/7		5
2	須恵器杯蓋	① <14.4>	天井部は膨らみをもつて口縁部へと下り端部で内側に段をもち丸く納める。	(内外) ヨコナデ。 (外) 天井部1/2逆時計廻りのヘラ削り。中心部にヘラ起こし痕。 (内) 天井部円弧文工具痕。	① 0.5mm以下の砂粒を多く含む 1mmの砂粒有 ② 良 ③ 灰色	(口) 1/8 (天) 1/4		15

第4節 まとめ

今回下味野古墳群の調査から、古墳時代中～後期の古墳10基、弥生時代中期の埋葬施設2基を検出した。出土した遺物は、鉄刀、刀子、鉄釘などの鉄製品、碧玉製勾玉・管玉、馬具轡、高杯・小形壺などの土師器、蓋杯・高杯・壺・甕などの須恵器、弥生土器片がコンテナ(容量54×34×20cm)約10箱分である。

また、調査した下味野古墳群と同一尾根および南東側の尾根上に立地する下味野童子山遺跡は、今回古墳の調査により新規に発見された遺跡で、竪穴住居3棟、段状遺構3基、土坑10基、溝状遺構2条、溝状石列遺構、土器溜を検出した。出土した遺物は、土器と石製品がコンテナ(容量54×34×20cm)約20箱分である。時期的には竪穴住居や段状遺構から出土した弥生時代中期の遺物が大部分を占め、わずかながら弥生時代後期、古墳時代前～後期の遺物がみられる。

古墳について

下味野古墳群は、鳥取市下味野および北村に所在し、中国山地から派生し北東へ延びる千代川左岸丘陵のうち標高30～160mに展開する。下味野古墳群の範囲や名称は、現在の行政区分に由来する部分が大きく、地形的に連続と続く千代川左岸丘陵の一部を下味野古墳群として呼称しており、鳥取平野地域でも分布範囲を比較的広くもつ古墳群である。現在の分布状況から、標高100～160mの主稜線上に23号墳(全長73.5m)をはじめとした前方後円墳を中心に頂部単位で展開する古墳と、その主稜線が徐々に標高を下げ先端部は30mほどになる低丘陵上に連続と連なる古墳、標高100～160mの主稜線から派生する支稜線の中位および裾付近に造営される古墳とに大きく分かれる。これは、下味野地域では古墳造営に適した平野に張り出す低丘陵に比較的恵まれず、逆に主稜線上に古墳築造に適した起伏が複数あり、そこからの視覚的効果は絶大で、遠く千代川を隔てた平野部からさえその位置を望むことは可能である。裾部の古墳群との差異を強調するがためにこうした古墳分布になっているものと推察される。現在、古墳群に55基の古墳の分布が確認されている。このうち今回調査した計10基の46～55号墳は、標高100～160mの主稜線から南東へ派生する支稜線の裾部付近に所在する。この支稜線は中位付近で複雑に尾根が分岐しさらに標高60m付近で傾斜が緩やかとなり、東北東へ張り出す尾根筋および南斜面を中心とした標高40～48mに今回の調査古墳が立地する。ちょうど、東面の現在鳥取刑務所が所在する幅300m余りの小平野がすばまって閉じる丘陵部にあたる。また今回の調査地から小谷を隔てた北側尾根標高68～77mで40～44号墳の計5基の調査が平成12年度に行われている⁽¹⁾。眺望的には今回調査の尾根筋から大井手川西岸の小平野(現鳥取刑務所)および東岸の味野平野が見下ろせるものの、逆に平野部から見た場合、東～北東方向の服部・下味野地域からでない調査地を望めない状況がある。

調査地では、東北東へ延びる尾根筋に48～50号墳の3基、その尾根筋の南斜面に52～55号墳の4基、尾根頂部から東南東へ張り出す斜面に51号墳、同じく尾根頂部から北東へ張り出す小尾根の先端に46号墳、鞍部手前に47号墳が配置する。48～55号墳はこの南東に面した範囲に裾部を重複させながら築造されており、重複することにより何らかの意図があったか、あるいは墓域としての範囲が限定されているかのような印象を持つ。古墳の立地の問題については選地の段階から優劣が決まってお⁽²⁾、古墳群の築造は小単位をもとに丘陵地においてある程度計画的で、その地域内において広く認知され、あるいは事前に築造領域が決まっていた可能性も考えられる。

今回、検出した古墳は方墳6基、円墳4基である。このうち方墳は、墳丘の長辺が48号墳が9.5m、49号墳が11.9m、50号墳が14.4mと、尾根高位の50号墳がやや大きく、51号墳の7.8mを加えると、尾根先端側ほど規模が小さくなる傾向にある。円墳の46号墳が径18m級、54号墳が11m級、55号墳が9m級で、46号墳がとりわけ大きな規模である。立地からも、46号墳は調査地内において他とはやや離れた尾根先端を占地し、ある意味独立した空間に築造されていると言える。古墳の築造順は、古墳時代中期の初め、尾根筋の48～50号墳がまず築造され、現況の土層断面からは50号墳→49号墳→48号墳が考えら

れる。その後尾根をやや南東へ下って51号墳、尾根南緩斜面に中期中葉の52号墳、53号墳と築造され、やや時期を置いて古墳時代後期後半に54号墳、終末の55号墳へと続く。46号墳と47号墳については、出土遺物がみられず確実な時期が不明であるが、立地や土層断面から47号墳は46号墳の後出である。

このうち最初に築造されたと考えられる50号墳は、尾根筋に対し墳丘長辺が並行するが48、49号墳は直交し、尾根上の古墳の基数が予め決まっているかのように配置する。尾根筋に対し直交する軸をもつことで尾根高位側により長く平面コ字形の溝を掘削し、その分掘り上げた土を盛土している。こうした今回の方墳の築造を観察すると、低位側は基本的に地山を掘削して裾部を成形し、尾根高位側にコ字形の掘削を行って低位側ほど盛土することで墳丘を造り上げている。これは古墳時代前期にみられる主に地山の削り出しからなる築造とは異なり、49号墳に見られるように断面U字形の溝幅に対し深さがある溝を掘るなど、裾部の成形というより溝の掘削とそれに伴う盛土に主眼を置いているように見受けられる。円墳の築造により近い技法と言える⁽³⁾。また54号墳に関しては、尾根高位側に弧状の大きな溝を掘り、その大量の土を盛土することで高さ4mもの墳丘を造り上げるが、南東側の急斜面に3段の外護列石を施して盛土の流失を防いでいる。予め石列を主眼に置いた古墳というより必要に迫られての施設と考えられ、後出の55号墳に受け継がれることはなかった。ここでも、こうした手狭な空間にあえて古墳を造っているように見られ、加えて南西に開口した石室は背後に連なる48～53号墳の景観も重なりより厳粛な墓域としての領域が示されよう。

埋葬形態は、中心主体に尾根筋の48～50号墳、51号墳は箱式石棺、尾根筋斜面の52、53号墳は52号墳が直葬、53号墳は直葬もしくは木棺直葬を採用する。46号墳は箱式石棺が確認されているが中心主体であるかどうかは疑問が残るところであり、むしろ副次的な埋葬施設と考えられる。54、55号墳はともに両袖式の横穴式石室で55号墳は正方形プランをもつ石室である。また、尾根筋上の中心主体は尾根稜線に対し直交する軸をもち、箱式石棺を採用、このうち尾根上位の49、50号墳は二段墓壙である。こうした尾根筋上の古墳に対し、尾根斜面に立地する52、53号墳は直葬あるいは木棺直葬とみられる。こうした埋葬施設の相違は時期的な違いもあろうが、箱式石棺がこの地域ではあまり浸透しなかった可能性が大きいと考える。下味野古墳群では50号墳にみられるように中期初めにおいて既に箱式石棺を内部主体として受容しており、その後箱式石棺を重用した時期が一定期間あるもののその後用いられなくなる。平成12年度調査のほぼ同様な古墳規模で隣接する箱式石棺の43号墳、後出で木棺直葬の44号墳はその顕著な例であろう⁽⁴⁾。横枕古墳群でも古墳時代全般を通じて中心主体への箱式石棺の採用が認められず⁽⁵⁾、横枕地域を中心としたこの地域の特色とも言える。

さらにこの地域のもう一つの特色である「土器枕」が認められ、箱式石棺に伴い石枕も複数検出された。このうち比較的遺存状態の良好な48号墳第2主体部、49号墳主体部、50号墳主体部の各箱式石棺では両小口側に枕が認められ、同棺複数埋葬と考えられる。また自然石2個を用いた石枕が50号墳の中心主体に検出されており、平成12年度調査の43号墳箱式石棺にも同様の自然石2個を用いた石枕が報告されている。周辺では倭文古墳群で自然石2個を用いた石枕が比較的時期の古い埋葬施設で複数検出されており、箱式石棺採用以前からみられる石枕の古い形態とみられる⁽⁶⁾。次いで49号墳主体部、48号墳第2主体部には板石を逆A字形に組んだ石枕が検出されており、既に逆A字形という形態を概念として認識している。この逆A字形石枕は箱式石棺導入によってその後新たに加わった枕の形式であり、それまでの自然石2個をハ字状に並べる形態が箱式石棺の余材である板石の使用によって変容した可能性が考えられる⁽⁷⁾。また、後出となる52号墳では古来の土器枕の風習が残りながらも、土器枕の形状は高杯脚部内面を中央に据えるという本来の土器枕の概念からやや離れた石枕形態に近い組み合わせ方を採用している。

なお、46号墳の扱いであるが、これは周辺部での調査例からある程度築造時期の推察が可能である。横枕古墳群では、方墳から円墳への移行が遅れるが、当初円墳を築造する際、規模の大きなものが築造

古墳・埋葬施設一覽表

名称	墳 丘		埋 葬 施 設 等					出 土 遺 物		備考	時 期		
	形 状	規 模(m) 長径×短径×高さ	主体部 名	埋 葬 方法等	棺 規 模	墓 壙 等		方 位 (石棺・石室)	埋 葬 施 設			墳 丘・周溝 そ の 他	
					長さ×幅×高さ (m)	平 面 形 態	長さ×幅×深さ (m)						
下味野 46号墳	円墳	18.4×18.1×2.3	主体部	箱式石棺	1.73×0.30×—	隅丸 長方形	2.30×0.62×0.31	N-27°-W	—	—	—	古墳時代 中期	
下味野 47号墳	円墳	7.1×6.5×1.5	主 体 部 流 失					—	—	—	古墳時代 中期		
下味野 48号墳	方墳	9.5×7.5×0.94	第1 主体部	箱式石棺	1.62×0.41×—	隅丸 長方形	2.35×0.87×0.42	N-30°-W	土器細片	—	—	古墳時代 中期	
			第2 主体部	箱式石棺	1.81×0.22×0.22	隅丸 長方形	1.28×0.49×0.27	N-3°-W	板石	—	—	石枕	古墳時代 中期
下味野 49号墳	方墳	11.9×9.8×1.2	主体部	箱式石棺	1.94×0.45×0.38	隅丸 長方形	3.02×1.21×0.65	N-20°-W	刀子2 板石 弥生土器片	弥生土器片	—	石枕	古墳時代 中期
下味野 50号墳	方墳	14.4×12.0×2.0	主体部	箱式石棺	1.83×0.45×0.46	隅丸 長方形	3.48×2.75×1.05	N-4°-W	刀子 高杯 円礫	土器細片	—	土器枕 石枕	古墳時代 中期前葉
下味野 51号墳	方墳	7.8×(5.6)×0.59	主体部	箱式石棺	1.65×0.34×—	隅丸 長方形	2.16×0.58×0.30	N-16°-W	—	管玉 壺	—	礫敷	古墳時代 中期中葉
下味野 52号墳	方墳	8.2×(4.6)×0.95	主体部	直 葬	—	隅丸 長方形	2.37×1.01×0.42	N-54°-E	高杯2 脚 土器細片	高杯	—	土器枕	古墳時代 中期中葉
下味野 53号墳	方墳	7.9×(5.4)×1.01	主体部	直 葬 (木棺直葬)	—	隅丸 長方形	2.49×0.67×0.13	N-52°-E	高杯 角礫	土器細片	—	—	古墳時代 中期
下味野 54号墳	円墳	10.7×10.5×4.25	(横穴式石室)		石室 <1×1.6×—>	隅丸 長方形	3.08×2.30×0.5	N-34°-W	(墓壙) (須)蓋杯 馬具轡	勾玉 土師器片 (須)壺 高杯杯 弥生土器片	—	外護 列石	古墳時代 後期後半
下味野 55号墳	円墳	9.1×(7.6)×1.6	横穴式石室		石室 1.43×1.52×(0.78)	隅丸 長方形	3.55×2.96×0.65	N-69°-W	鉄刀 鉄釘 鉄鏃 (須)蓋杯 壺	土師器片 (須)杯 壺 横瓶 器台	—	—	古墳時代 後期終末
			SX-01	直 葬	—	隅丸 長方形	2.89×1.02×1.02	N-13°-W	弥生広口壺 石	—	—	—	弥生時代 中期中葉
			SX-02	直 葬	—	隅丸 長方形	1.70×0.55×0.48	N-3°-W	弥生壺	—	—	—	弥生時代 中期中葉

()遺存値 < >推定

竪穴住居・段状遺構一覽表

調査区	遺 構 名	平面形	規 模(m)		床面標 高(m)	主軸方向	主 柱穴	壁溝	貼床	中 央 ピット	出 土 遺 物	時 期
			長径×短径	遺存壁高								
A区	SI-01	円形	4.20×(3.80)	0.58	40.79	—	2	有	なし	有	弥生壺 甕 高杯 炭化材	弥生時代中期
B区	SI-02	円形	6.13×(2.14)	0.43	49.75	—	—	有	なし	—	弥生壺 手捏杯 脚 敲石	弥生時代中期
B区	SI-03	隅丸方形	3.96×(3.08)	0.36	51.90	N-24°-W	—	有	なし	—	弥生細片 石	<弥生時代後期>
B区	段状遺構1	L字状	(8.46)×(1.94)	0.57	52.70	N-50°-W	—	—	—	—	弥生壺 甕 石	弥生時代中期
B区	段状遺構2	L字状	(12.98)×(1.82)	0.60	52.33	N-38°-W	—	—	—	—	弥生壺 甕 高杯 石砲丁 磨石	弥生時代中期
B区	段状遺構3	L字状	(4.10)×(1.83)	0.58	50.06	N-48°-W	—	—	—	—	弥生細片 石斧 磨石	弥生時代中期

()遺存値 < >推定

土坑・溝状遺構・土器溜・溝状石列一覽表

調査区	遺構名	法 量(cm)			床面標高(m)	主軸方向	平 面 形	断 面 形	出 土 遺 物 等	時 期
		長径	短径	深さ						
A区	SK-01	90	79	18	43.64	—	不整円形	椀 状	—	—
A区	SK-02	80	71	14	41.15	—	不整円形	椀 状	—	—
A区	SK-03	<89>	73	18	43.37	—	不整円形	椀 状	—	—
A区	SK-04	<89>	79	25	44.85	—	不整円形	椀 状	—	—
A区	SK-05	79	78	14	44.43	—	不整円形	椀 状	—	—
A区	SK-06	106	90	18	39.40	—	不整円形	不整椀状	—	—
A区	SK-07	114	112	78	40.31	—	不整円形	不整U字状	—	—
A区	SK-08	97	77	46	46.15	N-62°-E	不整楕円形	椀 状	—	—
B区	SK-09	84	(55)	38	50.14	N-24°-E	<隅丸方形>	<逆台形>	土器細片	—
B区	SK-10	227	69	21	51.92	N-78°-E	不整隅丸長方形	不整皿状	(須)高杯	古墳時代後期
A区	SD-01	680	130	40	40.50	—	弧 状	椀 状	弥生体部 底部 脚部	弥生時代中期
A区	SD-02	840	120	33	40.38~41.87	N-45~69°-W	不整形	不整形	(須)壺 角礫	—
B区	土器溜	290	213	51	48.60	N-46°-E	不整馬蹄形	皿 状	土師器壺 甕	古墳時代
A区	溝状石列	283	192	35	43.29	N-18°-E	L字形	—	—	—

()遺存値 < >推定

されるという傾向がある⁽⁸⁾。こうした規模の大きな円墳の造営は、市域で前方後円墳の築造が始まり墳丘規模の大型化が中期前半期に頂点に達するが、そうした動きは円墳においても連動し、一時的に古墳が大形化する傾向が見受けられる。平成12年度調査の下味野古墳群では40号墳が例となろう。こうした背景を元に46号墳の築造時期は中期前半代が想定され、48～53号墳が築造される尾根筋の古墳とは一線を介する。

このように、下味野古墳群では、横枕古墳群地域とは特色を重複させながらもやや異なる様相も垣間見え、横枕領域とはやや異なったまとまりを有していたと考えられる。中期に入ってから方墳を用い、箱式石棺を中心主体に採用、棺内には土器および石枕を設ける。ただ、下味野古墳群内では一括してこれらの要素が採用された訳でなく、尾根単位で受け入れ方も異なっていたようである。平成12年度調査では箱式石棺採用後も木棺直葬が用いられ、方墳後に隅丸形状の円墳の採用、尾根筋での築造順など、一律的に規則性はみられない。また今回、時期的に木棺から箱式石棺への推移などの新規要素を受け入れていく過程はあまり認められなかったが、小規模な集団においても中期前半代の古墳の大形化をもって古墳時代の大きな流れはある程度反映されていると思われる。平成12年度および今回の調査だけでは下味野古墳群の全容を推し測ることは到底無理であるが、南に隣接する篠田古墳群⁽⁹⁾や横枕古墳群、倭文古墳群などもある程度念頭に入れて検討することで様々な具体相が明らかになるであろう。ただ、基本的な古墳の分布状況など現状では下味野古墳群をはじめ周辺地域で綿密な古墳の踏査が十分とは言えず、古墳群の構成を明らかにする上でも今後に残した課題は多い。

以上、千代川左岸の丘陵部で古墳群の調査が進んでおり、倭文、横枕、篠田、下味野、服部古墳群でその内容が明らかとなった。現在整理中の倭文古墳群の調査では、古墳時代初頭、丘陵下位に台状墓塚の土壙墓群が築造され、やがて丘陵上に前期の方墳が相次いで築造されていく。周辺で明確な弥生墳墓は未確認であるが、古墳時代初め既に地域勢力としての台頭は明らかである。古墳時代中期末、小規模古墳ながら豊富な武器・武具類が副葬された倭文6号墳の被葬者は、小地域集団の長ではありながら対外的には軍事的に重要な役割を果たしていたとみられ、前期古墳の存在を知りながらもあえてその上に盛土して6号墳を築造した背景には千代川を見下ろす立地に特にこだわった結果と考えられる。千代川左岸の横枕を中心とした地域では、湖山池南東岸地域、鳥取平野南部地域に対し、千代川の水運を背景に第3勢力とでも言うべき一大勢力があったことは明白で、今後、それぞれの地域を比較検討することで鳥取平野地域の古墳時代の動向がより明らかになっていくものと思われる。

弥生時代の埋葬施設について

古墳に伴わない埋葬施設として、SX-01、02を検出した。49号墳の北西墳裾部に位置することから、当初、49号墳第2、第3主体部として登録していた埋葬施設である。尾根稜線からやや下った北側斜面に、斜面の傾斜に対し並行する軸方向に主軸をとり、SX-01、02はほぼ並列する。床面近くで出土した土器によって、弥生時代中期の土壙墓であることが判明した。周辺に区画溝のようなものは認められず、これらが単独で立地するの否かなど、詳細は不明である。ただ、古墳時代の土壙墓に比べて幅に対し長さおよび深さがあり墓壙規模が全体的に大きいことが特徴として挙げられる。

この周辺で弥生時代の墳墓は、服部墳墓群で後期後葉の墳墓が3基⁽¹⁰⁾、釣山で古墳時代後期初頭の土器棺が1基⁽¹¹⁾、これが弥生時代中期となると、郡家町万代寺遺跡の土壙墓群⁽¹²⁾が調査事例となるが、段丘状の平野部に築造された方形周溝墓と考えられ、同一の扱いはできない。丘陵上の土壙墓の調査事例は、千代川右岸の鳥取平野南部丘陵で六部山古墳群の古墳時代後期前葉の土壙墓2基(このうち1基は木棺)が造営されており⁽¹³⁾、斜面高位にコ字形の区画溝を有する。いずれにせよ、今回SX-01、02は後期に入って墳丘墓が造営される時期以前の調査事例として、また、床面に厚い整地層があり、石枕ともみられる礫の存在など⁽¹⁴⁾、貴重な調査事例となった。

下味野童子山遺跡について

下味野童子山遺跡は、下味野古墳群の調査に伴い、偶然発見された遺跡である。A区で弥生時代中期の竪穴住居1棟、溝状遺構2条、土坑8基、溝状石列、B区で竪穴住居2棟、段状遺構3基、土坑2基、土器溜を検出している。このうち時期の明らかな弥生時代中期中葉の竪穴住居SI-01は、北東へ下る標高41mに1棟単独で立地する。平野から比高差26m余りあるが見通しが比較的利かない立地で、谷まで20mほどの距離をおき水は比較的得やすい。径4mと小規模で、斜面高位側に弧状の溝を切り、主柱穴2本の構造で中央ピットをもち、焼失住居である。床面上に壺類が多く残されており⁽¹⁵⁾、周囲での石斧類の出土など、ある期間定住した住居であったと考えられる。また、SI-01は焼土を多く検出しており、屋根は土葺きであった可能性も考えられる。また、48～50号墳の立地する尾根上では、特に49号墳の墳丘上および52号墳、54号墳周溝埋土中に弥生土器片が出土しており、生活面は尾根筋にもひろがっていたと考えられる。これに対しB区では、径6m弱のSI-02が尾根筋の標高50mを測る東南東斜面に立地し、その尾根筋をやや下った北東斜面に段状遺構が連なるといった配置になる。また、弥生時代後期と考えられるSI-03や時期不明のSK-09、古墳時代後期のSK-10など、土器溜の状況から、古墳時代中期、後期においてもこの尾根上で何らかの活動があったことは明らかである。尾根の崩れが著しく尾根の断面から自然地形とは考え難い地層の観察もなされたが、この尾根に古墳が築造された可能性も残すものの、その明確な根拠は明示できなかった。

丘陵部に住居が確認された例は、弥生中期の例では、古海古墳群調査時に標高27～30mで竪穴住居が調査されている⁽¹⁶⁾。南西尾根先端部に立地する中期中葉の径6m弱を測る6本柱の円形住居である。鳥取平野地域では、西大路土居遺跡で中期前葉、古郡家遺跡で中期後葉の掘立柱建物、千代川左岸では湖山第2遺跡で中期初頭、中期中葉、布勢第2遺跡で中期末の竪穴住居、岩本第2遺跡では中期後葉の径10.2mを測る大形の竪穴住居が検出されている。この他中期に丘陵上に生活の痕跡が認められる例は近年の調査から、平成12年度の横枕集落背後丘陵における古墳の調査に伴い標高100m付近や下味野古墳群の調査でも標高75m付近で確認されるなど各地でその例が増加しつつある。しかし弥生時代中期にまとまった竪穴住居が検出される例はあまりない。同一丘陵上に径6m弱の竪穴住居と複数の段状遺構が検出され、この丘陵上に一時的に生活基盤を置いていたことは遺物の出土量からも明瞭で、そうした意味で今回の調査例は丘陵地における集落形態を示す貴重な事例となろう。その後後期に入って千代川左岸では西桂見遺跡や桂見遺跡、湖山第1、2遺跡などで増え始め後期後半以降住居が各地で急増する傾向がある。もともと鳥取平野地域では丘陵上を覆い尽くすほど集約する集落形態をとらないものと考えられる。いずれにせよ、弥生時代中期後半、後期と集落遺跡が台頭、拡散していく中で、後期後葉からの遺跡数の拡大は因幡地方においても顕著である。その中でも墳墓とセット関係にある集落跡の所在確認は重要課題である。下味野地域では服部集落西の、標高7～8mの微高地に服部遺跡が内包されており、弥生時代中期土器、後期の土器とともに田下駄、大足などの木製品が出土している⁽¹⁷⁾。やや北東に1.5km離れて本高円ノ前遺跡⁽¹⁸⁾、2.5km離れた山ヶ鼻、菖蒲遺跡では弥生時代中期中葉を一つの盛期とした様相が明らかとなっており、この他にも千代川左岸地域に弥生時代中期の集落遺跡が内包されている可能性は大きいと思われる。鳥取平野を見渡すと、この地域に弥生中期の遺跡が集中する傾向が窺える。今後の調査により、古墳群を造営した人々、造営の基盤を作った人々の集落の存在は徐々に明らかとなってくるものと考えたい。

註

- (1) 鳥取市文化財団『下味野古墳群Ⅰ』2002年
- (2) 横枕古墳群の調査から、古墳築造に際し同一丘陵においても立地的な優劣が既に古墳時代前期段階で見受けられ、その関係は中期代へも継続する状況が認められる。(鳥取市文化財団『横枕古墳群Ⅱ』2003年)
- (3) (1)と同。下味野41～44号墳は尾根先端から築造されており、このうち42～44号墳は墳形は円墳とされるが丸味のある隅丸方形

に近く、方墳から円墳へ移行する際、こうした方墳とも円墳とも判別の付き難い形状の古墳が造営されたとみられる。また、42～44号墳は初期の方墳の主に地山の墳裾削り出しからなる築造方法とは異なり、周囲に周溝を掘削しその土を盛土することで墳丘を造り上げている。こうした面から、円墳としての意識は強く反映されていると考えられる。

- (4) (1)と同。
- (5) 横枕古墳群では現在のところ中心主体での箱式石棺の採用が認められない。(勸鳥取市文化財団『横枕古墳群Ⅱ』2003年)
- (6) 2003年度、(勸鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財調査センターが倭文古墳群の調査を行った。2004年度報告書刊行予定。
- (7) 高杯3点を用いた土器枕については、箱式石棺導入後の板石を用いた逆A字形石枕形態の影響を受けて成立した可能性がある。ただ、箱式石棺も当初は磔2点あるいは板石1枚を置いた枕であり、その後板石2枚を用いたV字形枕から逆A字形石枕へと変遷し、石枕として完成された様式である逆A字形石枕成立の契機は逆に高杯3点以前の土器枕の概念が強く反映されたものと考えられる。
- (8) (2)と同。
- (9) 2002年度、(勸鳥取市文化財団埋蔵文化財調査センターが篠田古墳群の調査を行った。2003年度報告書刊行予定。
- (10) (勸鳥取市文化財団『服部墳墓群』2001年)
- (11) 鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団『釣山古墳群発掘調査概報』1991年
- (12) 郡家町教育委員会『万代寺遺跡発掘調査報告書』1983年
- (13) (勸鳥取市教育福祉振興会『六部山古墳群Ⅱ』1995年)
- (14) これまで鳥取平野周辺で最も古い石枕例は、弥生時代後期前葉、滝山猿懸平2号墓で自然石2個を用いた例が知られる。(勸鳥取市教育福祉振興会『滝山猿懸平墳墓群』2000年)
- (15) SI-01から出土した土器はその特徴から概ね清水真一氏の編年でⅢ-3段階に比定できると考える。
清水真一「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年——山陽・山陰編』1992年木耳社
- (16) (勸鳥取市教育福祉振興会『古海古墳群・菖蒲遺跡』1993年)
- (17) 久保稔二郎「弥生時代の集落立地について」『鳥取県立博物館研究報告第27号』1990年
- (18) (勸鳥取市文化財団『本高円ノ前遺跡』2004年)

圖

版



下味野古墳群・下味野童子山遺跡調査地遠景(北東上空から)



下味野古墳群・下味野童子山遺跡調査地及平成12年度調査地遠景(南東上空から)

図版 2



下味野古墳群・下味野童子山遺跡調査前(北東上空から) 下味野古墳群・下味野童子山遺跡調査地全景(北東上空から)

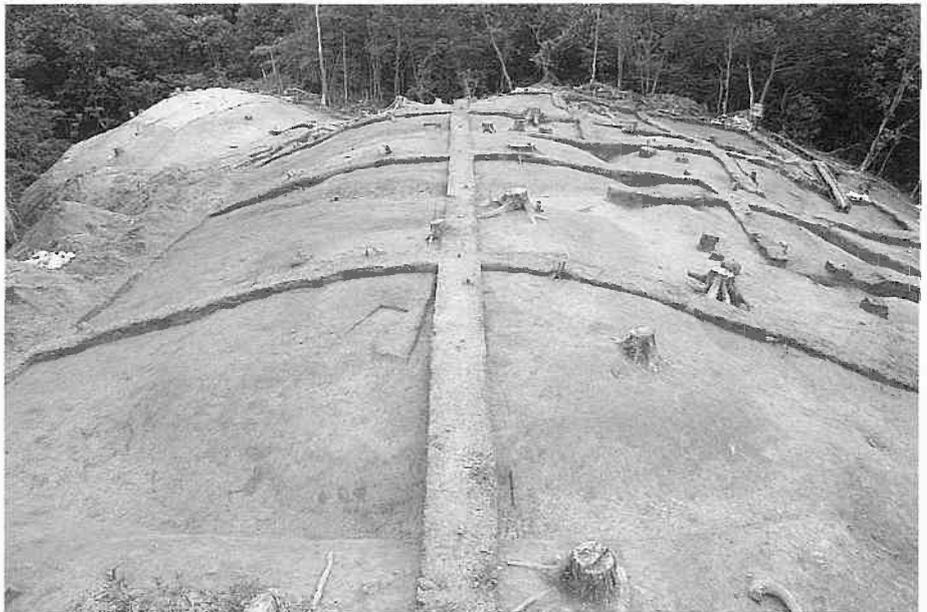


下味野古墳群・下味野童子山遺跡 A 区全景(南東上空から)

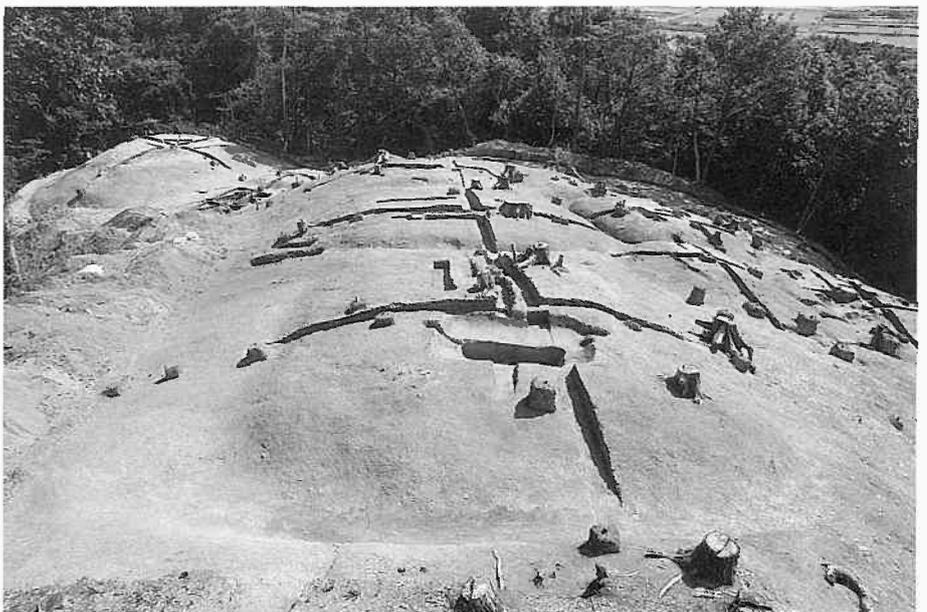
下味野古墳群
下味野童子山遺跡 A 区
調査前
(南西から)



下味野古墳群
下味野童子山遺跡 A 区
土層ベルト設定状況
(南西から)



下味野古墳群
下味野童子山遺跡 A 区
全景
(南西から)



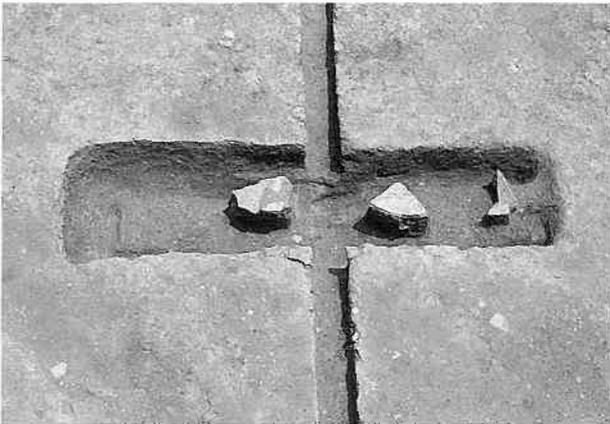
図版 4



下味野46号墳土層ベルト設定状況(南西から)



下味野46号墳完掘状況(南西から)



下味野46号墳主体部検出状況(南西から)



下味野46号墳主体部完掘状況(北西から)



下味野47号墳土層ベルト設定状況(北西から)



下味野47号墳墳丘遺存状況(北西から)



下味野48号墳土層ベルト設定状況(北東から)



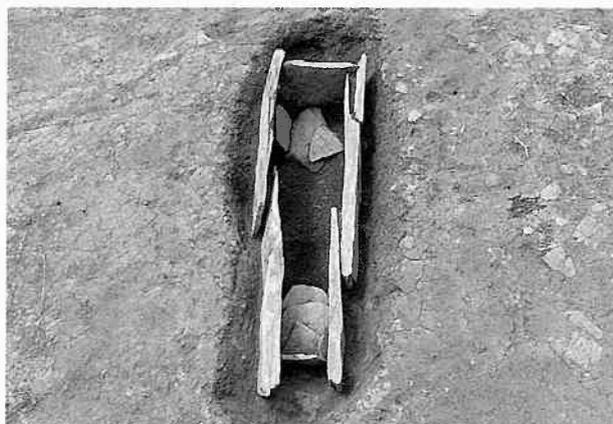
下味野48号墳完掘状況(南西から)



下味野48号墳第1主体部検出状況(南東から)



下味野48号墳第1主体部完掘状況(南東から)



下味野48号墳第2主体部検出状況(北から)



下味野48号墳第2主体部完掘状況(北から)



下味野49号墳土層ベルト設定状況(北東から)



下味野49号墳全景(南西から)



下味野49号墳主体部断面上層(南東から)

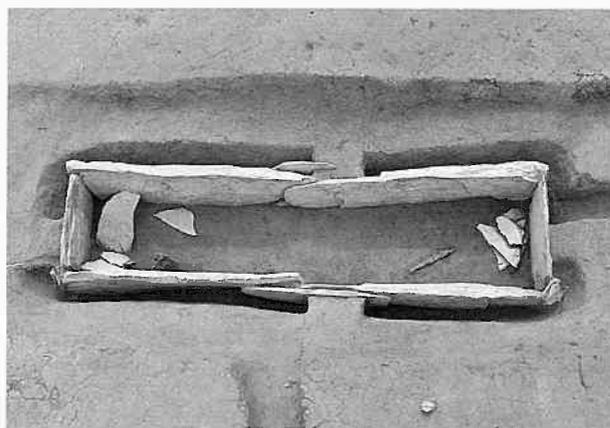


下味野49号墳石棺蓋石検出状況(北西から)

図版 6



下味野49号墳石棺検出状況(北西から)



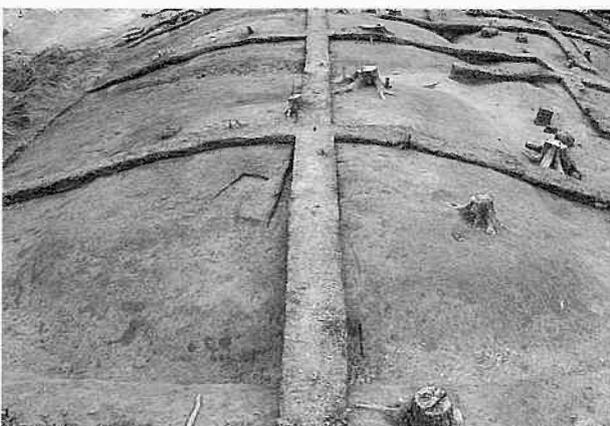
下味野49号墳石棺検出状況(北東から)



下味野49号墳石棺内遺物出土状況(北西から)



下味野49号墳主体部完掘状況(北東から)



下味野50号墳土層ベルト設定状況(南西から)



下味野50号墳完掘状況(南西から)



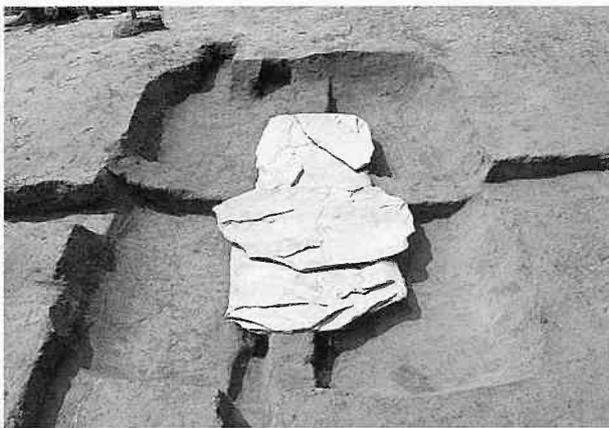
下味野50号墳南西周溝土層断面(南東から)



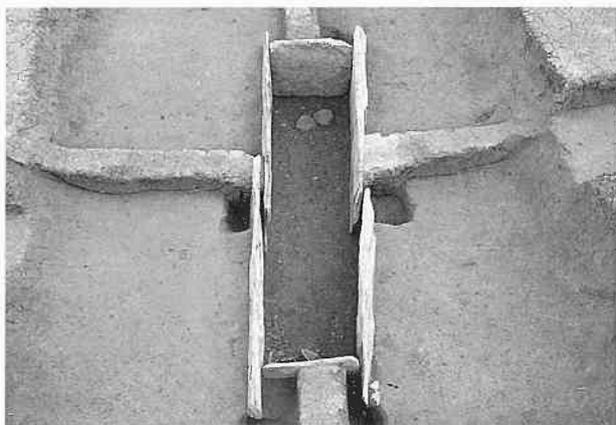
下味野50号墳墳丘断面南側(南東から)



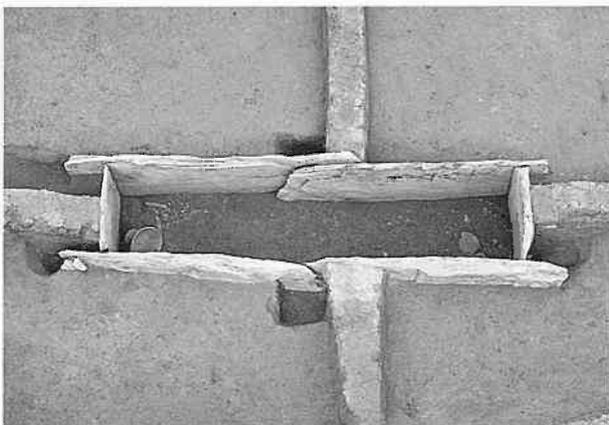
下味野50号墳主体部断面上層(西から)



下味野50号墳石棺蓋石状況(北から)



下味野50号墳石棺検出状況(北から)



下味野50号墳石棺検出状況(西から)



下味野50号墳石棺内遺物出土状況(南から)



下味野50号墳主体部完掘状況(東から)



下味野51号墳全景(南西から)



下味野51号墳西周溝土層断面(南西から)

図版 8



下味野51号墳主体部検出状況(北西から)



下味野51号墳主体部完掘状況(南東から)



下味野52号墳土層ベルト設定状況(北東から)



下味野52号墳全景(北西から)



下味野52号墳主体部検出状況(北東から)



下味野52号墳主体部遺物出土状況(北東から)



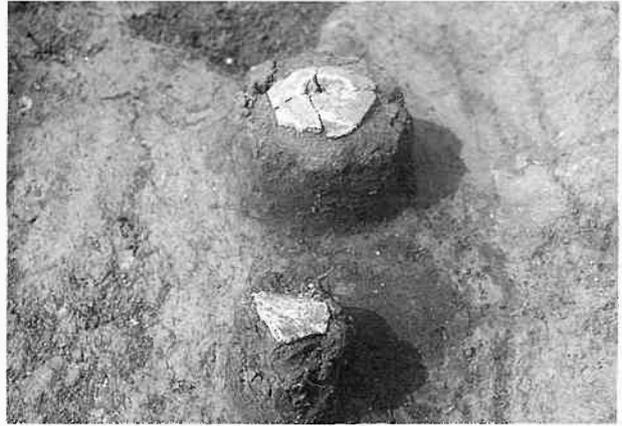
下味野53号墳土層ベルト設定状況(北東から)



下味野53号墳全景(北西から)



下味野53号墳主体部検出状況(南西から)



下味野53号墳主体部遺物出土状況(北東から)



下味野54号墳土層ベルト設定状況(北東から)



下味野54号墳全景(北西から)



下味野54号墳全景(北東から)



下味野54号墳列石検出状況(北東から)



下味野54号墳墳丘断面列石部分(北東から)



下味野54号墳主体部断面(南西から)

図版10



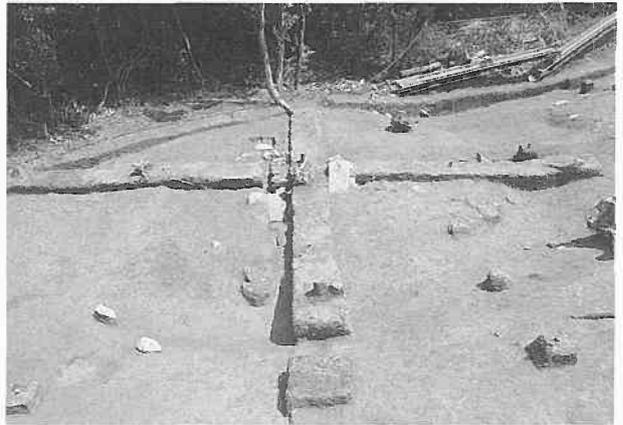
下味野54号墳主体部検出状況(北東から)



下味野54号墳主体部遺物出土状況(南西から)



下味野55号墳調査前(南西から)



下味野55号墳土層ベルト設定状況(北西から)



下味野55号墳全景(北西から)



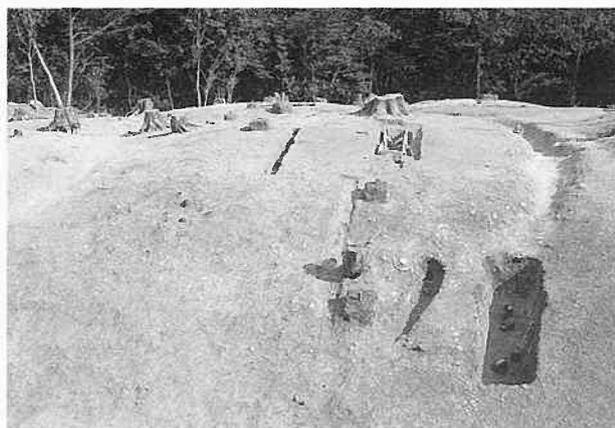
下味野55号墳石室検出状況(北東から)



下味野55号墳石室内遺物出土状況(北東から)



下味野55号墳石室内遺物出土状況(南東から)



下味野49号墳裾SX-01・02検出状況(北西から)



下味野古墳群SX-01土層断面(北西から)



下味野古墳群SX-01検出状況(北西から)



下味野古墳群SX-02検出状況(北西から)



下味野童子山遺跡A区SI-01焼土検出状況(南東から)



下味野童子山遺跡A区SI-01完掘状況(北西から)



下味野童子山遺跡A区SI-01遺物出土状況(北東から)



下味野童子山遺跡A区SI-01遺物出土状況(北東から)

図版12



下味野童子山遺跡 A 区SK-01検出状況(南東から)



下味野童子山遺跡 A 区SK-02検出状況(北西から)



下味野童子山遺跡 A 区SK-03検出状況(南東から)



下味野童子山遺跡 A 区SK-04検出状況(南東から)



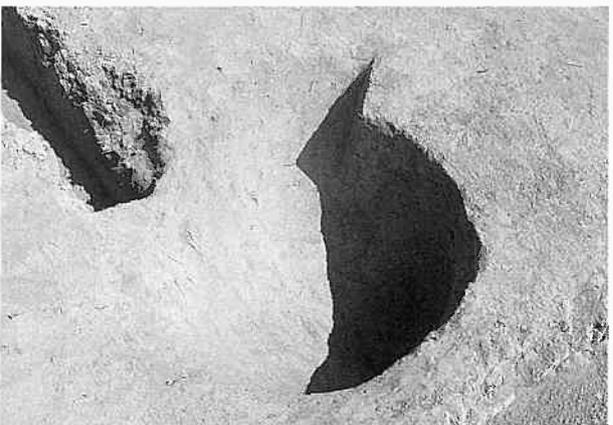
下味野童子山遺跡 A 区SK-05検出状況(南東から)



下味野童子山遺跡 A 区SK-06検出状況(南西から)



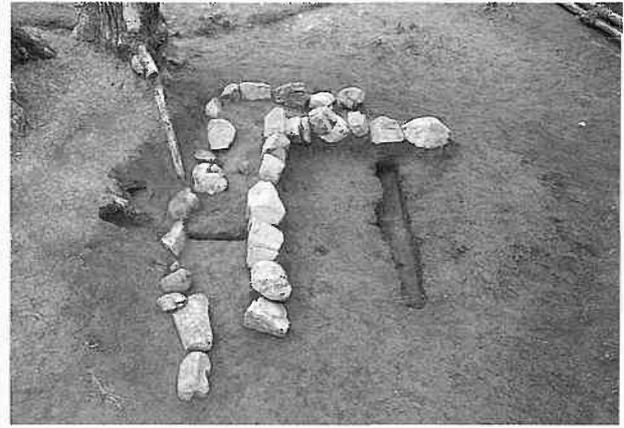
下味野童子山遺跡 A 区SK-07検出状況(北西から)



下味野童子山遺跡 A 区SK-08検出状況(南から)



下味野童子山遺跡 A 区SD-02検出状況(南から)



下味野童子山遺跡 A 区溝状石列検出状況(南西から)



下味野童子山遺跡 B 区SI-02検出状況(南東から)



下味野童子山遺跡 B 区SI-02検出状況(南西から)



下味野童子山遺跡 B 区SI-03土層断面(南東から)



下味野童子山遺跡 B 区SI-03検出状況(南西から)



下味野童子山遺跡 B 区段状遺構 1・2 土層断面(南東から)

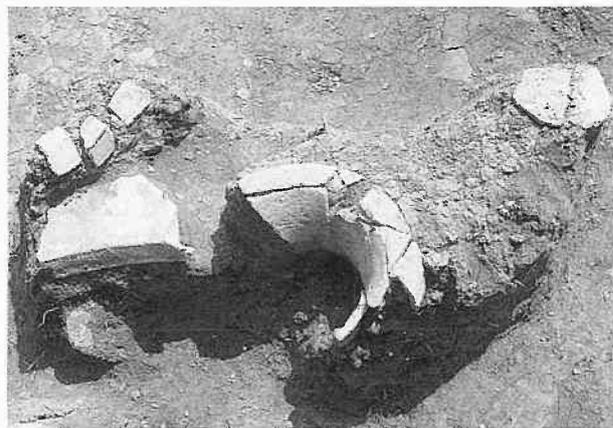


下味野童子山遺跡 B 区段状遺構 1・2 検出状況(南東から)

図版14



下味野童子山遺跡B区段状遺構1・2遺物出土状況(南東から)



下味野童子山遺跡B区段状遺構1遺物出土状況(北西から)



下味野童子山遺跡B区段状遺構3検出状況(南東から)



下味野童子山遺跡B区土器溜検出状況(北西から)



下味野童子山遺跡B区SK-09土層断面(北東から)



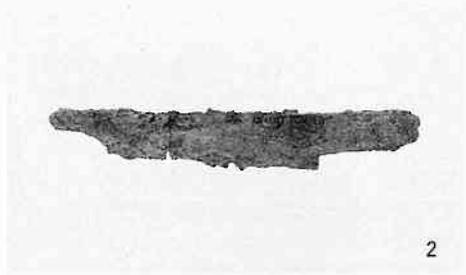
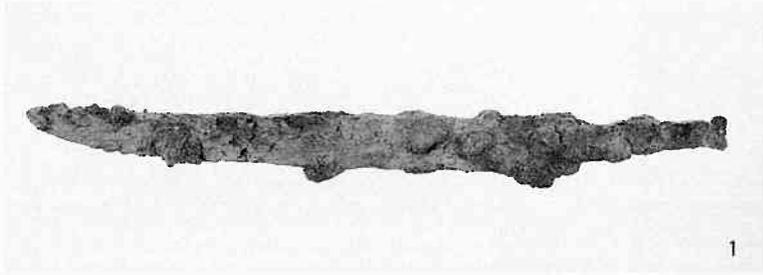
下味野童子山遺跡B区SK-09検出状況(南から)



下味野童子山遺跡B区SK-10検出状況(西から)



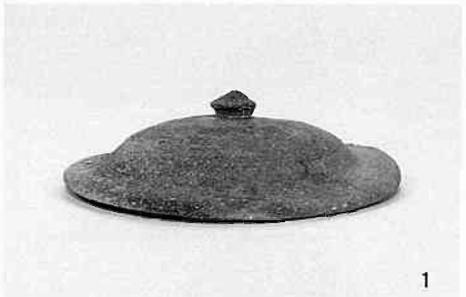
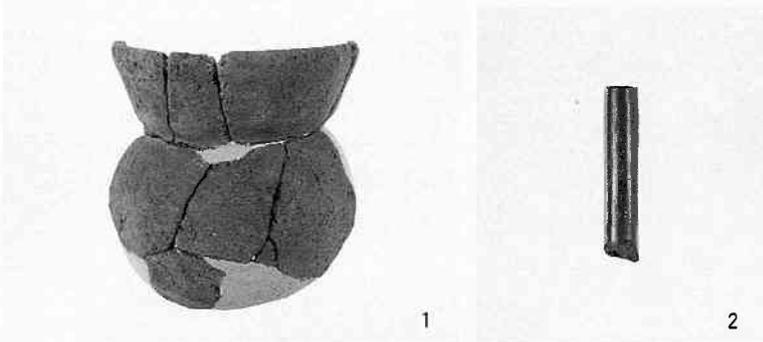
下味野童子山遺跡B区SK-10遺物出土状況(北から)



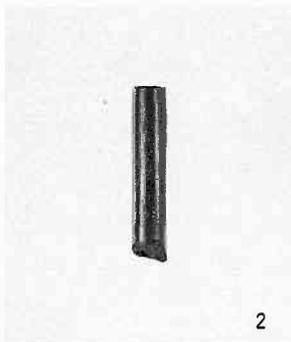
下味野49号墳主体部出土遺物



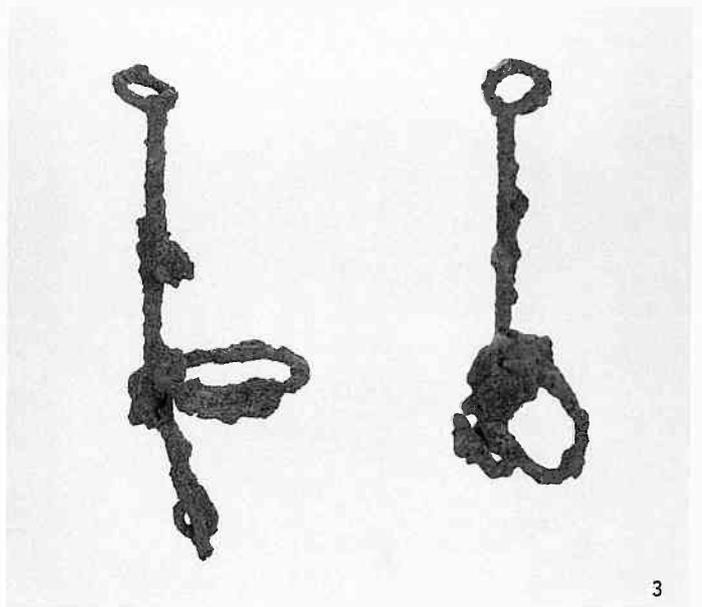
下味野50号墳主体部出土遺物



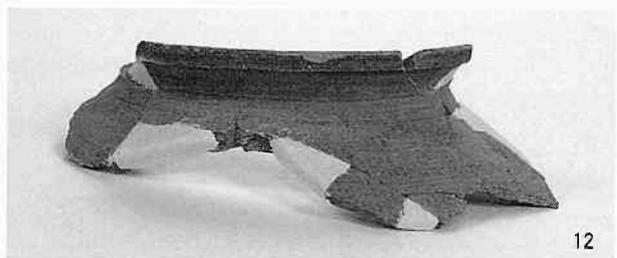
下味野51号墳出土遺物



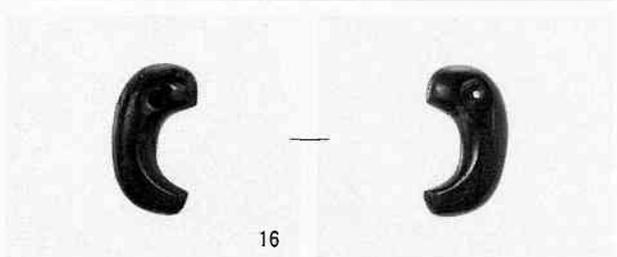
下味野52号墳主体部出土遺物



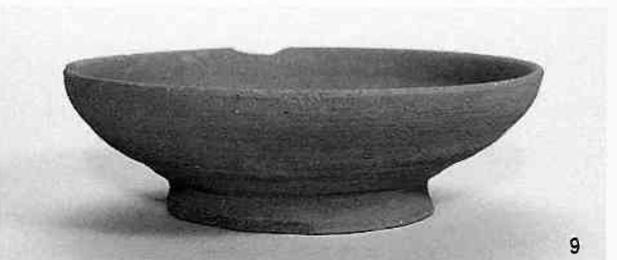
下味野54号墳主体部出土遺物



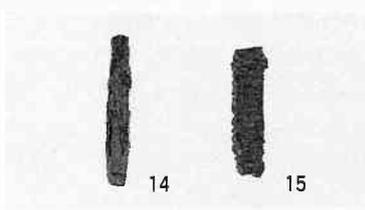
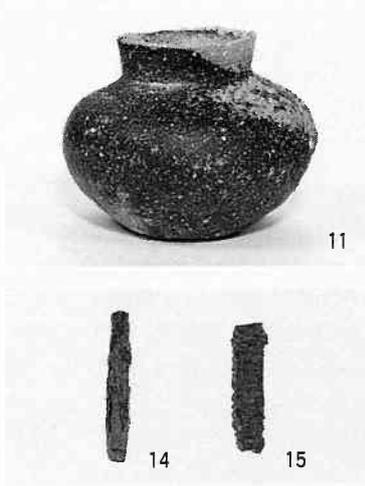
下味野54号墳出土遺物



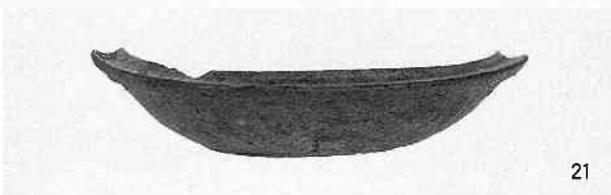
下味野54号墳出土遺物



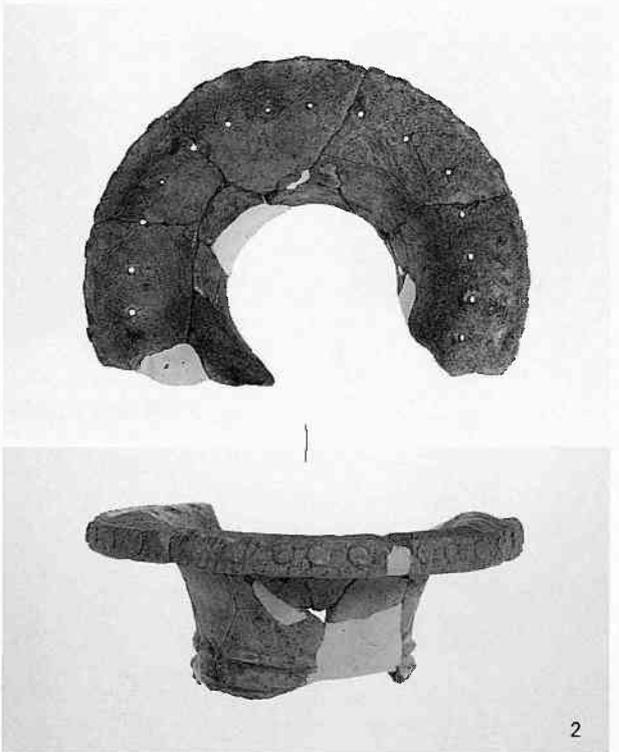
下味野55号墳石室内出土遺物



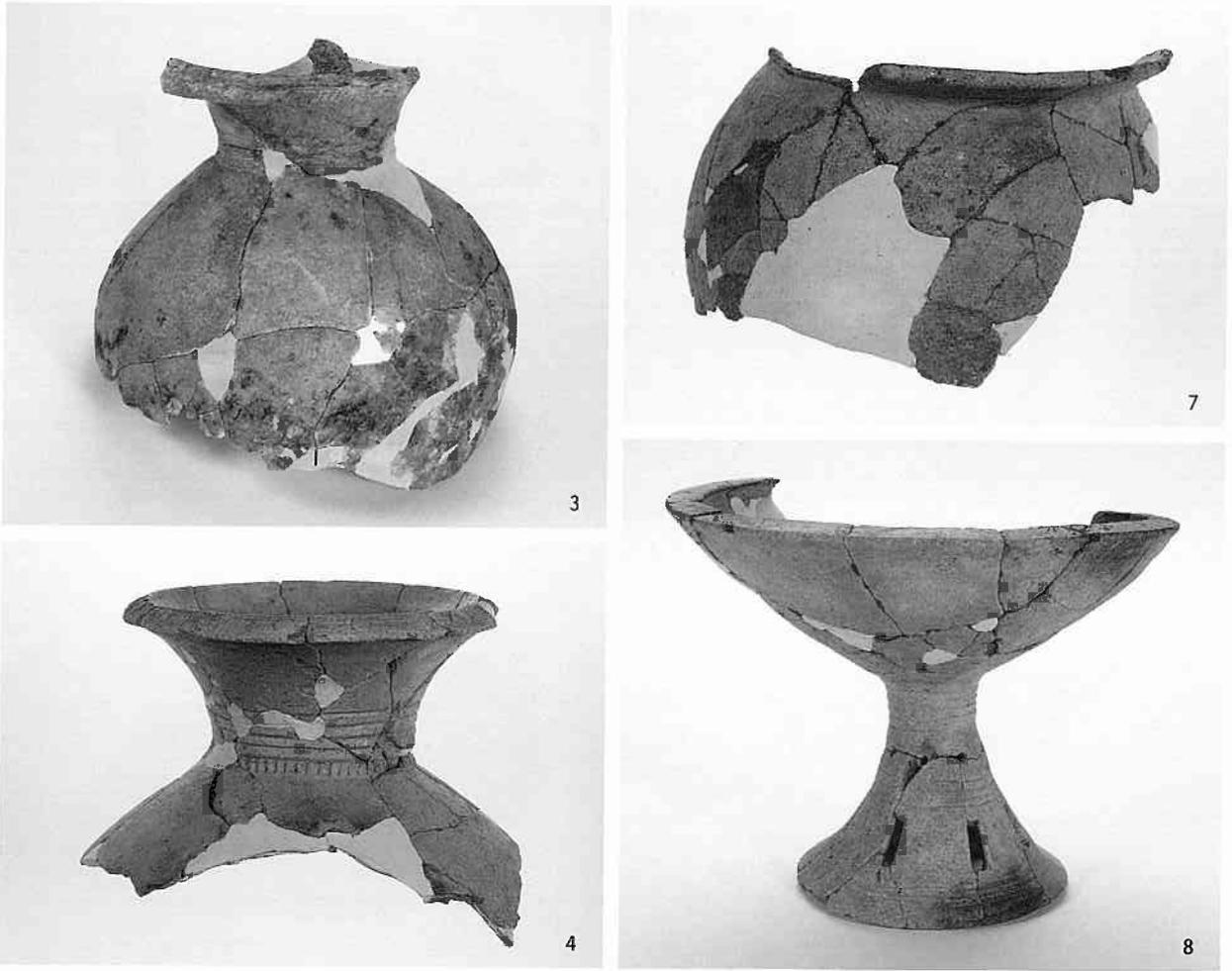
下味野55号墳石室内出土遺物



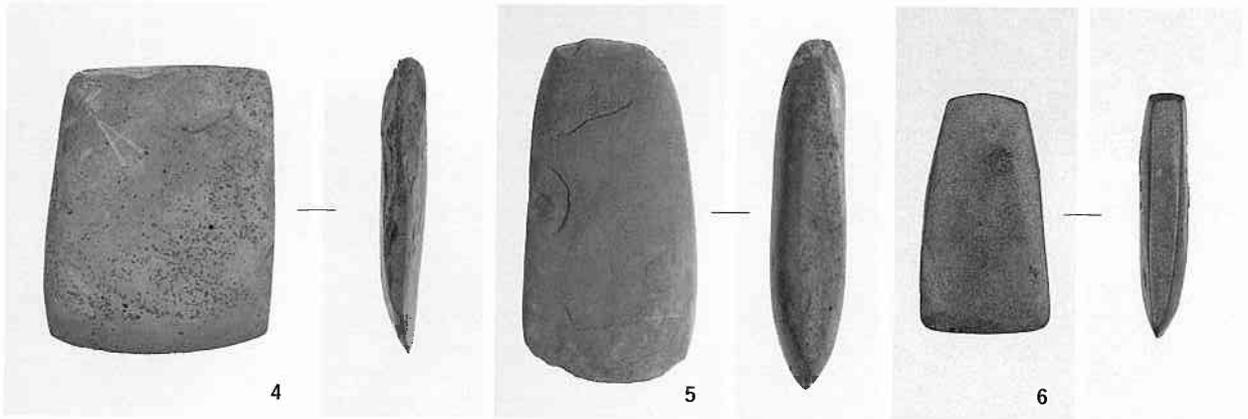
下味野55号墳出土遺物



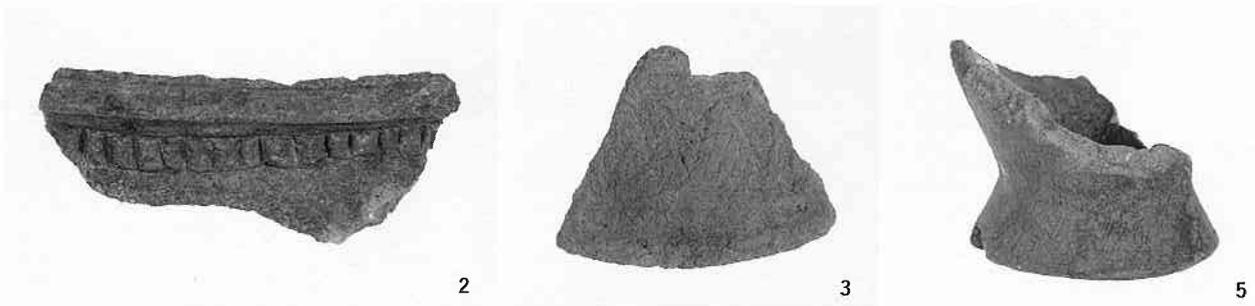
下味野童子山遺跡 A区SI-01出土遺物



下味野童子山遺跡A区SI-01出土遺物



下味野童子山遺跡A区遺構外出土遺物

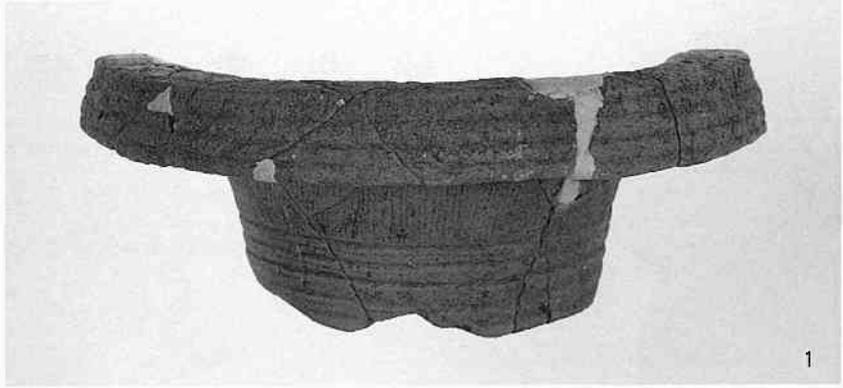


下味野童子山遺跡B区SI-02出土遺物



4

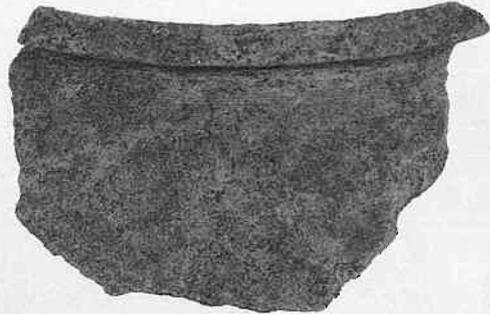
下味野童子山遺跡B区SI-02出土遺物



1

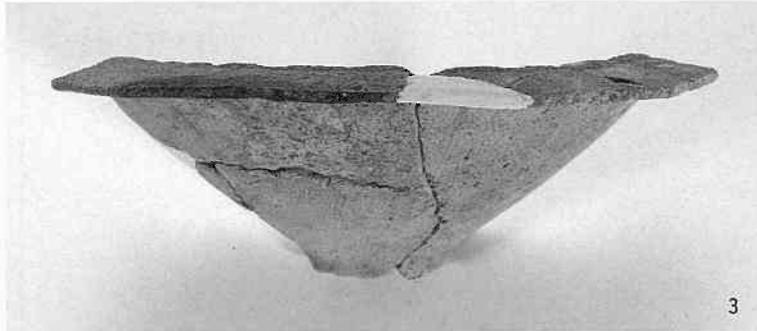


2

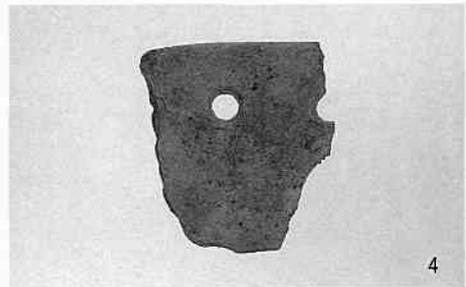


2

下味野童子山遺跡B区段状遺構1出土遺物

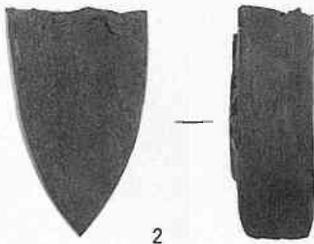


3

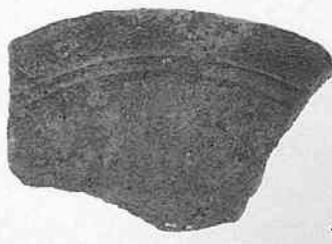


4

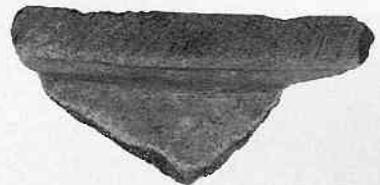
下味野童子山遺跡B区段状遺構2出土遺物



2



1



3

下味野童子山遺跡B区段状遺構3出土遺物

下味野童子山遺跡B区段状遺構1・2北側出土遺物



1



2

下味野童子山遺跡B区SK-10出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	しもあじのこふんぐんⅡ・しもあじのどうじやまいせき							
書名	下味野古墳群Ⅱ・下味野童子山遺跡							
副書名	中国横断自動車道姫路鳥取線整備促進関連事業に係る下味野46～55号墳、下味野童子山遺跡の発掘調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	谷口恭子							
編集機関	財団法人 鳥取市文化財団							
所在地	〒680-0015 鳥取県鳥取市上町88 TEL (0857) 23-2410							
発行年月日	西暦 2004年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
しもあじのこふんぐん 下味野古墳群 46～55号墳	とっとりし 鳥取市 しもあじの 下味野	31201		35° 27′ 40″	134° 11′ 44″	20030508) 20030831	計2,400	姫鳥線 (中国横断自動車道) 整備促進関連事業に 伴う調査
しもあじのどうじやまいせき 下味野童子山遺跡				35° 27′ 39″	134° 11′ 42″			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
下味野古墳群	古墳	古墳時代 前期) 後期	古墳 10基	土師器 須恵器 鉄製品 鉄刀・刀子 釘 馬具(轡) 玉類 碧玉製勾玉・管玉		・箱式石棺内に石枕 ・土器枕。 ・前面に外護列石を もつ後期円墳。 ・弥生時代中期の土 壙墓。 ・弥生中期の焼失住 居内からまとまっ た土器出土。		
		弥生時代 中期	土壙墓 2基	弥生土器				
下味野童子山遺跡	集落	弥生時代 中期 後期 古墳時代	竪穴住居 3棟 段状遺構 3基 土坑 土器溜 溝状遺構 溝状石列遺構	弥生土器 石製品 石斧 石庖丁				

下味野古墳群Ⅱ
下味野童子山遺跡

—中国横断自動車道姫路鳥取線整備促進事業に係る
下味野46～55号墳、下味野童子山遺跡の発掘調査—

平成16年3月31日 印刷・発行

編集・発行 財団法人 鳥取市文化財団

印刷所 勝美印刷株式会社
